

転生者と鬼の戦い

雷電風雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

進撃の巨人、皆さんはご存知であろう。

彼はその世界を生き、戦って死んだ。

そして彼はまた新たな生を受けて鬼滅の刃の世界へと飛ばされる。

しかし彼が飛ばされた世界は、あまりにも見覚えがあった。

これは、彼とその記憶が鍵になる世界を描いた物語である。

記憶を持ったつていうのは原作知識ではなく、

現実世界や原作開始前の世界についての記憶です。

目次

第壹話 全てはここから始まった

1

第貳話 鍛錬を開始します。頑張りやが

れください | 10

第参話 最終選別、戦闘開始 | 18

第肆話 因縁と少女 | 26

第伍話 初陣 | 36

第陸話 狂鬼と鷹 | 44

第Ⅹ話 銃と虎咲 | 51

オリキャラ集 | 60

第捌話 お呼び出し | 71

第玖話 絶望と憎悪の始まり | 79

第拾話 戦闘はいつも唐突に | 89

第拾壹話 模倣は最強なり | 103

第拾貳話 毎度お馴染み柱合会議

112

第拾参話 呪われた兵士 | 121

第拾肆話 柱になって最初の任務

131

第拾伍話 暇人たちの休暇 | 143

第拾陸話 第一次上弦戦 | 154

第拾漆話 鷹と蝶と狐 | 164

第拾捌話 魔改造と機関銃 | 176

第拾玖話 事後です、は？ | 188

第貳拾話 完成に向けて | 198

第貳拾壹話	調整と完成	207
第貳拾貳話	戦闘！第二清水町！	215
第貳拾参話	水バカと火力バカ	225
第貳拾肆話	修復と毒	232
第貳拾伍話	那田蜘蛛山	239
第貳拾陸話	裁判と破壊	248
第貳拾漆話	戦果報告と愚痴	256
第貳拾捌話	久しぶりの休暇	266
第貳拾玖話	無限列車	274
第参拾話	夢と現実	283
第参拾壹話	土方美羽	291
第参拾貳話	戦え、抗え、奴を消すためな	

ら		302
第参拾参話	均衡の崩れ	310
第参拾肆話		319
第参拾伍話	宇髄天元	327
第参拾陸話	第二清水町と遊郭	335
第参拾漆話	赫刀と烏	343

第壱話 全てはここから始まった

1850年ー ウオールシーナ ストヘス区

「野郎ぶつ殺してやらああああああー！」

彼ら調査兵団は巨人に姿を変えられる

「アニ・レオンハート」と対峙していた。

現在、ヒイロ・ハルトマンは17歳、103期生の1人だ。

教官から「お前は突っ込みすぎだ」とよく言われた兵士だが、

まさかそれが死因になるとは彼も思わなかっただろう。

「ヒイロさん！突出しすぎです！」

「シユウか!?大丈夫だ！こんぐらいどうとでも…！」

その瞬間シユウと呼ばれた兵士が叫ぶ。

「ヒイロさん！」

「な!？」

ヒイロが気が付けば目の前に巨人の手が広がっていた。

あるベテラン兵士が言った。

「ベテラン程、自分の力を過信してしまう」

ある意味、というかそのままヒイロに当てはまる言葉だった。

ー前世のあらずじー

今から100年以上前、突如現れた巨人に人類は絶滅寸前まで追い込まれた。残った僅かな人類は50m程の大きさの三重の壁を築いた。

外側からウォールマリア、ローゼ、シーナという名前が付けられていた。

こうして人類は100年の平和を享受した、そう、100年の…。

元々人類は巨人の頭を吹き飛ばす程度の力は持っていた、

俗に言う、大砲ってヤツだ。

しかし、個体差はあるが約1分程度で吹き飛んだ頭部は修復されてしまう。

そこで巨人に対抗するために、

ヒトという生物を立体移動に対応させるべく、ある兵器が登場した。

その兵器の名は「立体機動装置」。ガスを利用して駆動する装置で

この装置による立体機動は人類が巨人を殺せる唯一の存在となった。

この壁の中には3つの軍事組織が存在する。

内地行きが約束され、壁の民と秩序を守る憲兵団、壁の補強や各都市を守る駐屯兵団、

壁外調査を主とし、巨人の領域に踏み出す調査兵団。

そして、この3つの兵団に入るための訓練を受ける兵団、訓練兵団。

兵士になるためには訓練兵団に3年所属し、3つの兵団へ進む訓練を受けなければならぬ。

憲兵団は卒業順位10位以内の者だけが志願することが可能で、力を持った者が巨人から離れられるという暗黙の了解が存在している。

845年、ウォールマリア シガンシナ区、

人類の最前線であるこの街は、

60m程の大きさを持つ超大型巨人によって外門を破壊され、

鎧の巨人と呼ばれる巨人によって内門が崩壊し、

人類の活動領域がウォールローゼにまで後退した。

850年、5年前の惨劇を生き残った子供達が第104期訓練兵団を卒業した。

中でもエレン・イエーガーという少年は

母親が目の前で巨人に喰われ、復讐心に燃えていた。

104期生の中でも人一倍強い目的意識を持っていた。

同年、調査兵団は壁外調査へと赴いた。

そこで巨人を狩り続けたが、やはり犠牲はある。

毎回3割程度が犠牲となる壁外調査、

1回行って帰ってくれば一人前と言われるのも無理もない。

途中で団長から撤退の指示が発せられた。

もちろん兵士達は反論する、「まだ目的地に辿りついてない」と、

団長はこう返してきた、

「巨人が一斉に北上し始めた、5年前と同じだ」と。

その場にいた兵士全員が驚いた、

目の前の調査兵団（エサ）よりも重要なこと、

つまり、壁が破られたのだ。

それからは驚きの連続だった、

現最前線のトロスト区外扉は無残にも破壊されていたが

代わりに大岩が穴を塞いでいた。

立体機動で壁を越えるとやはり死臭がする。

民間人は無事か、訓練兵達は無事かと様々な事が頭の中を駆け巡った。

後から駐屯兵団の工兵に聞いたのだが、

どうやらエレンが巨人化できることが判明して大岩で穴を塞いだとの事だ。最初は信じれなかったが、

それ以外に大岩を動かす方法が無いことから本当なんだと確信した。それからはエレンが調査兵団で戦うか

憲兵団で解剖されるのかの裁判が行われたり、

巨人化する為にはある程度の目標が無ければならないということや、エレン初の壁外調査で女型の巨人と呼称される巨人が現れたりと、

1、2ヶ月にしてはやけに多い事件が起きていた。

このストヘス区女型包囲戦もその一つだった。

ー見知らぬ空間ー

「ん、うん？」

目を開くとそこには真つ白な世界が広がっていた。

「お、なんじゃ起きたか」

起き上がったヒイロの目の前に、白髪の老人が立っていた。

「あなたは誰ですか？」

「名前なんて無いんじゃないかの…君の世界で言う神という者じゃ」

なんとこの老人は自分の事を神と言ったのだ。

「神…ですか」

「そうじゃ、お主は死んでしまった、最期は握り潰されてしまった」
「ああ…あれは油断の賜物でしたよ…」

ヒイロは自らの油断を呪ったが、

今はもう死んでしまっているものでどうにもならない。

「ああそうじゃ、その装置はどうする？」

「コレ（立体機動装置）？どうしてですか？」

神は装置をどうするか聞いてきた。

「いや、これから転生させるからどうしようかなと」

「てんせい…？」

「簡単に言うと、違う世界で人生を歩むということじゃ」

「じゃあ持っていくます…ガスと刃はどうしましょう…」

「向こうの世界で作らせる、」

君の名前は森岡虎咲じゃ次の世界でも生きて来なさい…」

「はい！」

（いつか、この名前を思い出してくれればいいのじゃが…）

返事と同時に足元に魔方陣が浮かび、ヒイロ…虎咲は光になって消えた。

「その世界は君が居た世界、家族全員を殺された世界じゃよ…」

神は誰もいない空間で一人呟いたのだった。

ーどっかの山奥ー

ヒイロ改め虎咲は転生した、此処はどうやら山の中らしい。

「え、此処どこ？」

（なんか懐かしい感じ、ここはどこだ？）

（日本という国じゃ。ちなみに虎咲、今14歳だからな？）

「え!? 神様!？」

（2年くらい心に直接語りかける、思ったことがそのままワシに伝わるぞ）

（あ、おけでーす）

（寒くないと思ったらマント着てるわ）

「とりあえず人を頼るか…お、あの家灯り付いてる」

（灯りが付いてるが変な臭いしないか？ 血みたいなの…）

「お邪魔しまー…す…」

虎咲の目の前には老爺を喰べている人のようなナニかがいた。

（なんかこの生き物見た事ある気がする…）

「おい餓鬼！ 俺の腹の足しになれ！」

虎咲は咄嗟に抜刀、刀を構えて戦闘体勢をとった。

「うわああ！」

ソイツはいきなり襲って来た、虎咲の直感が言っている、

「こいつは巨人みたいに人を喰う」と。

「そんなもんじゃ俺は殺せねえぜ？」

「ヤバイ！ 周りは畑だけだからアンカーを刺す箇所も無い！」

「オラア!!」

「ギャ!!」

とりあえず虎咲は化け物の目を潰した。

（とりあえずで目を潰すとは…お主サイコパスか？）

（うっさいダメレ）

（ウイッス）

頸だ！ 頸を切れ！

何処からか声が聞こえて虎咲は頸を狙った、しかしー

（き、切れない!?!）

その化け物の頸に傷が付いただけで切断には至らなかった。

（は!?!）

「はっ、そんな刀じゃ俺は切れないぜ？」

しかもその傷を数秒で修復したのだ、そのとき―

「どうらー！」

「ウガアアアア!!」

断末魔と共にソイツは崩れて消えていった。

そこには男性の姿があつた。

「あ、ありがとうございます！」

「君！一緒に来ないかい？」

「え？」

あまりに唐突なことに虎咲の口から間拔けな声が出る。

「いやだから！この武部壇蔵と一緒に来ないかい？」

「はい！」

こうして虎咲は、壇蔵の弟子になったのだ。

第弐話 鍛錬を開始します。頑張りやがれください

壇蔵の家に行く道中、虎咲はこの世界の様々なことを聞いた。

鬼殺隊、その名の通り鬼を殺すためだけに結成された政府非公認の組織、

呼吸と呼ばれる技を使い生身で鬼と闘う。

柱、鬼殺隊の中でも力を持っている者に与えられる称号で壇蔵が元々いた地位。

鬼、700年以上も前から存在し、人を喰らう化け物。

老いというものを知らず、心臓を貫こうが脳を切ろうが起き上がり、

どんな傷を受けようが修復する。

殺すには鬼殺隊が持つ日輪刀で頸を切るか、日光に当てるしか方法が無い。

元は人間で、鬼舞辻無惨という始祖の鬼の血を注がれた鬼は更に強力になる。

一般には周知されず、噂話程度しか民間人に知れ渡ることはない、

身内や友人を殺されなければの話だが。

十二鬼月と呼ばれる12体の鬼はここ100年以上討伐報告が無く、

それどころか数多の柱が犠牲になっている。

日輪刀、別名色変わりの刀と呼ばれ、

鬼の頸を切れる唯一の刀、刀鍛冶によって作られる。

折つたら刀鍛冶が新しい物を作るのだが、刀鍛冶の刀への情熱は熱く、折られたら泣き喚くかブチギれるかのどちらかで、

刀折つたら殺すという極論をぶちかます刀鍛冶もいる。

武部壇藏、元柱で今は村で隠居中、

普段の日課の巡回中に襲われている虎咲を発見、

鬼を切り捨て虎咲を弟子にした。

「そうか、君は戸山虎咲と言うのだな」

「は、はい」

「まあそう堅くなるな！ところで虎咲」

「なんですか？」

「鬼が憎いか」

壇藏の黒い瞳が黒い赤へと変わった。

先程までの朗らかな雰囲気は消え失せ、

真顔で虎咲に聞いてきた。まるで彼を試すかのように。

虎咲の脳裏に浮かび上がったのは、憎悪だ。

鬼は前世の巨人のように知性が無いわけではなかった。

あの老爺を喰った鬼は笑っていた、とつても気色悪い笑みを浮かべていた。巨人を防ぐための壁のような物はこの世界には無い。

その瞬間、彼は真顔で口を開いた。

「憎いです、この世に鬼は必要ありません」

「うむ…よく言った、鬼殺隊に入るための鍛錬をしてやる。

言つとくが私は厳しいぞ？」

「構いません」

「よし！鍛錬開始！走り込み十里！」

「今からですか!？」

「当たり前だ！走れ！」

こうして虎咲の鍛錬が始まった。

彼は二年でいろんなことを壇蔵から伝授した。

全集中の呼吸を七日で会得しろとか、呼吸法を身につけるとか。

虎咲は五日で会得、この速さには壇蔵も驚いた。

「私が教えたのは雷の呼吸と言いたいんだが…」

「どうしました？」

「虎咲、お前…呼吸を作っただろ」

「え…えーつと…」

虎咲は頭を抱えながら自分の落ち度を探った。

鍛錬は壇蔵が寝静まった深夜にやっていたはずなのに、だ。

「ああ…バレてましたか…」

「バレルも何も夜に鍛錬してただろ」

音で起きたぞ、と壇蔵は続けた。

「はい…俺が作ったのは翼の呼吸です」

「それはどういふもんだ？」

「壺ノ型、式ノ型、参ノ型、肆ノ型、壞ノ型を作りました」

「終ノ型はどうした？」

「これからです、翼の呼吸は未完成なんです」

「そうか…じゃ肆まで見せてくれ」

「御意」

そう言い虎咲は屋外鍛錬場（山）へと赴いた。

そういえばこの家っていうか屋敷はかなり広い。

山には普通に二十m級の木々が乱立している、立体機動装置を活かすには最適な環境

だ。

「始め！」

壇蔵の号令で始まる鍛錬、虎咲はもう数千回も繰り返してきた、虎咲の脳裏に浮かぶのは、血反吐を吐いた日々だ。

「翼の呼吸、壱ノ型、雲煙過眼」

すれ違いざまに20m級の大木は轟音を立てて「崩壊」した。

雲煙過眼、虎咲が元々教わっていた霹靂一閃を強化した技。

速度、威力共に強化され、掠つても大きな損害を与えられる。

「ほお…「切断」ではなく「粉碎」とは…」

「これが一番です、雑魚鬼は初見殺しですね」

「次、始め」

「翼の呼吸、弐ノ型、全翼無連」

呼吸音と共に全方位に無数の刃が飛来し、

周りの藁人形を薙ぎ倒し、見るも無惨な姿へ変えていった。

藁人形の請求は虎咲に行くだろう。

「うわ、えげつない」

「全方位で囲まれたら勝ち目ないんですよ、

薙ぎ倒した方が手っ取り早いです」

「はい次、始め！」

―翼の呼吸、参ノ型、為虎傳翼―

参ノ型、為虎傳翼は身体能力、反応速度、五感を強化する型、彼は45分という時間制限をつけている。

それ以上使ったら暴走の危険があるからだ。

発動中は瞳が紅に染まり、高速で動くため

紅い光が尾を引いている。この状態を夜に見ると結構怖いらしい。

その状態で虎咲は0・1秒程で100mを走り、

彼は20m級の大木を5本から5m級20本に増やした。

「凄いな……」

―肆ノ型、霧散翼・改―

技を発した瞬間、それと共に目の前の木が倒れる。

反動で一瞬浮き上がってしまった木は下半分が霧のように消えていった。

霧散翼は、一瞬で足を切り、起き上がったら

霧のように下半身を丸ごと消してしまうというタチの悪い型である。

「いい戦い方だ」

壇蔵はこの時間で翼の呼吸の戦い方を見抜き、感嘆する。

全ては鬼殺の為、彼の技には甘きなんぞ存在しない。

「じゃ、じゃあ」

「ああ、最終選別へ行くことを許可する」

「ありがとうございました」

壇蔵は最終選別へ行くことを虎咲に許可した。

「そういえば…」

「?どうしました?」

「腰や足に付けてるソレ（立体機動装置）は何だ?」

壇蔵はあろう事か、まだこの世界に存在しない立体機動装置のことを

興味深そうに虎咲に聞いて来たのだ。

（ヤバイ!）

「こ、これですか?」

もちろん虎咲はたじろいだ。

少なくとも自分が転生者なんて口が裂けても言えない。

「ああそうだ」

「これは…」

「言いたくないのなら別にいいのだが…」

(どうする?)

(適当に親が作りましたって言っておけ、裏で設定弄ってくる)

「俺の父が作りました、立体機動装置と言って

ワイヤーが付いた銚を発射し、ガスの力でワイヤーを巻き取り、

その力で空を飛ぶことができるのです」

「ほー興味深いな…親御さんはどうした?」

「…喰われました、鬼に…設計図もその時に燃やされました」

虎咲の親は喰われたと言う。少なくとも空想の親だ。

「そうか…辛い事を聞いた…明々後日から7日間、

藤襲山で生き残ってこい」

「はい…」

そう言い切った壇蔵は不安の表情を浮かべる。

弟子を最終選別に向かわせるといっなのはすなわち、死地へ赴かせることに等しいのだ。

第参話 最終選別、戦闘開始

—翌朝—

「壇蔵さん！では、行ってきます！」

「気をつけて行ってこい」

「はい！」

こうして虎咲は2年の鍛錬をやり通して、

最終選別を行う藤襲山へと向かった。

藤襲山、鬼が閉じ込められている危険な山、

その麓から中腹にかけて藤の花が咲き狂い、そこで鬼殺隊の最終選別を行う。

毎回合格人数は一桁いるかないか、それだけ厳しい選別なのだ。

(こいつも試さないとな)

虎咲は心の中で呟き、改良した立体機動装置をコンコンと叩いた。

(虎咲)

(ん？どつたの神様)

(そろそろこつちに来て2年になる)

(もう2年か)

(最終選別が終わったら…儂は上に戻る)

「ああ…今までありがとうな」

彼は悲しそうに空を見上げながら呟いたのだ。

12日前

「すいませーん」

「はい」

虎咲が玄関の扉を開ける。

「装備、お届けに参りましたあ！」

「どうも」

ひよつとこの面を被った少年が、改良した立体機動装置を持ってきた。

これは壇藏の元柱権力を使って装備を新調したに過ぎない。

前の立体機動装置だと鬼を斬れないため、刀身を日輪刀にして解決した。

(刀身が長くなったんで鞘も延長、純正なのはガス周りだけか…)

虎咲の裏では、神様によって刀鍛冶の里で

刀身や装置の予備部品が入るようになった。

「何色に変わるんですかね」

「さあ…翼の呼吸なんて未知数だからな…」

「さあ、柄に刀身を付けてみてください！」

促されて虎咲は抜刀した、すると、下の方から徐々に色が変わっていく。

「おー」

「こうゆうふうの色変わるのか…」

「これは…刀鍛冶の弟子を5年、配達を7年してきましたが…」

「この色は初めて見ました…」

「ありがとう、君の名前は？」

「修です、以後お見知り置きを」

「ありがとう修、気をつけて帰れよ」

「はい。あ、師匠から伝言です、」

「あんまり刀身折るなよって言っていました」

「あ、了解って伝えておいてもらえる？」

「おけです」

―そして今に至る―

(やっと着いた、迷子を助けたりしたけど間に合った…)

「最終選別は頂上か…この藤の花の景色が

冥土の土産にしないようにしないと…」

(ん?)

虎咲が何かに気がつき足が止まる、

なんと花柄の着物を着ている少女が道端の柵に寄り掛かって寝ていたのだ。

「えっと…どうしたんですか…?」

「う、うん…?」

少女が目を擦りながら顔を上げる。虎咲はそれを見てため息をついた。

「あれ…私寝てた…?」

「通り掛かっただけだが…爆睡だったぞ」

未だに目を擦りながら少女は立ち上がり、虎咲の前に立つ。

「ありがと、起こしてくれて。君…名前は?」

「俺? 森岡虎咲っていうんだ、虎咲でいい」

「私は真菰、よろしくね虎咲」

真菰と名乗る少女の腰には刀が下がっていた。

「真菰も最終選別に？」

「あ、バレた？ やっぱり刀下げてるからだね、虎咲もでしょ？」

「ああもちろん」

「まだ選別まで時間あるけど…どうするの？」

「先に頂上まで行っておこう」

「賛成」

虎咲は真菰と山道を歩きながら話していたが、彼女にはある問題があった。

(距離が近い、近すぎる)

もう普通の男であれば我慢できず逃げ出してしまうレベルなのだが、

虎咲は我慢の鈍感さでなんとか耐えていた。

「私は水の呼吸使っただけだし、虎咲はどうなの？」

「秘密」

「えー、ケチ」

二人は雑談しながらも頂上へ到着した。

多くの少年と案内役の2人の少女がそれなりに広い広場にいた。

(ざっと20人くらいか…)

「皆さま。今宵は最終選別にお集まり下さり、ありがとうございます」
「この藤襲山には、鬼殺の剣士様が生け捕りにした

鬼が閉じ込められており、外に出ることは叶いません」

(マジか…昔の剣士さん達強かったんだな…)

「山の中で七日間生き抜く。

それが、最終選別の合格条件でございます」

少女たちは頭を下げ、

「では、行ってらっしゃいませ」

そう言った少女は、候補生20人程を最終選別へ送り出した。

「どうする？真菰」

「んー…一緒に行動しよう、そっちの方が生き残れると思うよ」

「おう、わかった」

しかしその日は大して鬼は出ず、非常食を食べて寝た。

〜二日目の夜〜

「おいガキども！俺に喰われろ！」

「邪魔だ！俺が先に見つけたんだ！」

「うるせえ！俺が先に目をつけたんだ！」

三体の鬼が虎咲と真菰に競い合うように接近する。

二人はそのまま上に飛び、それぞれの技を放った。

―水の呼吸、式ノ型 横水車―

―翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連―

真菰は水平に、虎咲は垂直に刀を振る。

真菰の刃は一匹の首を捉え、虎咲の斬撃は残る二匹の鬼をズタズタに引き裂いた。

「ツクソガキども…」

一匹の鬼が悪態をつきながら消滅するのを見て、二人は元来た方向へと歩き始める。

「虎咲の呼吸ってなんなの？見る限りすごく強そうなんだけど」

「…まあそれは追々だ」

「今教えてよくケチ」

散々ゴネる真菰をスルーして飯を食う虎咲、終了まであと五日。

―6日目の夜―

（あと一夜で終わりか…一匹しか討伐してないぞ…）

彼は川で水を汲みながら立体機動装置を使った戦略を考えていた。

すると、一人の少年が血が滴る左腕を押さえながら歩いて来る。

「大丈夫か!?今包帯を…」

「…ああ、大丈夫だ…それよりも…向こうに異形の鬼がいるんだ…」

この傷もアイツにやられた…今は女の子が相手している…助太刀してやっくれ…」

「…わかった、行ってくる。君も生き残れよ」

「…すまない…ありがとう」

これが、森岡虎咲と雫石太一の出会いだった。

（立体機動で間に合うか？）

虎咲は木々を巧みに通り抜け、言われた方向へ飛び続けた。

（クソ…！間に合え…！）

ー翼の呼吸 壺ノ型、雲煙過眼ー

さらに加速すると、彼の目はあるものを捉えた。

それを見た彼の顔はどんどん憎悪に染まる。

「真菰！」

彼の目に入ったのは、異形の鬼に捕まった真菰だった。

第肆話 因縁と少女

彼女は親に捨てられた、いわゆる孤児というモノ。

親の顔なんて覚えてない。ただ、貧しさにより売られたという記憶はある。

そんな彼女を拾ったのが師である鱗滝左近次。

真菰という名前で鱗滝と鍛錬に励み、

鱗滝は真菰が最終選別へ行くことを許可した。

でも、真菰は知っている。鱗滝が今まで藤襲山に送り出し、

戻ってこなかった弟子達を想って悲しんでいることを。

(それを嘲笑う奴は許さない、絶対に……)

そんな強い決意を持って真菰は最終選別に参加しているのだ。

16日目夜1

「ねえねえ虎咲く水無くなつた〜」

「はあ？昨日汲んだばつかじゃんか」

「しようがないでしょ、早く汲んで来て」

「あーもうわかつたよ」

「いつてらっしやーい」

虎咲がいなくなり、辺りには風で木々が揺れる音しかしない。

今は夜、何時鬼が襲ってくるか分らない、油断も出来ない。

（私は…約束は守る、絶対に帰る、鱗滝さんの元へ…）

真菰がそう決意した瞬間、悲鳴が聞こえた。

「!?」

（何?今の…悲鳴?助けに行こうかな）

「うっ…」

目の前に広がったのは四肢をもがれた死体や、

首から下が無い死体、体の半分が無くなった死体など、

彼女も目を覆いたくなる景色が広がっていた。

「!君、大丈夫!」

まだ辛うじて息があるが、左腕を負傷した少年がいた。

「クソ…アイツ、どこからも攻撃できるんだな…!」

「大丈夫!?!大丈夫ならこのままあっちへ走って!早く!」

真菰に催促された少年は、

左腕を押さえながら指差された方向へと歩み始めた。

「おいお前」

鬼が真菰を睨む。真菰は少し怯んだが、すぐに鬼を見据える。腕が何本もある。これが異形っていうヤツなんだろう。

声に籠った殺気が真菰の精神を撫でる。

「その面、鱗滝の弟子だな」

「鱗滝さんを知ってるの？」

「そりゃあそうさ、この檻に入れたのは鱗滝だからなあ！」

真菰にはこの鬼がどれだけ鱗滝を憎んでいるのかがよく分かった。

「十一、十二、お前で十三だあ」

突然その鬼は数を数え始めた。

「何のこと？」

「俺が喰った鱗滝の弟子の数だあ。」

安心しろ、お前も胃袋に入れてやるよ」

（そうか！コイツが鱗滝さんを悲しませた元凶、

兄弟弟子を殺したクソ野郎か！）

もう真菰は怒りで我を忘れ、声を荒げて技を放った。

「お前が！鱗滝さんを悲しませた元凶か！」

―水の呼吸参ノ型、流流舞い―
体を捻り、斬撃を放つ…が、

呼吸が乱れ、本来の流流舞いの力が発揮されず不発に終わってしまった。
その鬼はその瞬間を待っていた。気持ち悪い笑みを浮かべ、
地中から多くの腕を出現させた。

―絶対に帰ってこい…真菰―

彼女は出発前に結んだ約束を守れない事を悟った、

(私は弱い…でも死にたくない！)

「さーてどこから折ろうかなあ？」

その鬼は真菰の四肢を抉るべく、彼女の足に手を伸ばした。

(間に合え！ガスが切れようが関係ない！)

虎咲は木々にワイヤーを射出し高速で移動していた。

(居た！殺す！)

「真菰！」

虎咲は叫んだ瞬間抜刀、青と白が交互で変わる刃が姿を現した。

―翼の呼吸 参ノ型、為虎傳翼―

(発動限界は45分、その間にヤツを殺して真菰を助ける！)

―翼の呼吸 伍ノ型、集翼九連―

九つの斬撃が鬼に向かって飛翔する。

斬撃が鬼に到達して鬼の腕を五本ほど切断する。

「痛っクソ！なんだガキ！せっかく鱗滝の弟子を喰えると思ったのに！」

「クソはそっちだアホ面、黙っとけ」

「ああ!?!」

―翼の呼吸、肆ノ型 霧散翼・改―

虎咲は鬼の脚を切り飛ばし、鬼は大きな音を立てて倒れた。

彼はそのまま立体機動で鬼を翻弄し、大量にあつた腕を全て切断する。

「こんなの、すぐに治るぞ?」

「そうか、起き上がってこい」

「上等d!?!」

鬼は言い切るより先に下半身が消えていった。

「さよならだアホ面、死ね」

虎咲は呼吸を使わずに無抵抗になった鬼の首を斬る。

「クソがああああああお前ええええ何をしたああ!?!」

「この霧散翼・改は足を切つてなお起き上がって来ると

下半身ごと消し去るといふ技だ、鱗滝さんの弟子達に死んで詫びろ」

「鱗滝いいいいいい!!」

鬼は消えた、おそらく向かうのは地獄だろう。

虎咲はすぐに真菰の元に向かった。

「真菰!」

「虎咲…?来てくれたの…?」

「安心しろ、ヤツは殺した」

(確か袋の中に鎮痛剤が…)

虎咲は壇藏から

鎮痛剤、非常食、水などを入れた袋を持たされていたのだ。

「真菰、飲めるか?」

「う、うん」

真菰は催促され薬を飲んだ。

「痛みが引いてきた…凄いなこの薬」

「でも鱗滝さんのところ帰ったら医者に見せないと、食うか?」

虎咲は非常食を取り出して真菰の手に置いた。

「え!?! いいよ、虎咲もお腹減ってるでしょ?」

「飛んでる途中に食ったから大丈夫」

「じゃ、じゃあ貰おうかな…」

（え、待つておにぎり一口でいった!?! やば!）

「てかもう日の出か…」

「久しぶりに太陽が綺麗に思えたよ…」

7日目の日の出、

森岡虎咲、鱗滝真菰、雫石太一

天童水葉、熊谷風華、安中陽菜、最終選別合格。

参加者22名、合格者6名。

「集場所まで行くけど背負ってやるぞ?」

「あ、お願い」

「そう、今回は多いね」

合格者数を聞いた鬼殺隊の主、産屋敷輝哉は伝令を聞き一人呟いた。

「また私の可愛い剣士達が増えた…どんな剣士になるのかな」

虎咲が真菰を背負いながら鳥居を潜ると、

選別が始まる前に案内してくれた2人の少女がそこにいた。

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございませ、御無事で何よりです」

（生き残ったのは俺達6人だけか…お、アイツ生きてたのか…！）

虎咲は包帯で腕を巻かれている少年を見て安堵する。

栗石太一、虎咲が六日目に応急処置を行った少年だった。

「それとー…」

黒髪の少女が何かを言いかける。

「どうしたんですか？」

「背負ってる子、起こしてあげたらどうですか？」

「真菰起きろ、いつまで寝てるんだ」

「zzz」

（ああまたか…アニに使ったアレを使うか…）

「オラア！敵襲だ！起きろ！」

「え!?何！鬼!?あ、朝じゃん」

「起こしても寝てるから嘘吐いてまで起こしたんだよ！

ほら見ろあの2人と他の人達めっちゃ困ってるよ！」

「えーつと…お話は済みましたか？」

「まずは隊服を支給させていただきます、

体の寸法を測りその後は階級を刻ませていただきます」

「階級は十段階ございます、

甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸、

今現在お二人は一番下の癸でございます」

「さらに今から鎧鴉をつけさせていただきます」

白髪の少女がパンツと手を叩くと二匹の鴉が羽音を立てて

虎咲と真菰の肩に止まる。

虎咲は真菰を背負ってる状態なので彼の頭に羽が当たる。

「鎧鴉は主に連絡用の鴉でございます」

（伝達？鴉が？手紙を持つてくるのか…？こいつ、喋るのか？）

「最後に日輪刀の鋼を選んでいただきます、

鬼を滅殺し己の身を守る刀の鋼はご自身で選ぶのです」

虎咲と真菰は直感で選んだ、そんな鋼の違いなんてわかるわけないからだ。

「刀が完成するまで10〜15日程かかります」

「では、ご入隊おめでとうございます」

「ありがとうございます」

こうして彼ら新人隊士達6人は藤襲山を下山したのだ。

第五話 初陣

「狭霧山つてここか？どこ？鱗滝さんの家」

「うん、もうそろそろ着くと思う…あ！この家だよ！」

最終選別から帰還した虎咲と真菰。

虎咲は真菰を背負いながら真菰の師範である鱗滝左近次の家へと向かっていた。

「なあ真菰」

「何？虎咲」

「鱗滝さんに殺されるのかな…俺『儂の真菰に手を出しやがって』みたい…」

「ははは、鱗滝さんならあり得るかもね」

「死にたくないんだけど…」

もう一回転生かよ…と虎咲は心の中で毒付きながら真菰と共に家の扉を開けた。

「ただいまー」

「お邪魔します」

「よく帰って来た真菰…貴様は誰だ」

「戸山虎咲です、真菰の同期となります、よろしくお願いします」

「虎咲はね！私を助けてくれたのよ！」

真菰がドヤ顔で鱗滝に言う、その言葉に鱗滝と虎咲が反応し、

虎咲は萎縮し、鱗滝は虎咲を威圧する。

「ほう……？」

一触即発状態の二人を見た真菰は慌てて事の経緯を鱗滝に事細かく説明する。

「そうか……すまないな、虎咲」

「いえいえ、鱗滝さんの弟子達の仇を取れたのならよかったです」

「隊服、今着たいなあ」

真菰が突如呟いた、虎咲はともかく鱗滝も驚いていた。

「今……？」

「今」

そうか、とだけ言った鱗滝。真菰の屈託のない笑顔が虎咲を捉える。

「じゃあ虎咲も着ようか」

威圧感満載の笑顔から虎咲が逃げられるわけがない。

「……ハイ」

鱗滝に威圧された時以上に萎縮した虎咲はそのまま隊服を持って部屋に入る。

「着替えたかー」

鱗滝は庭で二人が着替えを終えて来るのを待つ。

「ハイイ」

一人は元気に、もう一人はそこまで嬉しくなさそうに返事し、

二人は同時に襖を開ける。

鬼殺隊の隊服のシンボルである背中中の「滅」の文字、

どんな素材でできているかは知らんが通気性は良く、濡れにくく燃えにくい。雑魚鬼の爪や牙では、この隊服を裂くことすら出来ないらしい。

虎咲は隊服の上から耐Gベルトを締め立体機動装置を装備、

上から調査兵団のマントを羽織っていた。

真菰の隊服はスカートで、その上から花柄の羽織りを着ていた。

「おー……」

「早く育手に見せてやれ、飛んで喜ぶぞ」

「じゃあ、お邪魔しました！」

「じゃあねー虎咲！」

真菰の呼び掛けに虎咲は手を振って答えた。

（虎咲、農が隠していた事を今言う）

（どうしたんだ神様、妙にかしこまって）

(戸山虎咲、君は巨人の世界の前にこの世界で生きていたんじや)

(懐かしい感じがしたのはそれだったのか…)

(君がこの世界で生きて来た13年の記憶を今与える、達者でな)

「ありがとうございます、神様」

そう呟いた瞬間彼は激しい頭痛と吐き気に襲われ、

頭を抱えてその場に跪く。

「うぐっ…カハッ…」

虎咲はその場で口を押さえながら倒れ、胃酸を吐かまいと我慢する。

しかし、記憶はそんな体の調子などお構いなしに虎咲へと入っていく。

『お兄…ちゃん…あの…頭から血を被った様な…化物を…殺して…』

『おい！ナツ！置いていかないでくれよ！』

『戸山陽一郎！貴様は鬼となれ！』

(コイツは…上弦ノ参！)

『君は俺が救済してあげるよ』

『俺の妻や娘を殺しやがって！虎咲！行け！』

(ダメだ！上弦二匹を相手なんかできないだろ父さん！)

『落ちて着いて、虎咲！』

『虎咲君…』

「誰だっけ…あの2人…」

発作のような症状が収まり、彼は立ち上がりながら呟く。

「カアー！カアー！伝令！武部壇蔵ヨリ戸山虎咲！」

新タナ弟子ヲトルカラ出テケ！荷物ハ蝶屋敷ニ送ツタ！

ケガバカリスルナラ病院住マイノハウガイダロ！」

壇蔵の鏗鴉が鳴きながら…喋りながら端的に内容を伝える。

「じゃあこう伝えて、『2年間ありがとうございました』って」

「了解イ!!」

そう言い残し、壇蔵の鴉は飛んでいってしまつた。

「蝶屋敷ってドコ？案内して鴉」

「カアー了解！」

上空で滞空していた虎咲の鴉が虎咲の肩まで降下し、蝶屋敷までの道を進む。

こうして虎咲の鬼殺隊生活が始まつた。

「カアー！伝令！ココカラ程近イ街デ花柱ガ上弦ノ式ト戦闘中！」

至急急行サレタシ！」

誰の物かも分からない鴉が花柱の危機を伝える。

「上弦?!」

「上弦ダ!他ノ隊士ニモ声ヲ掛ケテルガ、才前ガ一番近い!」

早く着く事だけを考える:

―翼の呼吸壺ノ型、雲煙過眼―

虎咲は急加速、そしてその一閃が止まった時、

―参ノ型、為虎傳翼―

身体能力を底上げする為虎傳翼を発動、紅い尾を引きながら高速で進む。

「コノ街ダ!進メ!」

(血の匂い、話にあった上弦ノ式か!)

もうすでに戦闘は開始している。

そして彼は村の一角で足を止める。

そこには体をもがれた少女や女性や倒れた花柱、胡蝶カナエがそこにいた。

(あの蝶の髪飾り、そういえばさつきも:いや、いい。記憶を遡るのは後だ)

虎咲の視線は上弦ノ式を見た瞬間固まった、

笑みを絶やさないとソイツは頭から血を被った様な鬼、

自らの姉と妹、そして母親を葬った鬼だった。

(アイツかよ!今すぐ殺す!母さん達の仇!)

『ソイツの名は童磨、女性を好んで喰うイカれ野郎だ』

「っ！童磨ああああ!!」

瞬時に右だけ抜刀、頸を切りに飛びかかった。

「危ないねえ……あーあ、増援来ちやったかあ、でも君一人だけだよねえ？」

「黙れゴミ屑！このマントに見覚えぐらいあるだろ！」

「えーつと……どこかで見た気がするけど……」

すると童磨は頭に指を突き刺して掘り返し始める。

「あーあつた。5年前か、結構最近だったね。」

君のお母さんもお姉さんも妹さんも救済してあげたよ、

今は俺の中でみんな一緒だ」

「救済つて……こんだけ痛めつけて何が救済だよ、よくて拷問じゃねえか」

「ひどいこと言うねえ……君、やっぱ女の子が一番だよ」

鬼はそう言いながら二つの扇を翻す。

「お前はどうかやら脳みそが逝かれていますようだ、

じゃあお前の言葉を借りるよ。

その可哀想な脳みそを救済してやろうじゃないの」

虎咲は抜刀しながら童磨を挑発する。

だが彼は上弦の鬼、そんな安っぽい挑発に乗ることはなかった。

「ははは！面白いね、君！」

笑いながら童磨は扇を構えながら口を開く。

「さあ、日の出まで時間が無い、殺り合おうか」

「上等！覚悟しろ！」

2人は同時に走り始め、刃と扇が激突した。

1日の出まで、あと45分！

第陸話 狂鬼と鷹

虎咲は童磨の技を受け流しながら必死に血気術の対策法を探っていた。

―血気術、冬ざれ氷柱―

―翼の呼吸、式ノ型、全翼無連―

虎咲の上に無数の氷柱が生成され、一気に降り出す。

それを虎咲は全方位に飛ぶ無数の翼で迎撃した。

これも為虎傳翼の身体能力向上のおかげなのだ。

肝心の為虎傳翼の制限時間は、15分を切っていた。

刀を振って童磨の扇を防ぐ、的確に虎咲の心臓を狙ってくる。

心臓もそうだが、攻撃の合間合間に粉氷を振るってくるので1秒たりとも油断が出来ない。

彼の血気術は最初から対鬼殺隊士を想定した、

つまり鬼殺隊にとって最も危険な技だ。かかれば抵抗出来ずに殺される。

対策無しに童磨に挑めばすぐに墓の中にポツシュートされてしまうのだ。

しかしこんな時でも冷静さを忘れないのが虎咲、

少なくとも今の彼は童磨をどうやって殺すかだけを考えていた。

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼―

―血気術 枯園垂り―

童磨は音速に近い虎咲の速度を見切つて刀に向かつて扇を振るう。

虎咲の刀が真ん中から真つ二つに折れ、破片が飛び散る。

「あーあ残念、刀が折れちゃつたね。」

まああの娘を救済したら君も救済してあげるよ」

童磨は虎咲に背を向けてカナエの方へと歩く。

だが童磨は気付かなかつた、虎咲の口角が上がつた事に。

「さあ終わりだ、覚悟しな童磨」

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼・両翼―

虎咲が両手に日輪刀を持つて童磨の首を斬るべく突撃するが、

その瞬間童磨も虎咲の方を向く。

「後ろ向いてるからつて油断したねえ?」

―血気術、結晶ノ御子―

童磨の周りに六体の小さな人形が現れ、その全てが童磨と同じ技を放つた。

虎咲は、童磨と同じ戦闘力がある人形を六体も相手しなくてはならないのだ。

（今回は最初から6体投入、柱を殺した御子達なら楽勝だよな）

童磨は、人形を相手している虎咲を横目に倒れていたカナエの方へと歩いていった。

「さあ、あの子は後で食べてあげるとして、君を救済しないとね」

ー翼の呼吸、武ノ型、全翼無連・炎ー

彼の翼の弾幕は、6体の人形を焼き払ったのだった。

だが童磨はそれに気付かず、カナエを見て、扇で口を隠しながら笑う。

「傷だらけ、救済しないとね」

しかしカナエの視線は童磨に向いておらず、その「先」に向いていた。

「何かあるの？増援でもゴフア!？」

童磨が振り向いた瞬間、アンカーが胸に突き刺さり吐血する。

その瞬間、瞳を紅く染めた虎咲が飛んできた。

（なんだ？俺の御子は？六体全部葬ったのかコイツは!?!）

虎咲の後ろには、人形だったはずの水が大量に散らばっていた。

続けて彼にとって絶望とも言える光が東の方角から出現した。

「もう日の出!?!」

童磨にとつて史上最悪のタイミングでの日の出、

今すぐにこの場を離れないと燃え尽きる。

しかし、童磨の胸にアンカーが刺さっている時点で

ほぼ逃げる事は不可能、「死」という言葉が童磨の脳裏によぎる。

(この鉄線、切れるのかな?)

童磨は瞬時に冷静さを取り戻し、ワイヤーを斬ろうと扇を振るう。

虎咲はそれを察知しワイヤーを巻き戻す、

当然アンカーは外れた、童磨はそれを見逃さなかった。

虎咲と太陽に背を向け西へ向かって走り始めたが、

虎咲もそれを見逃さなかった。

ー翼の呼吸、壊ノ型、集翼九連・壊ー

壊ノ型、集翼九連の数量威力倍増仕様。

為虎傅翼使用時には軽減されるが、使用后2日は腕が動かなくなる。

戦いの最終局面でしか発動できない諸刃の剣の型である。

18本の刃が童磨へ飛ぶ。

一つの刃は脳を、もう一つは目を、もう一つは頭部を切除したが、

首を斬る事は叶わず、童磨はお構い無しに走り続けた。

「殺し合いはまた今度、次は油断しないよ」

「待て…待ちやがれ…」

虎咲のその眩きを聞いた者はおらず、

童磨は地平線の向こうへと消えていった。

それと同時に鬼殺隊の隊士達が

カナエの元へ集まったのを見届けたかのように、

虎咲は意識を手放し膝から崩れ落ちたのだった。

「カアー！伝令！階級突、戸山虎咲！上弦ノ弐ト対峙スルモ

惜シクモ敗北！上弦ノ弐ハ逃走！突ノ劍士ガ上弦ヲ退ケタゾ！」

その日の明朝、数多くの鴉達が必死に伝令を続けたが、

その伝令を信じた者はいなかった。

『ねえねえ虎咲君！コレ着けてみて！』

『ソレどうしたんですかカナエさん、

あと関わるつもりは無いつて言ったはずですよね』

（コレは…俺の記憶か…）

『いいからいいから！年相応の笑顔ぐらい見せてくれないとね！』

『これでいいですか？』

『バツチリ！私ってやっぱ工作上手いわ！似合ってるわ虎咲君！』

『あ、ありがとうございます』

『いい笑顔ね、やろうと思えば出来るじゃない!』

『え? あ、俺笑ってる』

虎咲は完全に記憶を取り戻した。

花柱のカナエが無表情だった彼に表情を戻した事。

彼には守るべき者がいる事。

そしてもう一つ。

家族の仇を何としてもこの世から消さなければならぬ事だ。

「う、うん？……ここは、病院か？」

かすかにする薬品の匂い。

ソレはここが病院だということの証拠のような物だった。

そして虎咲が寝ているベットの横には、蝶の髪飾りを付けた少女が座っていた。

「おはようございます虎咲、久しぶりですね」

少女はそのまま虎咲に微笑みかける。

だが微笑みより先に彼女の涙腺が崩壊した。

「久しぶりだな、しのぶ……」

戻ってきてくれたと言ってしのぶは泣き崩れたのだ。

第☒話 銃と虎咲

「カァー！カァー！馬鹿虎咲（ボソツ…）、修ガ来ルゾオ！」

虎咲に聞こえないように毒を吐く鴉が、修の来訪を知らせる。

修、虎咲の刃やガスを補充してくれる少年。

修の師匠には一回も会ったことないが、

そのうち刀鍛冶の里に出向いて挨拶しておこうと思っっている虎咲であった。

「泣くなつてしのぶ、3日も寝てたのは悪かったから泣きながら

胸に飛び込んで来ないで」

今の虎咲の状況はしのぶに正面から抱きつかれている状態で、

動こうにも動けない状態が続いていた。

少なくとも今この状態を見られたら非常に不味いと虎咲は考えていた。

しかし、現実是非情である。虎咲の専属刀鍛冶の弟子、修が部屋に突入してきたのだ。

「すみませーん、イイトコ申し訳ないですがー

虎咲さんいますかー」

「…おう、修か。新しい刀身と…ソレ何？」

コイツらの切り替えの良さに触れないとして、

刀身は分かる、明らかに補充用の物だ。

問題は修が麻袋から出した細長いものである。

ソレは陸軍の三八式歩兵銃のはずだと虎咲は心の中で呟いた。

「師匠が作った陸軍の三八式歩兵銃と三十年式銃剣です。」

壇蔵さんが虎咲さんの銃さばきは凄いと云っていたので

確かに虎咲は鍛錬の合間に壇蔵と狩猟はしていた、

翼の呼吸を一回見ただけで戦闘スタイルを見抜いた壇蔵である。

銃の使い方も一回見ただけで虎咲の才能を見抜いたのだ。

「弾丸は日輪刀用の鉋石で作っていますし

銃剣の刀身は日輪刀なので鬼も斬れます、色見せてください！」

「どうせまた蒼と白じゃないか？そう簡単に変わらないだろ」

銃剣は虎咲のそんな予想を裏切った、刀身は真つ黒に染まったのだ。

（は？は？何で？翼の呼吸は使うなってこと？）

「黒、初めて見ました…」

「修、初めて見る色しか出せなくてごめんな」

「虎咲が異常なんじゃないでしょうか」

しのぶの言葉が矢となつて虎咲に突き刺さる。

「試射するか……。しのぶ、一枚いらぬ皿つてある？」

「めっちゃありますよ、てか虎咲つて銃使えたんですね」

「二年使えば嫌でも上手くなるだろ」

―翼の呼吸、壱ノ型、雲煙過眼―

虎咲は皿と棒と紐を持つて軽く200m離れたところの地面に

棒を打ち立て、紐で皿を吊るし簡易的な標的を作製した。

もう一度雲煙過眼を発動し、しのぶ達の場所へ戻った。

「こんなもんか、しのぶ、修、見えるか？」

「豆粒レベルですね、撃ち抜けるんですか？アレ」

「僕には何にも見えないです……あ、これ」

虎咲はありがとうと言いながら弾薬と銃を受け取り、

慣れた手つきで弾薬5発を1セットにした挿弾子を薬室へ押し込み、

コッキングレバーを押し戻し安全装置を解除した。

(やはりこの音はいい音だ)

コッキングレバーはガチャンと心地いい音を立てて薬室を閉鎖する。

昔から好きな音、記憶の片隅に三八式でもない、村田銃でもない

また別の銃のコツキングレバーの音が残っている。

だが、それはまた別の話。

「小慣れてますね……」

「僕もあんな風に色々な武器で戦いたいです……」

虎咲は銃を構え、的になった皿を照門に合わせ、トリガーを引いた。

三八式歩兵銃の撃鉄が落ち、銃弾の雷管を叩く。

耳が痛む程の銃声を発した三八式歩兵銃は弾丸を撃ち出した。

撃ち出された6.5mmの弾丸は、真つ直ぐ飛翔し皿を粉碎したのだった。

「当たったか？しのぶ、修」

「見事に碎け散ったみたいですね、バラバラです」

「白い破片が飛んだのは見えました、当たったと思います」

「こりゃあ修の師匠には土下座もんだな、今までで一番いい個体だぞコレは。」

「修、ありがとう。師匠にもよろしく言っておいて」

「はい！あとコレ残りの弾薬です、」

「こちらこそありがとうございます！」

修は走って帰って行った、

あまりの速さに虎咲は目が点になったが、すぐに治った。

「しのぶ様あー!」

「すみ? どうしたんですか?」

蝶屋敷で手伝いをしている3人の少女のうちの1人、すみがしのぶに声をかける。

「カナエ様が目を覚ましました!」

ダツという効果音が付いてもいいくらいの勢いでしのぶは駆け出した。

「早いねえ…」

「あと虎咲さんにも…」

「どうしたの?」

「鱗滝真菰さんという人が…つてもう行っちゃいましたか…」

心の中で貴方も早すぎますと言ったすみであった。

「真菰!」

「一週間も経ってないけど…久しぶり、虎咲。てかその腕の包帯どうしたの?」

「壊ノ型の代償、骨折は確実さ」

「あとやけに後ろにいる人達が慌ててるんだけど」

真菰の視線は虎咲の後ろに向く。

「花柱のカナエ様が目を覚ましたんだ、でも鬼殺隊は引退だろうな」

「どうして?」

「上弦ノ式の血気術、ヤツは霧で肺を潰してから殺しにかかってくる」
「手で口や鼻を抑えればなんとかなるかもね」

そうだなと言いながら虎咲は笑ったのだった。

「ほんとに前と比べたら表情豊かになったわねえ…」

「起きたんですね、カナエさん」

松葉杖を使ひしのぶに補助されながら歩いて来た、

腰まで伸びた髪を持った女性、

その女性こそ虎咲が救い出した女性、花柱胡蝶カナエだったのだ。

「カァー！戸山虎咲及び胡蝶カナエ！産屋敷邸二召集ウー！」

鴉が病人に優しくない伝令を叫んだが、

二人の怪我人によって絞られていた。

「負傷者を呼びますかねえ…」

（お館様も酷い事するね、怪我人を呼ぶなんて）

今更鬼殺隊のブラックぶりを思い知った真菰であった。

―番外編―

「はあ…」

虎咲は三八式の説明書を熟読し、分解をして整備をする。

「……」

「はあ……」

二度目のため息を吐く、

三八式の派生元である三十年式は機関部の構造が複雑で、そんなデリケートな機関部に砂塵が入り故障を誘発。

そのため、「敵の目の前で撃てない銃」とかいう

笑えない冗談まで生まれてしまった。

しかも、撃針と呼ばれる部品が軟弱過ぎて

分解結合中にへし折れるという故障が時折発生したという。

三八式はその問題部分を重点的に改良を加えた。

撃針を強化し、機関部の簡素化及び部品点数減少を同時に行い、

砂塵流入防止用のダクトカバーを装着した。

しかしこのダクトカバーは太平洋戦争の際に取り外されることが多かった。

ダクトカバーが邪魔で流入した泥を払い落とせないからである。

でも結果的には「海の大和」「空の零戦」「陸の三八式」と謳われる名銃へと進化した。だが虎咲は、後ろから近づく151cmの少女に気付けなかった。

「ふうー」

虎咲の顔が一気に青に染まり、机の下を探し出す。

「部品が一個無くなったあ……あ、胸ポケットに入ってた」

「……………」

「お、お騒がせしましたあ……」

「……………」

しのぶの額に徐々に青筋が浮かび上がり、

腰に下げていた日輪刀に手をかける。

「虎咲!!」

「いいいやあああああ!」

日輪刀を鞘から引き抜いたしのぶは、1時間以上虎咲を追いかけ続けたのだ。

「虎咲の部屋」

「あれ?俺分解したまま放置された……?」

三八式もといサンパチ君は、分解されて放置された現実を突きつけられ、

内心こう思った。

（次撃つ時、1発目はジャムってやる……）

シヤレにならんトラブル宣言!どうなる虎咲!

オリキャラ集

森岡虎咲（もりおか こさく） 出身地 東京都 北豊島郡滝野川村（北区滝野川）

身長／173cm

体重／59kg

年齢／18歳

この物語の主人公、

鬼滅の世界では胡蝶姉妹と幼馴染。

父親も進撃の巨人の世界から来た転生者であった。

12歳の頃に父親を猗窩座に、母親と姉と妹を童磨にそれぞれ殺されている。

鬼滅の世界では神隠しに遭い進撃の巨人の世界へ飛ばされる。

実は前に一回転生を経験、そのときの経験でピアノが上手い。

蝶屋敷に引越した後は一週間に一回街へ赴きピアノ演奏を披露している。

自身で翼の呼吸を編み出し使用、刃の色は青と白は交互に変わる。

呼吸音は雷と水を合わせたような音がする。

似の呼吸という呼吸を自作、

見ただけで血気術だろうがなんだろうと似の呼吸に割り当て使用できる。

(例：似の呼吸 弍ノ型、破壊殺・滅式改)

装備品：隊服、立体機動装置、信煙弾、

三八式歩兵銃及び三十年式銃剣

呼吸：翼の呼吸：壱ノ型、雲煙過眼（左翼）

名前は違うが霹靂一閃の亜種。

速力はやや落ちたが、威力は上

がっている。

弍ノ型、全翼無連

日輪刀を二本持っている并使用

できる型。通称、弾幕。

機関銃のように綿密で、破壊力も

あるチート技。

参ノ型、為虎傳翼

直接的な攻撃力は無いが、身体能

力を極限まで上げる切り札。

使用時は瞳が赤く光り、一目で使

用の有無が確認できる。

動戦士ガンダムから「EXAMシステム」

技。

に特化しており、

消え去り、

弱体化までおまけで付与できる。

飛ばせる技。

一発の威力は霹靂一閃に相当する。

使用時間は一時間。元ネタは機

肆ノ型、霧散翼・改（左翼）

足止め技と言ってもいいような

相手の首ではなく足を斬ること

足を斬ると下半身が一瞬にして

相手の再生速度を落とすという

伍ノ型、集翼九連

九つの刃を一定の方向に高速で

全翼無連より弾数は減るが、一発

雲煙過眼・壊速

壊ノ型、集翼九連・倍壊

延ノ型、為虎傳翼・延

終ノ型、炎翼終連

似の呼吸：壱ノ型、冬ざれ氷柱

弍ノ型、破壊殺・滅式改

参ノ型、絶対領域・改

肆ノ型、圧縮窒素

伍ノ型、結晶ノ御子・改

追記：参ノ型 為虎傳翼の使用時に、瞳の様相が二度変化する事が確認されている。

その変化はSCP-910-JPの最終形態が元ネタ。

天童水葉（てんどう みずは） 出身地 東京府 北豊島郡本蓮沼村（板橋区本蓮沼）

身長／167cm

体重／???

年齢／18歳

鬼殺隊の癸剣士、(当時) 下弦ノ壺との戦いで虎咲に救われ、友人の2人と共に蝶屋敷で働いている。

使う呼吸は水の呼吸、育手は元甲の剣士である、刀の色は綺麗な蒼。

安中陽菜(やすなか はるな) 出身地 埼玉県 北足立郡川口市(埼玉県川口市)
身長/161cm

体重/41kg

年齢/17歳

鬼殺隊の癸剣士、水葉と同じく(当時) 下弦ノ壺との戦いで虎咲に救われ、友人の2人と共に蝶屋敷で働いている。

使う呼吸は雷の呼吸、育手は善逸と同じじいちゃんである、刀の色は黄緑。弟子時代、陽菜が選別に向かう前に弟子に成り立ての善逸に

“初対面で”告白されたが、全力で拒否している。

(善逸はこの直後に雷に打たれ髪が変色してしまっている)

新幹線の駅と名前が被ったのは許して…わざとだから…。

→正直名前も「陽菜」じゃなくて「榛名」にしてやろうとか考えてました

「安中榛名」…もうそのままやん…。

熊谷風華(くまがいふうか) 出身地 神奈川県三浦郡横須賀町

(神奈川県横須賀市)

身長／168cm

体重／Not found

年齢／18歳

鬼殺隊の庚剣士、水葉や陽菜と同じく(当時)下弦ノ壱との戦いで虎咲に救われ、2人と共に蝶屋敷で働いている。

使う呼吸は花の呼吸、育手は花柱胡蝶カナエ、刀の色は青紫。

水葉と陽菜より一期上だが、歳が同じなので仲がいい。

髪にはカナエの継子の証である蝶の髪飾りをつけている。

雫石太一(しずくいし たいち) 出身地 千葉県千葉町(千葉県本千葉町)

身長／169cm

体重／57kg

年齢／18歳

鬼殺隊の癸剣士、虎咲の同期で任務を共にする事が多い。

自分の家族は存命だが、友人を10人も殺害されたため鬼殺の道へ進む。ちなみに両親は裕太の鬼殺隊入りを了承している。

使う呼吸は風の呼吸、育手は不死川実弥、刀の色は濃緑色。

修（おさむ） 出身地 不明

身長／165cm

体重／51kg

年齢／18歳

時々暑苦しいと言ってひよつとこの面をずらす事がある。

顔は良いのだが、面が邪魔でそこまでモテない。字が綺麗。

縁壺零式の構造がめつつちゃ気になるらしい。

大月あずさ（おおつき あずさ） 出身地 埼玉県北葛飾戸ヶ崎村（埼玉県三郷市）

身長／153cm

体重／37kg

年齢／17歳

本編未登場のキャラです、注意してお読みください。
見たくねえ！って人はブラウザバックを推奨します。

虎咲の一期下の剣士、髪は肩にかかるかかからないかぐらいの長さで髪色は緋色。使う呼吸は月の呼吸、刀は黒色。

継国家直系の子孫で、家に伝わっていた書物を解読し月の呼吸を独学で習得。

彼女は親を鬼に殺され匿ってくれた友人の家族も鬼無辻に殺された事から、死神の子と呼ばれ、一時は子供であるため暴行を受けたことさえあった。

路地裏に連れ去られ、男達に襲われかけたあずさを助けたのが

当時まだ丙であった虎咲で、そこから彼女は鬼殺の道へ進んだのだった。

岩国児珠（いわくに　こだま）出身地　一宮県長生郡一宮（千葉県長生郡一宮町）

身長164cm

体重51kg

年齢／17歳

本編未登場のキャラです、注意してお読みください。

髪は穴色で一本結び、紐を解けば腰より少し高い位置に髪が来る。顔が女性寄りのためよくあずさに着せ替え人形にされる。

使う呼吸は雷と水で刀の色は黄色と蒼が交互に変わる特殊な色。

虎咲と同様の配色をしているが、関連性は今のところ不明。

彼は自分が住んでいた村が鬼に襲われ、自分だけが生き残ってしまった。

今は一軒家に住んでおり帰る家はあるのだが、

彼はいつも張り付いたような笑顔で人に接しており、

表情から感情を察するのは不可能に近い。

第捌話 お呼び出し

目隠しをされた虎咲は、船や馬車や歩きなど

一体どの方向に向かっているのかわからない程動かされ、

やっと目隠しが取られたと思うとそこはもう産屋敷邸だったのだ。

（は？ いやいやいや待って待って待って、まずなんで突の俺がここに呼ばれるんだ、なんだ？ 斬首か？ なんかしらつけた俺、カナエさんものぶもいるのか…。

あるとしたらしのぶに抱きつかれたことくらいか？

アイツ美人だから嫉妬でなんか在らぬ事でも囁かれたのかなあ。

しかも柱全員集合、やだなあ八つ裂きにされるのかなあ。

ていうか風柱の威圧感よ、

チラッと見たら『なんだテメエ！ 殺すぞ！』みたいな目だったぜアレは。

ていうか叛乱しようと思つたら叛乱できるやん俺、

立体機動装置も付けてるし三八式も持つてるし。

あ、弾薬胸ポケットに入ってる1グレリッブしかねえわ。

しかもガスが3分の1しかねえし刃も2セットしかねえわ）

虎咲はふと横にいた人物を見る。

甘露寺蜜璃、現炎柱の煉獄杏寿郎の継子で恋柱、

壇藏さん曰く炎の呼吸を恋の呼吸へ派生させた天才美女。

その可憐な格好からは想像もできないハイパワーで、

毎月の食費がとんでもないらしい。

それゆえ、お見合い相手に逃げられる事が多い。

しかし、問題は彼女の隊服にあつた。

(ホワツツ???)

隊服はある1人の隠、前田まさおが「1人で」制作しているのだが、

女性や少女の隊服には異常なアレンジを加える事があるらしく、

そのため隊士からのあだ名はど直球に「ゲスメガネ」

甘露寺の隊服は胸元がガッツリ開いたもの、そう全開だ。

度重なる事態に虎咲の脳内思考がフリーズ。

「あー太陽が綺麗だなー(棒)」

虎咲の現実逃避が始まった、勿論小声で。

甘露寺がコレで吹いた、

彼女の笑いのツボが浅い事が虎咲に知られてしまった。

「あの雲なんていうんだっけ」

虎咲はやめて、真顔やめてえ、と甘露寺が言っていたのを無視。

一番端に立っていた巨漢に声をかける。

「あ、行冥さんじゃないですか」

「その声は虎咲か、生きていたのだな」

悲鳴嶼行冥、かつて虎咲やカナエさん、しのぶを助け出してくれた鬼殺隊士。

今は岩柱として柱最年長の座に就いている。

壇蔵による情報によれば、鬼殺隊最強の男らしい。

「お館様の御成です！」

最終選別で案内をしていた2人の少女が声を上げた瞬間柱全員が跪いた。

虎咲も跪く、襖が開く音がすると優しい声が虎咲の上から耳へと入った。

「やあ私のかわいい剣士達、いきなり集めて悪かったね」

「いえ、お館様のご命令ならば直ちにその下へ向かいます」

先程の態度と打って変わって風柱が丁寧な敬語で輝哉に

「今日集まってもらったのはそこにいる戸山虎咲君についてなんだ」

一瞬で視線がこつちに向いた気がする、こういうの凄く嫌い。

「そもそもお前何者だあ？階級突くらいだろ？」

「まあ…そうですね…階級癸の戸山虎咲と申します」

なんで癸がここに呼ばれるんだ!と風柱と蛇柱が言つて来たが無視だ無視。

「まあまあ実弥、小芭内、私が呼んだんだからいいじゃないか」

申し訳ありませんお館様と二人は跪く。

だが、それでも虎咲を睨むのは止めない二人であつた。

「それに虎咲は上弦ノ弐の口から上を斬り飛ばしたそうじゃないか」

よもやよもやだ!と炎柱が大きな声で言つた。

虎咲の耳がキーンという耳鳴りと共に使い物にならなくなる。

(この際言つてしまおう、俺はただの一般癸隊士だ!)

「ほんの偶然ですよ、てか皆さん信じてませんよね?」

偶然剣先が上弦ノ弐の顔を斬り飛ばしただけですよ」

「まあ上弦の頭を斬り飛ばしたから階級は丙まで上げとくけど…」

?輝哉は心底残念そうな顔を浮かべて呟く。

?!?!)

「最後に君の呼吸を見せてくれないか?大木ならいっぱいあるよ」

「…何故俺が大木を斬つて鍛錬してることを知ってるんです?」

この会話、側から聞いたら異常な会話だろう、

大抵こう思うだろう、『この少年があんな大木を斬れるわけないだろ』と。現に風柱と蛇柱はそんな顔だ、カナエさんもしのぶも驚きを隠せていない。舐めるなよ風柱、見る前からそんな決めつけたような考えをしてはいけない事を教えてやる。

「はあ…肆ノ型までいいですよね？」

「うん、壊ノ型は腕が動かなくなっちゃうんだよね」

「もうあの人は何でも教えてるんですね…分かりました…」

辺りに虎咲の呼吸音が響き渡り、その場の全員の視線が虎咲に注がれる。

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼・双翼―

大木目掛け突進した虎咲は、2本の大木を根本から破壊。

「腕疲れた」

またも小声。虎咲は甘露寺の横を通り過ぎる時に眩き、

甘露寺は小刻みに震え出したのだ。

―翼の呼吸、弐ノ型 全翼無連―

十六本の大木が虎咲の手によって六十四本にされる。

可哀想に、安らかに眠れ大木達よ／by作者

(あとで材木屋に売ってあげよう、財布が潤う潤う。)

虎咲はそんな呑気な事を考えながら次の技を放つ。

―翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼―

瞳の色を黒からに紅に変色させた虎咲、

一同が紅い尾に気を取られているうちに虎咲は二百メートル程移動し、大木を丸裸にしその場で木材へ加工したのだ、五秒で。

(これも材木屋行きだろうな、木材よ―家の材料となるのだ―)

もちろん一同何が起こったのか理解できていなかったが、

輝哉だけは冷静に虎咲の業を見据えていた。

―翼の呼吸、肆ノ型 霧散翼・改―

目標は大木ではなく異形の鬼サイズの藁、

と言つても四mぐらいの大きさ、いやそれ以上の藁の塊。

すれ違いざまに足の部分を切除、

倒れた反動で僅かに浮き上がった藁の半分は、霧のように消えていった。

もうこの技を見た方々は何も言わなかった。否、言えなかったの方が正しいだろうか。

そんなこんなで彼の呼吸披露が終わった、開いた口が塞がらないとはこの事だろう、

こんな強力な呼吸を少年が一から作ったなんて見なければ信じないだろう。「すごいね…今すぐにでも君を柱に迎えたい気分だよ」

「残念ですがその願いを受けるのは不可能です、

入隊1、2ヶ月なんかで柱になんかなれませんよ」

なお、この虎咲の中の常識をぶち壊す少年が現れるのはまだ先の事である。

「そう…一年後に返事を聞くとよ」

「それまでに俺が生きてればですけどね」

「じゃあ今日は解散」

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

各々帰宅の途についた、

隠が来るまで帰れない虎咲は、行冥としのぶと話すことになった。

「虎咲、お前はあの呼吸をどう思ってた」

「行冥さん、それは…どういう？」

「あの憎しみを糧に創ったわけではないんだろ？」

一瞬で虎咲の目が赤黒く光る。

目が光ったまま行冥の方に向き、

「さあ…どうでしょうね」

と、一言言い放ったのだ。

一瞬でカナエとしのぶの顔が曇る、

やはり2人も覚えていた、あの時の恐怖と絶望を。

「あの日は絶対に忘れる訳ないですよ」

虎咲は真顔のまま言い放ち、行冥もそれに呼応するように口を開いた。

「ああ…私も忘れる訳ないさ」

第玖話 絶望と憎悪の始まり

「虎咲！」

「どうしたの、しのぶ」

「ここは東京府北豊島郡滝野川村、2人の少年と少女が家の庭で遊んでいる。

「ねえねえ！あのマント見せてよ！」

「あれ父さんのなんだけどなあ…父さん！」

「んあ？アレか？いいぞー持ってけー」

虎咲と呼ばれた少年は親の物である緑の下地に翼が描かれたマントを
持ち出し、しのぶと呼ばれた少女へ持っていった。

「やっぱりかっこいいね！羽織とはまた違った感じ」

「しのぶ、着る？」

「いいの？いいんですか？おじさん！」

「しのぶちゃんか？いいよー」

「やったあ！」

少し大きめなマントは小さなしのぶにはまだブカブカで、

本来だったら腰までしか隠れないはずがしのぶの場合は膝まで隠れてしまっていた。

「やっぱりデカいね…私小さいから…」

「まあ大人のヤツだしね、俺でもデカいよ？このマント」

「このまま着ていたいけど…おじさん！ありがとうございます！」

「いやいや別に大丈夫だよー」

やはりこの人には緊張感が無いと心の中で思うしのぶである。

時は夕刻、そろそろ夕飯の時間だろうか、ある生き物にとつても。

「じゃあね、しのぶちゃん、ご両親によろしくね」

「はい！ありがとうございます、おばさん！」

この瞬間、虎咲の母親がカチンとなったのは言うまでもない。

二十四歳のお姉さんには少々キツかったように笑顔のまましのぶに語る。

「しのぶちゃん、私はまだ24よ？おばさんじゃないわ、いいわね？」

「す、すいません…！」

じゃー！と言いながらしのぶは自らの家路につく。

滝野川村、人々は仲が良く盗難も殺人も起こらない

比較的治安の良い村、この日々が当たり前だと思っていた。

しかし今日全てが変わってしまった。

「きゃあああああ！」

耳が痛いほどの悲鳴、普通なら聞こえるはずのない声。助けを乞う声や嗚咽、やめてくれと言う人々。

そして虎咲達は両親によって襖に隠された。

「ここにいれば安全だ、いいな？絶対に動くなよ!？」

いつも間延びしている父が焦った様子で呼びかける。

「絶対に動いちゃダメ、指切りげんまんよ?」

「う、うん」

「わかったわ」

まだ子供の俺達は親の言う事しか聞けず、

何が起こったのか聞くことすら叶わなかった。

それからウトウトしてしまい、起きたのは深夜、

一緒に襖に入った姉や妹がない。

襖は閉められているが外に出た形跡があった。

「嘘だろ!？」

襖を勢い良く開け放ち、走って外へ出て行った。

(まず何が起きたんだ、盗賊か?)

「うっ……おええ……」

家を出て行った虎咲の目に映ったのは男性の死体、

隣人の男性の物だと虎咲は思った。

見るたびに知っている人の死体が映る、

いつそ目を閉じてしまいたいが、人の死体なんか蹴りたくない。

「どこ行つたんだ……父さん、母さん、姉さん、夏……」

微かな声だが、「お前を殺す！絶対になだ！」と父の声が虎咲の耳に入る。

（そっちか……）

虎咲は路地裏を駆使して声が聞こえた場所へ向かう。

「ごめんねえ？君の奥さんや娘さんはもう救済しちゃったよ、まだ食べれてないけどね」

「……何故ここに上弦が2体も湧くんだけ？」

「決まってるだろ！陽一郎、貴様を鬼にするためだ！」

そこには化け物が2体、右目には上弦と刻まれ、

閻魔の様な格好の化け物の左目には式、

体に刺青が多い化け物の左目には参と刻まれていた。

「猗窩座、俺は鬼になるんだったら腹だつて切つてやる、

そして童磨、俺は貴様のしていることを虐殺だと思つている」

「ならばここで死ね！」

「はあ……やっぱり男は嫌いだよ」

（父さん！）

虎咲の生存本能が告げている、『逃げろ』と。

来た路地を通り抜ける前に虎咲は父の方を見る、

―術式展開、破壊殺・滅式―

片方の化け物が唸る。

その途端にソイツの足元に

羅針盤のようなモノが展開され、父が土地が抉り取られた。

（嘘だろ……父さん……）

路地を通り抜け小道に出ると、見覚えのある顔があった。虎咲の姉、松だ。

「姉さん！」

「あ……虎……咲……なの……？」

松は力なく腕を上げ、虎咲の顔を触れる。

「暖かい……私はもうすぐ……冷たく……なるって……いうのにな」

松は頭から血を流し、息を止めた。

「……………はっ」

虎咲は、姉が死んだという事実を受け入れる事が出来ず、困惑してしまふ。近くにもう一人見覚えのある少女がいた、妹の夏だ。

「夏！」

呼びかけ夏を腕の中に抱える、夏は虎咲に気づき声をだす。

「兄さん……？も……う……お母……さんも……お姉ちゃんも……死んじやった……？」

「喋るな！」

「私も……そろそろ……ダメ……かも……」

もう夏は助からない、この出血量でこの小さな体が生きられる訳がない。

そんな現実なんか当時の虎咲は認められなかった。

でも、最後に彼はどうしても聞き出したかった事があつた。

「……姉さんと母さんを殺し、お前を傷つけた化け物、どんな奴だつた？」

「頭から……血を被つた……みたい……閻魔様みたいな見た目だつた……」

その瞬間彼は確信した、父を襲つた童磨という鬼が二人を傷付けたのだと。

「ごめん……ね……もう……ダメ……みたい……」

「おい！夏！夏！」

突然口に温かいものが触れる、夏の唇が虎咲の口に触れたのだ。

「えへへ……大好きだよ……兄さん……」

そう言い残し夏の腕がだらりと下がり、夏は目を閉じてしまった。

(父さんは死んだ、母さんも死んだ、

姉さんも死んだ、夏も腕の中で死んだ、何故俺は生きている?)

そんな疑問に答えられる人はおらず、

虎咲にとつて短く最悪な夜が明けたのだ。

(何故俺が生きている? 何故俺が生かされた? 何故俺の家族が死んだ?)

何故父さんが死んだ? 何故あの化け物はこの村を襲つたんだ?

罪のない人間を何故虐殺したんだ? だれか答えてくれ……!!)

「う……うわああああああ!!!!」

現実に耐えきれなかった一人の少年は、一人泣き崩れたのだ。

しばらく経つて、詰襟を着た何人かの少年たちが滝野川村を訪れる。

その詰襟の背中には「滅」という文字が縫い付けられている。

後に岩柱となつた行冥が虎咲を見つけ、声をかけた。

「おい君! 大丈夫か!」

「大丈夫じゃないと思います、俺の精神が」

(この子も襲われていたのか……)

「君、名前は?」

「森岡虎咲」

行冥は心臓が飛び出るほど驚く。

森岡陽一郎という史上最強の柱が昔まで鬼殺隊に身を置いており、鬼殺隊の中でも輝哉の次に尊敬されていた人物だった。

その親族かもしれないと行冥は思ったのだ。

その質問が地雷だとも知らずに。

「父親の名前は？」

「森岡陽一郎」

「陽一郎さんは何処にいるか分かるかい？」

少年は指で上を指した、空を指したのだ。

死んだのか？まさか…という行冥の疑念は虎咲から明かされる。

「俺には両親と姉と妹がいました」

虎咲は過去形で焦点が合っていない目で行冥を見る。

「この短く最悪な夜で全員死にました、今、森岡家は俺だけです」

「虎咲！」

さつき助け出した町民の内の一人、しのぶが駆け寄る。

「虎咲！絹代さんは!?陽一郎さんは!?松さんは!?夏ちゃんは!?!」

(そうか、この2人は家族ぐるみの付き合いだったのか…)

虎咲は、何も言わず首を横に振ったのだった。

「え…？嘘でしょ…？」

「…」

しのぶは虎咲の胸倉を掴み、問いたです。

「なんか言つてよ！私達は！父さんも母さんも殺された！私達を守つて！」

「…」

虎咲はしのぶに無言で抱きついた、勿論しのぶは抵抗する。

「ちよっ！何すんのよ！」

「…あ…」

「何言つて…ッ！」

そうだ、虎咲は泣いていた。

「カナエさんは生きてるんだろ？」

「ええ…姉さんもシヨックみたいだけど…」

「じゃあよかつたな…」

「よくなんか…！」「俺は全員死んだよ」…え？」

しのぶは殴ろうとした拳を下ろし、困惑した様子で虎咲を見る。

「全員死んだ、父さんも母さんも姉さんも夏も死んだ、

俺に家族と呼べる人はいなくなつたんだよ」

しのぶは虎咲の家族と過ごし遊んだ日々を思い出し、

その人々がもうこの世にいない事を悟つた。

「うわあああああああ！」

しのぶの中の何かが切れ、泣き叫ぶ。

自分の親だけでなく、

家族ぐるみで付き合っていた相手の家族も

虎咲を残して死んでしまった。

「……」

虎咲は黙りながら、泣き叫ぶしのぶの頭を撫でたのだつた。

森岡虎咲失踪の二年前の事である。

第拾話 戦闘はいつも唐突に

虎咲は隠が来ていた時にはもう別の隠の背中中で熟睡し、蝶屋敷に着いた時にしのぶに叩き起こされたのだった。

その時の隠の証言、『夫婦か！とつとくつつけ！』だそうだ。

―翌日―

「カー！任務ダア！ボサツトシテンジャネエ!!」

鴉が叫ぶ、これは虎咲の鴉だろう。

「うるせえ！今何時だと思つてやがる！」

寝起きの虎咲はとてつもなく機嫌が悪い。

彼の機嫌の悪さは壇蔵も諦めてしまう程のものだった。

「アア!!18時前ダロ!!起きろ！」

「嫌だ！俺は昼寝が日課なんだ！」

「虎咲？任務だからとつと行きやがれくださいね？」

「アツハイ」

しのぶは笑つてはいたが、虎咲はその笑みが本心からの笑みだとは思わない。

顔面に青筋浮かべて笑う人なんていないと彼は推理したからだった。

「用意するからちよつと待ってな」

元々隊服を着ていた虎咲は立体機動装置を付けて三八式を担ぎ出し、

マントを羽織つて虎咲は部屋から出る。三八式初の実戦である。

「待たせたな。さあ、鬼が出たのはどこだ?」

「カアー! 豊多摩郡渋谷村ダア!」

「了解。先に行くぞ」

立体機動装置を駆使し高速で進む、幸い建物が多いのでアンカーを刺す目標には困らない。

大量に張り巡らされた電線が厄介だがそこまで困るほどの物でもなかった。

「てかこんだけ高速移動すれば遠くても結構早く行けるんだな」

「才前ハ少シ手加減シタラドウダ!」

鴉でも追いつくのがやつとな速度で飛ぶ。

ついに勇の師匠の改造の魔の手がファン周りに到達し魔改造、

ついに純正、つまりあの世界から持ってきた部品は柄だけになってしまったのだ。

「この町か?」

「カアー! ソウダア!」

普通なら夜の村というのは活気に溢れ、人通りも少ない。

「静かだ、何だこの静けさは……」

（まるで村自体が死んでいるみたいだ）

「おい！鬼狩り！」

虎咲が振り向けば、鬼が居るではないか。

昼寝の邪魔をしたのはコイツかと虎咲は鬼に向けて憎悪の感情を向ける。

「なんだ？自分から死にに來たとは、勇者か貴様」

「ああ!?誰がお前のような鬼狩りに殺されるか！」

鬼は嘲笑し、薄気味悪い笑みを浮かべた。

「何だお前、気持ち悪いぞ」

虎咲は本気で引いた、流石に鬼も気づいたようで焦る。

「待て、引かないでくれ。今お前の仲間達がこの小屋に入っている」

「で？それがどうした」

鬼の顔に一瞬だけ青筋が浮くが、すぐに消え失せる。

「この中には俺の仲間も入ってるんだア、お前が俺を殺せばアイツらは俺の仲間の胃袋に収まる」

「人質作戦か、鬼にしては考えたな」

鬼は驚く。虎咲は焦りもせず怒りもしない、まるで鬼のように。

「お前……本当に人間か……？」

虎咲は口角を上げ口を開く。

「さあ……どうだと思おう？」

―翼の呼吸、式ノ型、全翼無連・避人建―

これは改良した全翼無連、人も建物も貫通する弾幕を発することができる。

しかもその弾幕は鬼しか切り裂かないため隠にも優しい技なのだ。

「ウガアアアアア!!お前!化け物がああ!!」

鬼は一瞬で弾幕の餌食となつてズタズタに引き裂かれ、虎咲を化け物呼びわりしながら消えていった。

虎咲は小屋の戸を開けると、そこには鬼殺隊の隊士が六人ほど固まっていた。

縄で縛られていたが、特に大きな怪我は無く全員無事だった。

「あの!いきなり鬼が細切れ肉と化したんですが!何か知ってるんですか?」

一人の少年が威勢よく虎咲に聞いた、虎咲は何か考えるように間を開けたが、

「さあな、俺が来たときにはもう細切れ肉になつてたよ」

何故か彼は嘘を吐いた、先程の化け物呼びわりが頭に引つかかっていたのだろうか。

「あの!ありがとうございます!」

一人の少女が虎咲に頭を下げた、虎咲は少女を見て口を開いた。

「俺はただ伝令に呼び出され鬼を殺したただけだ」

「でもこの村を救ったんですよ、貴方は」

去り際に少女は言った、何故それを虎咲だけに聞こえるように言ったのは謎であるが、その時虎咲はそこまで気にしていなかった。

（あ、三八式使ってなかった…）

蝶屋敷に帰る道中それを思い出した虎咲は、

何故三八式を持ってきたのか自問自答したが、たいして気にせず蝶屋敷に上がったのだ。

く一ヶ月後く

（この前行冥さんに思い出させられたが、アレ使えるかもな…）

素晴らしい虎咲は一人で鍛錬場へ赴いた。

（記憶を掘り起こせ、前世も前々世でも関係ない）

ー似の呼吸、壱ノ型 冬ざれ氷柱ー

目標の藁人形目掛け無数の氷柱が降り注ぐ、

全ての藁人形の中身が現れ、見るの無惨な格好へ変えていく。

(この技、上弦ノ式のヤツだが…やはり破壊力は十分か…)

― 似の呼吸、弐ノ型 破壊殺 減式・改―

藁人形がいた場所は土地ごと抉り取られ、あの時の威力が再現できた。

(下弦レベルは瞬殺だろうが…バレたらマズい…これは最終決戦まで温存か)

やはり記憶だけではどうにも元の威力を再現できる筈がないのだ。

― 似の呼吸、参ノ型 絶対領域・改―

前々世の記憶を元に作成した型。

罨が仕掛けてある裏山へと向かい発動、わざと罨へ引つかかる。

ガキーン！と耳が痛いような音を立てて罨を弾き返した。

(やはりこの技はチートだな、

隊士だけじゃなく民間人を守るのにも使えるか…)

― 似の呼吸、肆ノ型 圧縮窒素―

刃を地面に突き刺し範囲の設定をする、虎咲は半径20mに設定していた。

トリガーを引いた5秒後にそこら一帯が吹き飛ばされる、

一瞬で土地が無くなり、さすがに虎咲でもビビった。

ただし、この技には致命的な欠点がある。

どんな出力でも刃一本なのだが、

一回一本の刃を消費するため、補給無しだと最高7回しか発動できず、予備の刃を持って行こうとすると、動きがほんの僅か劣ってしまう。使いたいところに注意したい技である。

(あとは…)

「すまんなしのぶ、心配させて」

そこには泣きかけたしのぶが立っていたのだ。

「もう一人で鍛錬しに行かないで下さい」

「なんだ？そんなに怖いのか？」

「虎咲がいなくなってしまうって思ってしまうんです」

虎咲が進撃の巨人の世界に飛ばされたのは、

この世界で鍛錬中に神隠しに遭ったからだだったのだ。

家族だけでなく友人も失ったしのぶは

一、二ヶ月も口を開かなくなってしまった。

(まあ…この世界に戻れたのも神様の厚意だからなあ…)

「わかった、今日はもう寝るよ」

「わかったならいいですよ」

この二人は直後に緊急招集が来ることはまだ知らない。

「カー！緊急招集ウ！牛込区若松町二襲撃イ！」

「そうか、食え」

「アリガトオ！」

しのぶは虎咲が鴉に金平糖をあげているのを見て困惑したのだった。

「鬼の強さは？」

「マダ分カランガ下弦程ノ強サハアルゾ！」

「行くぞしのぶ、柱の力を見せてやれ」

しのぶは先の緊急会議で蟲柱になり、

カナエと入れ替わりで柱に就任したのだ。

「わかりました、行きますよ」

「その喋り方、カナエさんの喋り方だろ？その喋り方はやめてほしい」

「…分かったわ、虎咲」

「少し待ってくれるか？」

虎咲は自室に入り、ポケットや弾薬袋に入るだけの挿弾子を詰め込み、

マントを羽織り、立体機動装置を付け、三八式を肩にかけて飛び出した。

「すまん、待たせた」

「結構重装備ね…ッ！そのマント…」

「今更か…そうだ、しのぶに一回着せたこともあったな」

「うあ…」

しのぶは泣きかけたがすぐに収まる。

虎咲の目には光が宿っておらず、

憎しみに染まったように真っ赤に光っていたのだ。

「…え？目が光ってるんですか？」

勿論しのぶは困惑する、普通人の目が紅色に光るはずがない。

「あーゴメン、あまりに憎いと自動的に発動しちゃうんだよね、

コレは参ノ型の為虎傳翼、身体能力や反射神経を極限まで強化する技で、

原理は知らんが目が紅く光るんだ、制限時間は四十五分。

それを超えると気を失って暴走してしまう可能性があるんだ」

虎咲が「解除」と念じると、虎咲の目の色が紅から普段通りの碧へ戻った。

「さあ、鬼狩り様の出撃だ」

「ええ、行きましよう」

二人の鬼狩りは、襲撃に遭った若松町へ急行したのだった。

「なんで斬れないのよ！」

「知らないよ！てかコイツ下弦じゃん！」

「もう癸の私達じゃ抵抗できないよ！」

「ウチは癸じゃ無いけどね！」

三人の少女達がある鬼と対峙していた、

その周りには鬼殺隊士の死体が数多く転がっていた。

その鬼は――

「ははは、滑稽だね、人間って喰われるしかないのに」

左目に「下壺」と刻まれていた。

虎咲達の到達まで、あと五分。

――

「虎咲！」

しのぶと共に若松町へ急行していた虎咲は焦っていた。

途中に鴉からもう既に多くの隊士が死亡している旨の報告があり、

これ以上の犠牲を出さない為、相当な速さで急行していた。

「虎咲！聞いてるんですか!?!」

「なんだしのぶ！」

「私は怪我人を相手してていいんですか!?!」

先程の会話で鬼を相手するのは虎咲だけで、

しのぶは怪我人の相手に専念する事を決めた。

「俺が怪我人を相手できると思うか？」

虎咲の目が紅く光る。

「…無理そうですね」

そんな会話をしていると若松町が見えてきた、

一番手前の一軒家の壁は、もう虎咲のアンカーの射程内だ。

「俺は先に行く！しのぶは町民の避難と怪我人の相手をやれ！」

「無茶ね…いいでしょう！やってやろうじゃないですか！」

威勢良くしのぶは虎咲に応え、怪我人がいるであろう方向へと進む。

怪我人の相手はしのぶの得意分野、彼が口出しする理由は無い。

「行くぞ、鬼狩りのお通りだ」

アンカーを射出し建物に突き刺す、

飛翔しガスを噴射、抜刀し鬼を探す。

(あそこか)

そこから一帯が吹き飛んでいる場所に急行、

右の刃の調整をする、

(爆破範囲は40m…さあ、やってやろうじゃないの)

―似の呼吸、肆ノ型 圧縮窒素―

―似の呼吸、参ノ型 絶対領域・改―

虎咲が下弦ノ壱の目に刃を突き刺し離れる。

しかし虎咲の目にある物が映った。

「おい！お前達！」

少女隊士が三人、そこに固まっていた。

すぐさま絶対領域の範囲内に入れトリガーを引く。

刃が大爆発を起こし、そこら一帯の土地を抉る。

「…援軍の方ですか？」

蒼い羽織を着た1人の少女が訝しげに虎咲を睨む、

そりやそうだ、今の虎咲は為虎傳翼を発動して

瞳は真つ赤に染まっている、側から見れば鬼の目そのものだ。

「？まあ…援軍だけど…」

「その目でも言われても説得力なんてありませんよ、虎咲」

蝶のようにヒラリとその場に着地したとは他でもない、

蟲柱胡蝶しのぶである。

「あれ？風華さんですか？」

しのぶは三人のうちの一、橙色の蝶の髪飾りを付けた少女へ声をかける。

「しのぶさんですか…：どうですか？師範ってまだ怒ってます？」

『次来たら絶対ただじゃおかないわ』って言ってましたよ」

風華と呼ばれた少女はマジか…と項垂れた。

そこに追い討ちをかけるようにしのぶが口を開く。

「まあ姉さんに断らずに選別に向かったのだから

当然っちゃ当然ですよ。自業自得です」

だが虎咲は考えた。ココは鬼の目の前、ましてや下弦ノ壺だ。

その下弦ノ壺の目の前でこんなに談笑していいのかと。

虎咲は左手に持っていた日輪刀を逆手に持ち替える。

「てか俺思ってたんだよね」

「どうした下弦ノ壺」

「俺って大治って言うんだだけだよ」

何故自己紹介をしたのか、というツツコミはしないでおこう。（書いたお前が言うか）

「どうして十二鬼月の俺ん前でこんなにゆっくり出来るのかなあって」

「まあ確かに…：なあ大治」

「どうしたんだいマント野郎」

虎咲はひどい悪口に反応せずに答える。

「まだ日の出までは余裕があるよな…」

「まあね」

「さあ…殺し合おう、夜が明けるまで…命尽きるまで！」

ここに、下弦ノ壱と虎咲の戦いの火蓋が切つて落とされたのだった。

「しのぶ！その3人を任せた！」

「わかつたわ！逝つて！」

なんだか不穏な感じに聞こえたがいいだろう。

虎咲は四人の期待を背負い戦闘へ赴いたのだ。

—————

く 一時間半後く

「ねえねえ！ここなの!？」

一人の鬼殺隊の少女が、若松町に到達した。

「間違イナイ！ココガ若松町ダ！行ケ、真菰！」

「わかつたわ！ありがとう！」

そう、虎咲の同期である鱗滝真菰だった。

第拾壹話 模倣は最強なり

(やはりコイツの血気術は厄介だな…)

下弦ノ壱。虎咲はヤツを童磨とほぼ同じ血気術を使用する鬼だと悟った。

威力は童磨に遠く及ばないが、や粉凍りの脅威は健在だった。

「やはりあの方に頂いた力は強い！人間など虫けら同然だ！」

「誰が虫けらだつて…!？」

「お前ら人間だ！貴様らは虫けらの様にのたうち回る事しか出来ない！」

「そうか…使いこなせばいいんだがな！」

(実戦で使うのは初めてだが…通用するのか…!?)

― 似の呼吸、壱ノ型 冬ざれ氷柱―

無数の氷柱が、大治の身体を引き裂かんとする勢いで降り注ぐ。

大治は勿論避けたが、動揺から来る反応の遅れで少し氷柱をくらつてしまう。

「くっ…何故人間の君があの方の技を使えるんだ!？」

「簡単さ、『真似』しただけだ」

(それなのにここまで威力が同じなのは何故だ!?)

誰がどう見ても今の太治の様子は焦っていると捉えられるだろう。

目の前の人間が、自分に力を与えた上弦ノ式の技を使っている。

そもそも上弦が発する技を人間が使用すれば

体が追いつかず、身体の内側から崩壊するはずだ。

なのに虎咲はそれを乗り越えた、

冬ざれ氷柱を使っている時点でそんなものはわかっていた。

分かっている。ただ、太治の脳がその事実を認めなかった。

人間如きが鬼、

ましてや上弦と同じ力を発揮するなんて認めたくはないだろう。

虎咲はチラツと首に下げていた懐中時計を見る。

この時計は調査兵団時代の官給品だ。

時計の針は三時四十五分を指していた。

(今は夏だったよな……あと三十分近く……行けるな……)

ー似の呼吸、肆ノ型、圧縮窒素ー

辺り一帯を吹き飛ばし、太治も吹き飛ばす。

その爆風は太治の腕を消滅させ、粉凍りも吹き飛ばす。

「何故だ！何故！」

大治は考える事すらままならい程脳が限界を迎えていた。

「お前に無くて俺達にある物は、なんだと思う？」

「そんな物！あるわけ無いだろう！俺は鬼だ！完全な生物だ！」

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼・右翼―

高速で強力な一閃は大治の首を捉え切断、振り向いた瞬間に虎咲は言う。

「冷静さだ、どんな場面、どんな状態でも冷静さが無ければならない。」

大治、お前にはそれが無かったんだよ」

大治の体は消滅を始める。それは、彼がこの世からいなくなるという事だ。

「冷静さ……かあ、俺は地獄に行くのかな……」

「殺した人々への償いが終われば、また生を受けられるだろ……」

次は道を踏み外すなよ、大治」

「ああ……分かってているさ……虎咲……」

〜戦闘開始から二時間半、戸山虎咲により下弦ノ壱撃破〜

「カァー！カァー！戸山虎咲ニヨリ下弦ノ壱撃破ア！」

「ええ!? 一人で!？」

救援に向かった真菰は、その伝令に驚きを隠せていなかった。

「ソウダア！」

「ほんとに柱になっちゃうんじやないかなあ…」

真菰は徐々に遠ざかって行く虎咲に心配を覚えたが、それは杞憂だとすぐに思った。

「ツ！虎咲!!」

そこには、戦闘後脱力して倒れていた虎咲がいた。

「ん…真菰か…?」

「うん！虎咲、大丈夫なの!?!」

真菰は虎咲に駆け寄る。それを見た虎咲は、少し安心したように

「少し…眠りたい…」

虎咲は真菰に寄りかかり眠りについた。

「え!?ちよつと…!」

「zzzz…」

「え、もう寝たの?」

真菰は虎咲に寄りかかれ一瞬嬉しかったが、

冷静になってみれば相当恥ずかしい事をされているのに気付き

顔をゆでだこの様に真つ赤に染めていた。

そこに今絶対に来ては行けない人物がやって来た。

「虎咲！つてか貴女誰ですか？」

そう、蟲柱胡蝶しのぶだ。

「えーつと…鱗滝真菰です…」

真菰からすれば、柱であるしのぶに声を掛けられる事も、

否隊律違反すら起こしていないのに刀を向けられている事も理解できない。

「質問を変えます、何故虎咲に肩を貸しているのですか？」

「えーつと…」

「んーしのぶうー」

虎咲が起きた、起きてしまった。

諭えるならアレだ、修羅場に何にも知らずに入ってきてしまった人だ。

「よーし、虎咲。尋問の時間だあ」

「覚悟して虎咲、真菰さんとどこまでやったの？」

真菰としのぶは顔や腕に青筋を浮かべ、張り付いた笑顔で虎咲に近づく。

「……………は？」

その早朝、若松町に一人の少年の悲鳴と、二人の少女の怒号が響き渡ったのは言うまでもない。

「うわー無いわー勘違いで人を襲うとか無いわー」

虎咲の目からは光が消え、狂った機械のようにその言葉を繰り返す。

「許して〜虎咲〜しのぶが殺つたろうぜって言った来たから〜」

「ちよつと真菰！なんで私のせいなんですか!？」

「許すから喧嘩するんじゃありません」

「喧嘩してない!!」

「おー仲良いねー」

「いいでしょ別に!!」

「あーあまた緊急招集だあヤダア」

「虎咲なんだかんだで甲になつてゐるわよね」

しのぶが虎咲に追い討ちをかける、

鬼殺隊での柱の条件は、

『甲であること』

『十二鬼月を倒す』又は『鬼を50体滅殺する』

であり、

虎咲は先月、町を寝ぐらにしていた鬼15体を一掃しており、

階級は甲にまで上がってしまった。

「え、じゃあもう柱になれるじゃん！」

真菰は同期から柱が輩出されることを喜んだが、

虎咲が柱になるという事は、それだけ任務の数も増え、

会う暇が無くなってしまふ事を意味する。

「私、蝶屋敷で働いてもいい？」

「えつと…私はいいいですけど、姉さんが許してくれるかどうか…」

そう、真菰の考えはこうだ。

『普通に会いに行っても会えない』

←

『だったら虎咲が住まわせてもらっている蝶屋敷に住めば良いじゃない』

そう考えてこんなアホみたいな思考に辿り着いたようだ。

「まあ…姉さんなら『まあ！家族が増えるのね！』って言って

簡単に許してくれるわよね」

「えつと…話の流れが見えないのは俺だけ？」

やはり鈍感野郎虎咲、話の意図が全く理解出来ないようだ。

「虎咲だけですわね」

「虎咲、こういう話を理解出来ないと一生鈍感野郎になっちゃうよ？」

しのぶと真菰から同時に言葉の毒が飛んできたが気にしないと適当に流した虎咲。しかし、目から塩水が垂れたのは果たして気にせずにはいられるだろうか。

「もう帰るか、なんだかんだ今日寝てないしな」

こういう時に限ってお館様は虎咲を呼ぶ。

戦闘後に疲弊した状態の虎咲をだ。

「カー！森岡虎咲ヲ産屋敷邸ニ連レテ行ケエ！」

「あーもヤダ、死んだフリする」

「虎咲、行きましようね？」

「……」

「仕方ないですね、真菰、手伝ってくれる？」

「持つてほしいんでしょ？」

「ええ、お願い」

こうして虎咲は美女二人によって産屋敷邸へ連行されたのだった。

「ああ…嫌なんじゃあ…柱になんかなりたくないのじゃあ…」

虎咲は期待されるのが嫌いだ。

現に柱という鬼殺隊で最も期待される立場に立ちたくないというのが証拠である。

「いいじゃん柱だよ柱！」

「私は虎咲が柱になつても別にいいんですがね」

真菰としのぶは、虎咲が柱になつても強いから問題無いと言うが、

虎咲は強いかどうかを心配している訳では無い。期待されるが本当に嫌なのだ。

彼の嫌いな物上位3位は「裏切られる事」「期待される事」「人を殺す事」なのだ。

「人を殺す事」、これは彼の過去が関係してくるが、それはまた別の話。

第拾弐話 毎度お馴染み柱合会議

「あー着いちやつたーもーやだーやめてー」

虎咲はまた狂った機械の様に同じ言葉を繰り返していた。

「オイ胡蝶、集合時間はとつくに過ぎてている。」

何処で何をしていた、伝令を聞いていなかったのか？」

蛇柱、伊黒小芭内がネチネチとしのぶに絡む。

今に始まったばかりでは無いが、伊黒のしつこさは前から有名だった。

しのぶは気にしていなさそうにしているが、伊黒は気付いてしまった。

虎咲を持つしのぶの手が腕にめり込んでいる事を。

(森岡…腕の傷を驚掴みにされてるじゃないか…)

伊黒は心の中で静かに手を合わせ、何もなかったかの様に振る舞う。

「…何もこの虎咲が散々ごねまして、少々いや結構遅れてしまいました」

この馬鹿とは紛れもない虎咲の事なのだが、

虎咲は大治戦での腕の傷がしのぶに驚掴みにされているので

そんな悪口に耳を傾ける余裕なんぞ無かった。

「オイテメエ、森岡とか言つたな」

「ええそうですけど」

「お前：」「お館様の御成です!!」イヤ、何でもない」

風柱、不死川実弥が何かを言いかけたが、

双子の少女が輝哉の登場を知らせた。

不死川は輝哉に忠実なのですぐに跪く。

「やあ私の可愛い剣士達、今日も顔が見れて嬉しいよ」

「して、本日はどのようなご用件で我々をお集めなされたのですか」

流石不死川、未だにその手のひらクルクルワイパーは健在である。

「今日も虎咲についての会議なんだよね」

嗚呼、終わった。もう鬼殺隊なんか辞めてやろうかと心の中で呟いた虎咲。

もう彼は観念して輝哉の言葉に耳を傾けた。

「下弦ノ壺を一人で討伐し上弦ノ弐をも退けた。」

虎咲、君を翼柱として任命したい。いいかい？」

「お館様、今まで柱は九人まででした。」

今、もう柱が九人いる時点で十人目の柱なんぞ必要なんでしょうか」

やはり虎咲だ、こういうのはよく気付く。

「私はたとえその慣例を壊してでも鬼無辻無惨を殺してやりたい。」

近いうちに：いや、私の代で終わりにしたいんだよ、虎咲」

微笑みながら輝哉が虎咲に語りかける。

しかし虎咲は真顔のまま輝哉の目を見て言い放った。

「俺は為虎傳翼で身体能力を底上げしてやっと上弦と互角に戦えるんです。」

「まだまだ力不足だと思いますが？」

「少なくとも為虎傳翼は君の実力で習得した呼吸なんだろう？」

「だったら君はもう互角に戦えるさ」

「はあ…一年は待つてくれるって言うってたじやないですか…」

虎咲は溜息を吐きながら観念したように声を出す。

「やつてくれるのかい？」

「…：分かりました。森岡虎咲、翼柱の任をお受け致します」

「ついに翼柱、森岡虎咲がここに誕生したのだった。」

「ですがその前に、俺の過去を知ってもらっても良いでしょうか」

「え？君は北豊島郡の滝野川で「それより前です、お教えしましょう」…」

「これは今まで誰にも言ったことがありません」

何かを決意したように虎咲は口を開いた。

2人の頼れる上司だ。

「突然だが…秩父に行つてくれないか、

某国のスパイがそこに逃げ込んだそうだ」

「スパイ…ですか…」

「君達の任務は、スパイを探し出し抹殺する事だ。

辛い任務だが、上からの指示だ。行つてくれ」

「了解」

二人は立派な敬礼を智に向け、

一路武器庫へと向かったのだった。

「スパイ…か」

涼は少し思い詰めた顔で呟く。

「そうだな。突然だったが、行こうぜ」

祐太は狙撃科の相棒、M24を担ぎ車庫へと走つていった。

「さーて俺も…」

涼も普通科の相棒である89式を運び出し、

祐太を追いかけ車庫へと向かった。

「運転手、秩父に向かつてくれないか、大至急だ」

「秩父のどの辺ですか!？」

「何処でもいい! とりあえず秩父だ!」

「りよ、了解!」

↳1時間後↳

「祐太、司令部から通信、『目標は秩父さくら湖』」

「了解。運転手、秩父さくら湖って何処だ?」

「運転手がナビを見る、最寄りまでの最短ルートを探す。」

「あつた……こつちを左か」

「そのまま車に揺られること5分、ついに2人は目的地に到着した。」

「……か……」

「運転手、ありがとう。あとは自力で探す」

「涼と祐太は、ガスマスクを着け自分の装備を担ぎ出し、

「車から飛び出して行つた。」

「どうか……無事で……」

「運転手は遠ざかって行く2つの背中を見えなくなるまで見続けたのだった。」

↳15分後↳

「いた、あそこだ」

『目標発見、これより始末する』

「おいアンタ」

声をかける、どうせ逃げたところで

森田一佐が展開させた部隊が殺すに決まっていると彼は思い込んでいた。

「自衛隊の方ですか、私を殺しに」

その男性の声は、全てを諦めたような声だった。

「もう何人も居るんです、私と同じく命を狙われている人が」

男性は何処か遠い目をして言い放つ。

「アンタは某国のスパイとして潜入してきた、というのとは？」

彼は上にこの男性はスパイとして処理しろと言われたが、

祐太にはこの男性がスパイだとは到底思えなかった。

「冤罪だよそんなの、国家の黒いところ見たらこれだ」

「他にもそうなんですか…」

「ああ、アイツらも同じだったよ。なあ兄ちゃん、俺を殺してくれねえか」

男性は許しを乞うのではなく、祐太に殺してくれと頼み込んだ。

「何故だ、冤罪だと裁判で言えればいいじゃないか」

「国がアンタら使つて俺らを追つてる時点で公権力はグルだろうな」

「犯罪者になるくらいだったら今殺されたっていうことか」

なんとももつともな考えだったが、祐太には心に引つかかる事があった。

「家族はいいのか？」

「もういない、20歳の時点で天涯孤独だよ」

「そうか、では、許してくれ」

「ああ、頼む」

祐太はM24を地面に置き、

腰のホルスターに入れていた9mm拳銃に手をかけ、

サプレッサーを装着して男に向ける。

「すまん……」

サプレッサーで抑制された射撃音が2発響き、

男性は血を流して倒れた。

(何故国民を守る為の自衛隊が国民を殺しているんだ……)

「……こちら森岡祐太、目標を排除……」

『ご苦労、帰還しろ』

「了解……」

無線のスイッチを切り、彼は死体に向かって1人呟く。

「…クソツタレ…」

車に乗り込み朝霞に戻る道中、何にも喋らなかつた。祐太も、涼も、何一つ喋ろうとしなかつたのだ。

ただ、報告書にはこう書かれていた。

消費弾薬 9 m m 弾 4 発 … と。

第拾参話 呪われた兵士

「大隊長、ただいま帰還しました」

「ご苦労、休んでいいぞ」

2人は大隊長室を後にし、ようやく重い口を開いた。

「涼、殺したのか？」

「ああ、お前もだろ？」

涼は真顔のまま言い放つ。

目には光がなく、どこを見ているのか分からなかった。

「なあ、俺は引退するよ」

「そうか…俺はまだいるつもりだが、いつまで持つんだろうか」

「さあな、でももう今までみたいには振る舞えないだろ？」

「…違えねえな」

他愛ない会話をしながら祐太と涼は宿舎へ向かう。

「大隊長」

涼と別れた後に祐太は1人大隊長室へ赴き辞表を提出する。

「あの任務か…スパイを殺して国を守った、そこだけは誇ってくれ」

「はい、ありがとうございます。森岡祐太、除隊いたします」

「ああ、お前はまだ若い、どこかでまた働いてくれ」

「はい、失礼します」

祐太は振り返りドアを開ける。部屋を片付け、門を出る。

「じゃあな、涼」

「ああ、元気でな、祐太」

最後まで送った涼は、和光市駅で引き返し基地へ戻る。

後に彼は第一空挺団に配属されるが、それはまた別の話。

「菊名、菊名です、お忘れ物の無いようお支度ください」

自動放送が、自宅最寄りの菊名への到着を促した。

彼は菊名で降りて、自宅へ向かった。

　　く2週間後く

「ドアが閉まります、ご注意ください」

その日、祐太は電車からは降りること無く、菊名駅を見送った。

都心の会社で面接をしていたが、

大していい会社ではなく、面接の合格を蹴った。

「次はー横浜、横浜です。」

J R線、京急線、相鉄線、横浜市営地下鉄線はお乗り換えです。

祐太は何も考えなかった。

ただただイヤホンから流れる音楽を聴いているだけだった。

「横浜、横浜です。ご乗車ありがとうございます」

自動放送は、東横線特急の次の駅である横浜の到着を告げた。

(なーんで俺、海風に当たりたいって思ったんだろう)

高島公園でため息をついて一休みしたが、

大して気が紛れることもなく、

「はあ…帰るか…」

祐太は腕にある時計を覗く。

午後5時、まだまだ電車は動いている。

渋谷方面に向かう電車は混雑率がとんでもない事になっているが。

「はあー…」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえる。

この直後、彼がサイレンが嫌いになったのは言うまでも無い。

「なあ…あの車」

「ええ…ずっとここら辺走っているわよね…」

「あれ見なよ、ヤバくない？」

人々は交差点を渡る事なく一つの暴走車に注目していた。

（なんだ、ここ稀に見る暴走車か…）

『その車！止まりなさい！』

パトカーが必死にスピーカーで呼びかけるが、暴走車は全く耳を貸さない。

「待って、こっち来るくね？」

「ヤバイ！こっち来る！」

そう、何を隠そうその暴走車は歩行者の列へ突っ込んで来ようとした、

よりもよって祐太達の列に。

「キヤアアアアアアアアア!!」

「嫌だ！まだ死にたくない！」

辺りは一瞬でパニックに陥る、全員が一気に交差点から離れようとするが、人の波はそう簡単には動かない。

そこで祐太は見たのだ、一人の女子高生が固まって動けなくなってしまうのを。

（あの進路じゃ…確実に轢かれる！）

祐太は走つて女子高生の元にたどり着き突き飛ばす。

しかし、頭から飛び込んだので立ち上がる時間は、無い。

暴走車はそのままガードレールに突っ込み停止した。祐太や3人の少年少女を巻き込んで。

パトカーから4人の警官が降りてきて、

2人は暴走車の運転手の元へ、もう2人は祐太の元へ走つてきた。

「大丈夫ですか！しつかりしてください！」

「うっ！何てこつた！」

（なんだ？やつと捕まったのか…）

「ガードレールの破片が刺さってる！誰か！救急車を呼んでくれないか!?!」

流石の警官も焦る、彼らも人を死なせたくなにか無いんだろう。

「もう呼びました！」

祐太も辺りには血が流れ出し、

歩行者を守るためのガードレールは木つ端微塵になつていた。

「すいません！本当に！お願いだから起きてください！」

あの女子高生は生きていた。本人も腕に擦り傷が目立っていたが、

彼女は目の前の祐太の方を先に心配していた。

「君……か……助けられ……て……よ……か……った」

「そんな言葉病院で聞きます！今は生き延びてください！」

「もう……ダメ……だ……人がどれ……だけ血……を流したら……死ぬ……こと……ぐらい……俺でも……わかる」

女子高生の目から涙が溢れ出る、彼女も嫌だろう、自分を救ってくれた人物が目の前で死んでしまうなんて。

「最期に……手を……握って……くれ……ない……か……？」

「今もこの後も握るので生きてください！」

「まあ……もう無理さ……」

「……え？ちよつと……嘘！」

――森岡祐太、享年25――

「……とまあこれがこの世界に来るまでの流れですね」

森岡祐太こと森岡虎咲は簡単に話を締める、

いつの間にか話を聞きにきたお館様の奥さんであるあまね様は目を潤ませ、甘露寺は滝の様に涙を流し、お館様は普段見せない驚いた表情をしており、

いつも通り煉獄は「よもやよもや」と言いまくり、

風柱は「嘘だろ?」とか言いたげな顔をしていた。

義勇は……うん、いつも通り無表情で虎咲の話を聞く。

「君は国民を守る自衛隊という組織で働いていたが、

命令で無実の人を殺してしまった。

その後何故国民を守るはずが殺しているのかが悩ましくなり横浜へ行き、

落ち着いて帰宅しようとした所で少女を助けて死んでしまった……という訳だ

ね?」

流石の輝哉、一瞬で会話を要約してしまった。

「はい、10年以上も前なのに今でも覚えています。

引き金を引いた時の手の感じ、減音器から出た小さな射撃音、

血を流し倒れた男性、何もかも全て覚えています」

「……」

輝哉は黙って虎咲の話を聞く、

「何故あの時自分は引き金を引いてしまったのか、命令に逆らえなかったのか」

「どうしてだい?」

輝哉はゆっくり聞く。

「恐ろしかった…あの事件の真相が…」

国があんな事をするなんて…思いもする訳ない!」

虎咲は珍しく声を荒げる。彼自身、15年以上も抱え込んできた物なのだ。

「そう…でも虎咲は国民を一人殺してしまっただけ、一人の少女を助けた。」

結果的に君はしつかり国民を守ったんじゃないか?」

輝哉は諭すように虎咲に問いかける、彼のした事は間違っていないかつたと。

「…長い間ずっと考えていたんです、家の屋根に登ったりしながら」

「そう…よかつたね、これで解決だ。言いたいこと言つてスッキリした?」

「ありがとうございます、こんなに時間を貰つてしまつて」

「いいよ、虎咲の昔話が聞けただけで満足だ。では、解散」

「「「「「「御意」」」」」」」

すでに日は高く上り、柱達は各々の帰路についたのだった。

〜翌日の朝〜

「あの! すいません!」

「…誰だ」

「鱗滝左近次さんですか…? 富岡義勇という人に言われて来ました…」

「……」

少年が来る前、鱗滝に義勇から手紙が届いた。

「略啓、鱗滝左近次殿。

鬼殺の剣士になりたいという少年をそちらに向かわせました、

丸腰で私に挑んでくる度胸があります。

身内が鬼により惨殺され、生き残った妹は鬼に変貌しておりますが、

人間を襲わないと判断致しました。

この2人には何か他と違うものを感じます。

少年の方は貴方と同じく鼻が利くようです。

もしかしたら、突破して受け継ぐことが出来るかもしれません、

どうか育てていただきたい。

手前勝手な頼みとは承知しておりますが何卒御容赦を。

御自愛專一にて精励くださいますよう、お願い申し上げます。

匆々、富岡義勇

今ここに、鬼との戦いに終止符を打つきっかけとなる少年が現れることとなる。

その少年の名は

「頑張れ彌豆子……兄ちゃんが助けてやるからな！」

竈門炭治郎、耳に花札のような飾りを付けた一人の少年と鬼の少女こそ、この長い戦いに終止符を打つきっかけとなった二人だったのだ。

第拾肆話 柱になつて最初の任務

虎咲はいつも通り立体機動装置に三八式、マントを羽織り蝶屋敷を出る。しかしいつも通りでは無い点が一つだけあつた。

今回は水柱の富岡義勇と共に巡回に出る。

義勇はカナエとすぐく仲が良いらしい。

未だ義勇から「好きだ」と伝えた事が無いようだが、

カナエは会うたびに言つてゐるらしい。

「この山か…」

「(虎咲、お前は確か真菰と仲が良いと聞く。あいつもいい奴だ、

どうか真菰を) よろしく頼む」

「(こちらこそよろしくおねがいします)」

「(了承してくれて) 嬉しい」

「?」

義勇は言葉が少なすぎる、虎咲はそれを先にカナエから聞いている。

しかし、こんなにまで会話が噛み合わないとなると、

それは致命的では無いだろうかと虎咲は思った。

『ぎーくんはね、顔はいいけど口下手なのよねえ』

あまりに破壊力のあるカナエの一言だが、

本人の前で言えばいくら口下手な義勇でも口を開くだろう。

正直に「やめろ」と。

「さあ…二手に別れましょう、富岡さんはあっちを」

虎咲は自分の進行方向と真逆の方向を指差し、義勇は頷く。

「(初めての巡回だからそこまでしなくてもいいのだが…)わかった、抜かり無くな」

「はいはい分かっていますよ」

二人は別々の方向に走り始めた。

(こんな山に鬼って出るのか…いたわ)

虎咲は、肩に掛けていた三八式に手をかけ、足を止める。

いつも通り挿弾子を薬室に送り込み、コッキングレバーを押し戻す。

「フウ…」

全集中の呼吸で狙いを定める、狙いは勿論鬼の首。

このぐらいの距離なら大して弾道に変化は無いはずだと虎咲は演算を行う。

ガキヤ!

三八式は明らかに変な音を立てた。

(詰まりやがった！)

虎咲は急いでボルトを後退させ、弾丸を取り出しコッキングレバーを押し戻す。

(クソ、まだそこにいろよ…)

ダアン!!

今度は問題無く弾丸が放たれ鬼の首に直撃する。

「ヒット…エネミーダウン」

虎咲は口から自衛隊時代の号令を零す。

虎咲の心のモヤモヤが輝哉によって吹き飛ばされ、

記憶を掘り起こすのがだいぶ楽になっていたのだ。

(お、群がって来たな…)

鬼がその場で慌てふためき、どこから撃たれたのか探ろうとしていたが、

虎咲にはそんなもの関係無かった。

三八式はガチャン！と心地の良い音を立て、虎咲は引き金を引いたのだ。

ダアン!!

(射撃音…虎咲の持っていた銃のものか?)

義勇は射撃音がした方向へ急行した。

「…」

道中に血溜まりが出来ており、義勇は足を止めた。鬼は、いなかった。ただ鬼のものであろう血痕は、その場にこびりついていた。

もし虎咲が弾丸を全ての鬼の首に直撃させたのならば、

これは全て虎咲が殺ったという事になる。

至近距離から撃つたのなら、別の鬼が気づき喰い殺される。

だとすれば虎咲は喰われない程度、

気付かれない程度の距離から銃を撃つことになる。

それほど射撃精度、虎咲がどれだけの実力者かを義勇は思い知った。

「さーって確認確認、おーちゃんと撃ち抜けてるー」

「…これは虎咲がやったのか？」

「あ、ええ、あの岩から撃ちました。てか居たんですね」

虎咲は一キロ程離れた岩を指さした、義勇は信じられないという顔をしていた、普段滅多に顔に出さない義勇がである。

「それは…凄いな…」

この言葉は裏が無いし、言えてない単語も無い。

義勇が自分から言った褒め言葉だったのだ。

「そう言ってもらえると嬉しいです」

虎咲は顔いっぱい笑顔を広げ、義勇からの称賛を喜ぶ。

「あ、そういえば…」

虎咲が何かを言いかける。

「富岡さんってカナエさんと仲良いじゃないですか」

「…まあな」

「~~ど~~こまで行っただんですか？」

「?!?!」

「義勇は真顔だが、明らかに脳内は混乱状態に陥っている。」

辛うじて言えたのはこの言葉だけ、（お前は何言っただ）と。

まあその言葉が口から出ることはなかった。

「失礼、しのぶが貴方とカナエさんが恋仲だと言っただけなのでね。」

個人的に少し気になったので聞いたんですよ」

「胡蝶か…後でカナエに叱らせなければならぬな」

「富岡さんって面白いですよ」

不意打ちで悪口を吐かれる、

流石にしのぶの「そんなだからみんなから嫌われるんですよ」よりは

マシだったが、これもこれで堪える。

「何故そんなに無表情なんですか？笑ったところ一度も見た事ないですけど」
「……」

姉を失った義勇は、錆兎と呼ばれる少年と共に鱗滝の下で鍛錬を積んでいた。錆兎の才能と強さは破格であり、最終選別突破は容易だと義勇は考えていた。

しかし、義勇が合格した最終選別は錆兎以外の全員が合格した。つまり、他の受験者を救出した張本人が選別で殺されたのだ。

義勇はその現実に耐え切ることが出来なかった。

錆兎までも失った彼は、感情を捨て去った。

まるで錆兎が死んでから時間が止まってしまったように。

「まあ……それも人それぞれですけど……」

「分かってくれたら嬉しい」

二人は山を降りる。

彼らは後に共闘しある鬼を滅殺する事となるのだが、それはまた別の話。

〈蝶屋敷〉

「ただいまー」

「あ、虎咲じゃないですか」

しのぶが屋敷の玄関まで歩いてくる。

「髪型変わった？」

しのぶの髪は解かれ、うなじが隠れる程度の髪になっていた。

「今しがた風呂に入って来たんですよ、虎咲も入ります？」

「ああ……入ってくる」

虎咲は装備を自室に置き、そのまま風呂場へ直行したのだった。

「……はあ……」

風呂に入った虎咲は、ため息をついてある事を考えた。

（今日三八式を使って思った事がある……狙撃眼鏡が欲しい！）

尚、元の世界ではこの時期まだ狙撃眼鏡……

すなわちスコープはまだ開発が完了しておらず、

完成したのは昭和十二年、制式採用されたのは昭和十三年の事である。

大正にやっと試作品を開発し始めたのだ、

それが彼の手に入る事はないだろう。

（まだ最初期の試作も終わってない時期だから……

昭和十三年まで鬼とは戦いたくないしな）

虎咲は正直、あんな化け物達とは長く戦いたくなかった。

「……上がるか」

虎咲は風呂場を出て、いつも通り自室に戻り三八式の整備を始める。

(流石に…寝たよな…?)

虎咲は、ある事を警戒していた。

そう、この前の騒ぎである。

「ふうー」

「あああああまたかよおおおおお!!」

虎咲は思い返す。しのぶは昔から懲りない。

たった一回やめろと言われても奴は絶対にやり続けるという事を今更思い出したのだ。

「いやあ面白いですね〜虎咲」

口を隠して笑うしのぶ、普段は何故か張り付いたように微笑み続けているが、虎咲の前での笑顔は本心からの笑顔だ。

「やられるこっちは面白くとも何ともないんだが…?」

虎咲は机に肘をつき、頬杖をついて言う。

「ふふふ、すいません。今回は部品を失くさなかったのですね」

「あれは俺も悪いし、しのぶも悪かったからな」

ついこの前起きた事件（笑）を二人で思い出す。

（あれは……）

「もうやめてくれよ？ただでさえ髪解いて普段と格好変わってるんだから」

「いいじゃないですか、もう寝ましょう」

「ああ、おやすみ」

しのぶはおやすみなさいと返しながら、虎咲の部屋の扉を閉めたのだった。

（翌朝）

「ーという訳でこれから蝶屋敷でお世話になります鱗滝真菰です。

よろしくお願いします！」

「「「よろしくお願いします！」「」」

蝶屋敷の食堂で、真菰の歓迎会が開かれた。

「あれ？虎咲は？」

「虎咲ならまだ寝てるんじゃないでしょうか、少し見て来ます」

しのぶが食堂を出た瞬間、反対側の扉から義勇を抱えた虎咲が現れた。

「…富岡さんじゃないですか」

しのぶが声を掛ける、そこに突つかかるのはある女性だ。

「あらぎー君じゃないの、ありがとね虎咲君」

元花柱胡蝶カナエである。虎咲は彼女の頼みによつて、

義勇を叩き起こし、彼の屋敷からここまで引つ張つて来たのだ。

彼が不憫に見えたのはすみやアオイだけでは無い。

妹弟子である真菰や、連行してきた虎咲でさえも義勇を見て「可哀想だな」と思つていたのだ。

「…カナエ、その呼び方をやめると半年前と2ヶ月前に言つたはずだが」

「いいじゃないの別に、呼びやすくもいいわよ?」

義勇は内心、(そういう事じゃねえよ)と思つたが、

カナエには何言つても無駄だというのはもう分かつてしまつていたので、放置する事を決めた。

「で、何だこれは…」

義勇からしたら、今日は一体どんな状況になつてゐるのかさっぱりわからない。

寝ていたらいきなり虎咲に叩き起こされ、蝶屋敷に連行され、

連行されたと思つたら隊員の前でぎー君呼ばわりされた。

もう脳の処理速度が今起きている事柄に追いついていなかった。

「真菰ちゃんが蝶屋敷に引つ越してきたからその歓迎会をやつてるのよー」

そこに、どうしてだか知らんが顔と腕いっぱい青筋を浮かべたしのぶが現れた。

「…胡蝶か、どうした？」

「富岡さんじゃないですか、姉が世話になってます、その前にあそこにいる虎咲に話があるのでもいいでしょうか」

「…構わない」

（ヤバい、俺怒られるやつだ）

「虎咲、ちよつと表に来やがれです」

「いや〜しのぶさん？こればかりは俺のせいじゃないからね？」

その日輪刀を仕舞って下さいあああああああ!!!」

しのぶは、虎咲が「痛い！痛い！」というのもお構い無しに、

乱暴に玄関から放り投げ、虎咲を無理矢理正座させる。

「虎咲、何で私が怒っているか、分かりますよねえ!？」

「……………ハイ」

「何故許可も無く屋敷を出たんですか!?!しかも早朝!」

「カナエさんに言われたんだ、富岡さん搔つ攫つて来いって」

しのぶの怒りの矛先はカナエに向く。

「姉さん…………」

流石のカナエも目を逸らすが、しのぶはお構い無しに続ける。

「また!?!すみ達の時にもカナヲの時にも言ったでしょ!?!」

隊士を使つて富岡さんを搔つ攫つて来るなつて!」

「いやあ今回の虎咲君は柱だし良いかなつて!」

「ダメに決まつてるでしょ!?!聞いた事ないわ!柱が柱を搔つ攫うなんて!」

「ごめんね、これからはしないから!ね?ね?」

「うー…だつたらいいけど…」

こうして真菰歓迎会はすぐに修羅場と化したのが、

真菰本人がその寸劇を楽しんでいたのも、特に問題も無くお開きとなつた。

第拾伍話 暇人たちの休暇

ここに、蝶屋敷という広い屋敷で暇を持て余した三人の少年少女がいた。

彼らの名前は虎咲、真菰、しのぶ。

晴天の昼間は鬼が出るわけでは無いので、当然のように暇している。

三人は縁側に座り、ぼーっと外を眺める。

「……ねえ…何か…喋ろ?」

この静けさに耐えられずに声を出したのは真菰。

だが虎咲は真顔で、しのぶは微笑みながら外を見ていた。

「ねえ!」

真菰は耐えられず声を張り上げる。

「虎咲は富岡さんに断られたからって拗ねない!」

しのぶもカナエさんに断られたからって拗ねない!」

虎咲は義勇に鍛錬して欲しくて、しのぶはカナエに毒の研究を手伝って欲しくて

それぞれ頼み込んだのだが断られてしまい、仕方なく縁側で時間を潰す事にしたのだ。

「うー…拗ねて無いぞー」

「そうですよお…私が拗ねる訳ないじゃないですかあ…」

17歳と16歳の2つのお団子は、縁側に丸まってしまった。

(…こんな柱つてだらけるの?) 注) だらけません

「…病室の人達に会いに行けば?」

「あ、それいいですね。真菰は天才ですか?」

「行くか…ここで縁側の見世物に化するのも嫌だしな」

三人は縁側を離れ、病室へと向かったのだった。

「こんにちはあ!」

「ええ!? 真菰さん!? しのぶ様!? 虎咲様!」

当然のように当番だったアオイに驚かれる三人。

「アオイちゃん…この2人が縁側の見世物と化してたからさ、

暇潰しに回復の具合を見に来たんだよね」

縁側の見世物という言葉が何を意味しているのか分からなかったアオイだが、

この2人が今朝どんな目に遭っているのか知っているので、

縁側で幽体離脱でもしてたんだろうなと勝手に解釈した。

「じゃあ、うるさくしないならいいですよ」

アオイはしのぶと虎咲を見る。

「しのぶ様、あなたも例外じゃないですからね」

「分かっていますよ」

しのぶは流石に病人の前では暴れないだろう、これがアオイの考えだ。

だが隣に危険分子が立っている以上、暴れる可能性も零ではない。

「特に虎咲さん？ちゃんと黙っていやがれくださいね？」

「アツハイ、てか出ていきます」

虎咲はそう言いながら180度真逆を方向に歩き、病室の扉を閉めたのだ。

「はあー…あの感じじゃまた一人で縁側の見世物と化すよ」

「そうですね…まあ放つときましよう」

この時、アオイは聞いた。近くの草地の方向から大爆発したような揺れと音を。

く草地く

虎咲は爆炎が晴れるのを待っていた。

圧縮窒素の最大威力を試していたのだ。

「威力十分過ぎるな、これならヤツを吹き飛ばせる」

爆炎が晴れると、そこには半径200mの範囲内で

草木が消滅している光景が広がっていた。

ヤツとは紛れも無い上弦ノ式のことだが、

虎咲にはしのぶの様な突き技を使えるわけでも無いので、

一体どのようなにして奴の体に刃を打ち込むのかを考えていた。

「そうかこれならー」虎咲!!「あつやべ」

虎咲は本能的に逃げる、しのぶは追いかける。

「虎咲! 何ですかこれ! 説明しやがれください!」

「虎咲! 止まらないとおはぎ無しだよ」

真菰が間延びした声で虎咲を引き止める。

チヨロス虎咲、一瞬止まる。しのぶはそこを見逃さなかった。

(チヨロいよ虎咲)

真菰は心の中でガッツポーズを決めて喜ぶ。

「あやつべ、うぎやああああ!!」

「真菰ありがとね、何してくれるんですかこの阿保虎咲!!」

「対応の差が激しい!」

虎咲はしのぶに殴られ、気を失ったのだった。

〜二時間後〜

しのぶが殴って気絶させた虎咲は病室では無く、自室に運ばれた。

しのぶが「起きた瞬間謝りたいから」と言つて虎咲の部屋に運んだのだつた。
(…こうすれば起きるんじゃないでしょうか)

しのぶはそう思い息を虎咲の耳に吹きかける、すると―

「!うわああああああ!!」

おめでどう!…こさくはとびあがつた!

「もうやめるつて言つてたじゃねえか!」

「あはは…ごめんなさい…」

しのぶは笑つたが、すぐに謝る。

「まさか殴られて気絶するとはなあ…まあしのぶは突き技が凄いらな」

「ほんとにごめんなさい!」

しのぶは頭を下げて謝る、まさか本人も倒れると思つていなかったらう。

「もうやめてくれよ?」

「耳に吹きかけるのは続けますがね」

「…え?」

しのぶは虎咲にとつて死刑宣告と同等の言葉を発した。

「だつて面白いからいいじゃないですか」

「いややられる側は面白くないつて言つたそばからああああ!!」

またやりやがった。これから先この刑からは逃れられないだろう。

「いい加減にしろって…」

「あんなに飛び上がるなんて知らなかったんです」

「あー…今は夜か？」

「ええ…さつきお館様の鴉が来て」

『伝言。虎咲、君ハ少シ休ンデクレナイカ、倒レタラ元モ子モナイデシヨ』

「つて言つてました」

「…余程お館様は俺のことを心配してくれるんだな」

「そうですね…街に行きませんか？」

蝶屋敷がある小山の麓には、小さくはないが大きくはない街がある。

一度行つてみたが、浅草程ではないが栄えていた。

「行くか…真菰、いつまで覗いてるんだ」

虎咲は少し開いていた扉を引いて開ける。

「なんでバレたの？」

扉に寄りかかっていた真菰は、虎咲の胸に飛び込む様な形で倒れる。

しのぶの顔に青筋が浮かび上がった。

側から見れば虎咲が真菰に抱きつかれた様な格好になっていたからである。

「虎咲？真菰だったから許しますけど他の女性だったら…分かってますね？」

しのぶは脅しでもある言葉を虎咲に振りかける。

だが虎咲の鈍感さは、他の度を超えているのだ。

「私も！しのぶと私以外は許さないからね！」

「え？それってまるで2人が俺の事想ってる事になるけど…そんな訳ないよな？」

しのぶと真菰は顔を見合わせて、虎咲を見る。

「……虎咲の鈍感野郎!!」

「ええ……」

二人に悪口を吐かれた虎咲は、困惑しながら蝶屋敷の門を出たのだった。

く街にてく

ワイワイガヤガヤワイワイガヤガヤ

「浅草程ではないけど……この街も活気があっていいな」

虎咲は昔両親に連れていってもらった浅草の風景を思い出し、

懐かしんだ様に街を眺める。

「虎咲って浅草行つたことあるんだねく」

真菰は感心した様に喋るが、

しのぶはその思い出が虎咲の両親との思い出だというのを悟り、

あえて口に出さなかった。彼を辛くさせないためにも。

「まあな、しのぶは行った事あるのか？」

「私ですか？ 行った事ないですね」

「じゃあ虎咲だけだね」

「今度三人で行ってみるか？」

「賛成」

歩いている途中浅草に行く約束をした3人は、街の中心の通りへ出る。

「色んな店があるんだな」

呉服屋や甘味処、雑貨屋や本屋など、

この街だけで生活用品を調達出来るほどだ。

しかし、しのぶと真菰は何故か他に目もくれずに通りを進む。

虎咲達は飯屋に入って腹ごしらえをしたが、それ以外に何もせずに蝶屋敷への帰路につく。

「え、何しに来たん？ 俺達」

「……………」

二人はまた顔を見合わせて、虎咲の方を向いた時には顔に青筋を浮かべる。

「……………とつとと喰われちまえ!!」

この上無い捨て台詞を吐いた二人は虎咲の一步前を歩いていった。
(え? 酷くない?)

すべてお前の鈍感さが招いた事だ / by 作者

「カァー! 山二鬼ガ数多ク出沒シテイルウ! 討伐セヨォ!」

おら、早く行かねえとつつくぞと鴉が虎咲を急かし、

虎咲は二人を追い抜いて蝶屋敷に走る。

「ええ!? 虎咲様!? どうしたんですか!?!」

「急ぎの任務だ、真菰としのぶにも言っておいてくれないか?」

アオイがいきなり走ってきた虎咲に驚くが、

すぐに冷静になり虎咲の願いを受ける。

「わかりました、お気をつけて」

しかしこの三人が次に虎咲を見るのは、患者としてである。

重傷者として。

く道中く

「カァー! コノ山ダァ! 行ケェ!!」

「了解、他に伝令に回って」

了解と言ひ残し鴉は飛び去っていった、

走ると三八式と立体機動装置がカチャカチャと音を立てる。

「……………」

「なんだ？ 誰かいるのか？」

何処からか声が聞こえるが、虎咲の耳が詳細までを聞き取る事は無かった。

「……………殺し……………」

（殺してやる？ 鬼の匂いが近い、ソイツに向かって言っているのだろうか）

「……………上弦ノ参!!」

（は？）

虎咲にははつきり聞こえた、因縁の相手の名を。

彼は反射的に抜刀し、圧縮窒素の発動準備をする。

目は赤黒く光っていたが、為虎傳翼のせいではない。

憎悪によって生まれた光だ。憎悪を含んだ声で虎咲は叫ぶ。

「猗窩座ああああああああ!!」

「なんだ!？」

虎咲は鬼殺隊士と猗窩座の間合いに立つ。

「あ！翼柱様！」

「行け！援護はいらん！」

「つありがとうございます！」

鬼殺隊士は足早にその場を去っていった。

今この場を支配しているのは、

とてつも無い程の鬪気と、底が無い程深い憎悪と殺意だった。

第拾陸話 第一次上弦戦

猗窩座はどこかで待ちわびていたのかもしれない、

自分と対等に戦えるような男を。

「なんだ貴様、今コイツを「…す」あ？」

「殺してやる!!」

―翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼―

虎咲は刀を上弦ノ参、猗窩座に突き刺す。

「突き刺すだけじゃあ鬼は殺せないだろ？焦って狙いを間違えたか？」

猗窩座は虎咲を嘲笑する。

しかし、猗窩座は周りの空気の音が変わったのに気付く。

猗窩座は反射的に虎咲から離れる、それが仇となるとは知らずに。

―似の呼吸、肆ノ型 圧縮窒素―

猗窩座の首に突き刺さった刃が感高い音を立てて光る。

(は?)

猗窩座は本能的に首に刺さった刃を抜いて投げ捨てたが、時すでに遅し。

雷が落ちたかと思うような轟音を立てて、

刃は爆発し猗窩座を中心に土地を抉り、焼き払う。

「お前…その羽織りは…」

「お察しの通り、アンタが殺した森岡陽一郎の息子、森岡虎咲です。

猗窩座って言ってましたっけ、殺してもよろしいでしょうか」

冷静さを装って語りかけるが、

所々から憎悪と殺気が漏れ出ている。

その様子を見て猗窩座は嘲笑する。

「お前、陽一郎の息子なのか!? だったら話は早い! 鬼となれ虎咲!」

「は? 前世にどんな大罪犯したら鬼にならなきゃならねえんだよ」

虎咲は苛立ち、素が出てしまった。

「話を通じないならば! 実力行使だ!」

「望むところだ!」

ここに鬼殺隊にしても、十二鬼月にしても歴史に残るであろう名勝負の火蓋が切つて落とされたのだった。

―翼ノ呼吸、伍ノ型 集翼九連―

―術式展開、破壊殺・乱式―

虎咲は九つの刃を放つが、猗窩座はそれを乱打で受ける。

彼の拳に無数の切り傷が出来るが、お構い無しに次の攻撃に入る。

―破壊殺・空式―

―似の呼吸、参ノ型 絶対領域・改―

猗窩座の拳圧の乱打を避けられないと判断した虎咲は

絶対領域を展開し身を守る。

その膜は、高音を立てて拳圧を弾き返す。

「やはり貴様は鬼になるべきだ！お前ならすぐに十二鬼月になれるぞ！」

「残念だが俺には帰りを待つ人が居るんでな！その願いは受け入れられないね！」

「ならば認めるまで痛ぶってやる！」

刀と拳の応酬、彼らにはもう戦うことしか頭にない。

虎咲は制限時間が迫っている為虎傳翼を解除した。

目は鮮やかな紅から濁った赤黒い色に変わり、

彼がどれだけ猗窩座を憎んでいるのかが良くわかる。

それから山では刀と腕がぶつかる音が絶えなかった。

二時間ほど経つただろうか、虎咲は息を切らしてはいるが、

目には憎悪の光が宿ったままだった。

だが、負傷している事には変わらない。

彼は呼吸を使って止血しているが、

呼吸が無ければとつくに死んでいたであろう。

猗窩座は鬼である、鬼には疲労という概念が存在しない。

さらに与えた傷も修復する、長期戦は圧倒的に人間が不利である。

「もうへばったか、鬼になれば体力なんぞ関係無いというのに」

猗窩座は受けた傷を修復し、嘲笑する。

「こういう風に体力に制限があるのも、寿命というものがあるのも

人間という生物の個性だ。相前にそれを捨てたお前らにはわからんだろうが

な！」

「わかるはずないだろ、死ぬ理由を増やす意味が分からない」

猗窩座は、理解できないという顔で虎咲を見る。

ボロボロの彼は、もう戦えるような状態ではなかった。

「そんなボロ雑巾みたいな体で俺と対等にやりあえるかどうか危うい、

最後は一瞬で消し飛ばしてやる」

―破壊殺・滅式―

猗窩座は勝利を確信した、虎咲は動かなかつたからだ。

(柱も墮ちるところまで墮ちたな)

猗窩座は振り返って西へ歩を進める、後ろから轟音がする前までは。

「は!？」

猗窩座は困惑する。

(何故だ!何故生きている!)

「森岡虎咲!！」

その視線の先には、頭から、腕から、足から大量の血を流した虎咲が立っていた。

―翼の呼吸、参ノ型 真・為虎傳翼―

「…」

―翼の呼吸、壱ノ型 真・雲煙過眼―

「!？」

虎咲は何も言わず紅い尾を引きながら猗窩座に突っ込む。

(脳天まで狂ったか!?)

彼は今、制限時間一杯だった為虎傳翼を発動し、

暴走の危険を背負いながら戦っている。

それはまるで、血に飢えた鷹のようなものだった

―似の呼吸、肆ノ型 真・圧縮窒素―

真・圧縮窒素は、破壊箇所を一箇所に凝縮する代わりにしばらく再生不可にするものである。

刃を振るつて切り離し、猗窩座の目に当てる。

引き金を引き目を吹き飛ばす。

「ぐっ……やるな……だがな……こんな傷すぐに……っ！」

そこから先、言葉が紡がれることはなかった。

猗窩座は目を再生しようとしたものの、再生することが出来なかった。

「何が起こった、何故だ、何故再生しない！」

「簡単だ、そウいう技だ」

ー翼の呼吸、壊ノ型式、雲煙過眼・快速ー

虎咲は猗窩座にとどめを刺すべく雲煙過眼を発動したが、

斬る直前にベンツという不快な三味線の音がしたのと

猗窩座が消えたのは同じ瞬間だった。

「次は、次は殺してやるぞクソ野郎!!」

逃げテも無駄ダあ!!絶対に俺が殺してやるからなあ!!!」

暴走しかけた虎咲は、出血多量でその場に倒れる。

(嗚呼、……で朽ちるのか……父親の仇も取れずに。二人を悲しませて……)

そう思いながら、虎咲は意識を手放した。

「止血！急いで！輸血の用意も！」

隠が運んできた虎咲は思ったより、

いや想像の方が遥かにマシな最悪な状態だった。

ほぼ全身から血を流している、おそらく骨も粉碎されている。

彼の呼吸が途切れた時と彼の命が尽きるのはほぼ同時であろう。

「真菰！その輸血器取ってください！！」

「わ、わかった！」

（死なないでくださいよ……虎咲、その時は私も一緒に死んであげますから）

しのぶは虎咲が起き上がる、意識を取り戻すその瞬間まで寝台の前を動かなかった。

「ーさん！兄さん！起きて！！」

（は？夏か？）

「な、夏」

「私もいるわ」

「松姉さん……」

そこには、あの日死んだはずの姉の松と妹の夏が立っていた。

その後ろには松の木がどっしりと構えており、藤の花が咲き狂っていた。

「なんでここに来たの!? 早く下に戻りなさい!!」

松が虎咲に怒号を浴びせる。

「え? 俺死んだからここに来たんでしょ?」

虎咲は何言ってるんだと言いたげな顔を二人に向ける。

「兄さん、あなたはまだ生きているの。辛うじてだけどね」

「しのぶちゃんが必要に虎咲の命を繋ごうとしているの!」

虎咲が今からしようとしているのはしのぶちゃんのように努力を踏みにじるような行

為なのよ!」

「しのぶさんが可哀想だよ、早く下に戻りなよ」

虎咲は泣きそうな顔で二人に訴える。

「俺はもう疲れたんだ! この魂で生を受けて3回目、俺の精神が限界だ!」

三人しかいない空間に頬を叩く音がする、

松が虎咲の頬をぶん殴ったのだ。

「虎咲の馬鹿!! 彼女なら! 彼女達なら何とか出来る!」

「アンタの限界で彼女達が苦しむなんて嫌でしょ!」

「それは…」

「虎咲は生きろ！私達二人の分まで！そして彼女達を幸せにしてあげて！」

松は虎咲に縋り願う。

「わかったよ姉さん、夏も」

「次会う時は寿命死した時だね」

「さらつと怖いと言わないで」

「虎咲」

現実に降りようとした虎咲を松が呼び止める。

「どうしたの松姉さん」

「しのぶちゃんと言真菰ちゃん、多分いや絶対あなたに惚れてるわ」

「そう、他には？」

「簡単よ、嫁に迎えてあげなさい」

松は含みのある笑顔で虎咲に笑いかける。

「…マジで？」

「私やマジよ」

（どうやら本気らしいな、姉さんらしいや）

「じゃあね、姉さん」

「二人によろしくね」

一氣に周りが暗くなる。目が覚めると、蝶屋敷の病室が広がる。

「やっぱいるよな」

彼が何時ぞやに見た光景が広がっていた。

「ごめんな、しのぶ、真菰」

このバカ虎咲！と言いながら二人が虎咲に抱き付く。

「うー…もう帰ってこないかと思いましたあ…」

「このっ！虎咲！帰ってきてくれたあ!!」

二人の少女も泣き声は、医務室で働いていたアオイにも聞こえたようで、

「…約束はしっかり守りましたね」

「ああ…想像以上に悲しんで俺びっくりだわ」

その後アオイの涙腺も崩壊し、

その日の処置室には三人の少女の泣き声が響き渡るといふ異常な光景が見られたと

いう。

「……」

そこを見ていた一人の無口な少女に、虎咲を含めた四人が気付くことはなかった。

第拾漆話 鷹と蝶と狐

「うーん……」

虎咲は寝返りを打つ。

が、普段は布団であるためにそこにある何かに気付かず寝返りを打ったため頭を何かにぶつける。

「うぐつ……フア!?!」

驚くもそのはず、起きて右を見れば

ただでさえ狭い寝台にしのぶが寝ているではないか。

サヨナラ翼柱! こんにちは性犯罪者!

(は? は? は? 訳がわからん、何故しのぶが俺がいる寝台に寝ているんだ、

いや、落ち着け。しのぶは昔っから寝てる時は色々おかしい。

今回もそうだろう、そうだよな!?)

そんな疑問に答えられる人間などおらず、虎咲は次に起きる事で更に顔を青くする。左を御覧下さい! 何という事でしよう!

しのぶが追加され更に狭くなった寝台に真菰が寝ておるではありませんか!

「…うわあああああ!!!」

「いやあああああ!?!?」

しのぶが普段なら絶対に上げない悲鳴のような何かを叫ぶ。

「あーと、虎咲…今日は早い…ですわね…」

しのぶは言葉を途切れ途切れに発した、

虎咲は笑顔のまま顔に青筋を浮かべている。

「うん、しのぶ?俺聞きたいことがあるんだわ」

「な、何ですか?」

「オイ、これは一体どういう状態だ?」

しのぶはこうなった経緯を虎咲に説明する。

「……虎咲が寝てからすぐ……」

「ねえねえしのぶ」

「何ですか?真菰」

しのぶは真菰を見る、彼女の顔はすっごい悪い顔だった。

「虎咲と寝れば?」

「…え?」

しのぶはいきなり言われた言葉に反応できず、

素っ頓狂な声を出してしまった。

「じゃなかったら私が寝込みを襲おうかな」

「な、何言ってるんですか？真菰。

虎咲は鈍感なんですよ？そんなんで何かに気付くわけ」

「簡単だよ？理性を焼き切つて溶かせばいいの」

「そうすれば私は……ぐへへと真菰は気持ち悪い笑みを浮かべしのぶを見る。

「自分の幼馴染を寝取られたくないよね？」

「うー……わかりました」

—————

「とまあこういうことがあったんですよ」

「ふーん……とりあえずこの馬鹿狐を起こせば解決か？」

しのぶは頷く、虎咲は了承したように真菰のそばに寄る。

「おらあ!!用があるからさっさと起きろ！」

「え!?!今何時!?!」

「夜中の三時だ!何故俺がこんなにキレてるのかわかってるな!」

「えーいいじゃん、最終選別の時も一緒に寝たでしょ?」

「あれは仕方ないだろ！状況が状況だ！」

「えーじゃあ私の純潔で許してー」

「体で許すつもりはない！あとお前は何言ってるんだ！」

しのぶはこれを後に痴話喧嘩と称した。

—————

「任務に行きたい」

あの深夜騒動から五、六時間が経過した頃、虎咲が愚痴を零す。

しのぶは顔に青筋を浮かべて怒鳴り散らす。

「虎咲？何言ってるんですか？貴方は左腕、肋骨を折っているんですよ？」

それなのに任務に行こうなど……」

目の前の寝台には、確かに虎咲が寝ていたはずだった。今は何もいない。

「虎咲!!!」

「げ、バレた」

そこには立体機動装置をぶら下げて玄関を出ようとした虎咲がいた。

「ほら！戻りますよ！治るまで三週間、絶対安静にしがれくださいね？」

「こりゃ拉致だよしのぶ！」

「そんな冗談言う暇あったらとっととその骨を治して下さい！」

虎咲はしのぶによつて寝台に投げ飛ばされ縄で寝台に固定される。
「あつ、呼吸で縄を解こうなんてバカなこと考えないでくださいね？」

最悪、肺が破裂しますよ？」

「……」

(やつと大人しくなりました…真菰に監視を頼みますか…)

しのぶは処置室の扉を勢いよく閉めた。

(ダメか、全翼無連はそこまで器用じゃない。)

人を避ける“避人”はこの屋敷ごと吹き飛ばすだろう。

かと言つて任務に行つてはいけないなんて…あんまりすぎないか…)

虎咲は思考を張り巡らせ、この拘束を消す…もとい解く方法を模索したが、自分の技ではこの拘束を解くことが出来ないことに気付く。

「あーあーあー」

暇している虎咲の脳内に、二文字の単語が現れた。

(寝・ろ!!)

脳は正直だった。寝るといふ言葉を考えただけで虎咲は眠りについた。

そこに一人の少女がやつて来る。

そう、監視担当の真菰だ。

「虎咲く！大人しくしないとおはぎ奪うぞ〜！」

彼女の言葉は虎咲に届かなかつた。彼はすでに眠りについていた。

「…寝ちゃつてたか…」

真菰は残念そうな表情を浮かべるが、

それよりも先にある物に気付く。

「…これ…修君からの手紙？」

そこにはこう書かれていた。

『拝啓、翼柱森岡虎咲様。

僕の師匠である鉄穴森がお会いしたいと存じております。

近く、どうか刀鍛冶の里まで来ていただけると幸いです。

修
』

「綺麗な字…男の子の字とは思えないけど…」

真菰は修の手紙を虎咲の部屋の机の上に置きに行き、虎咲の顔を見る。

「同じ年なのに…ここまで死戦を繰り広げて…」

彼女は虎咲から為虎傳翼の制限時間を超えると暴走するという話は聞いていた。

暴走の危険性を捨ててまで、必死に親の仇を殺す事だけを考えていた。
真菰はそつと虎咲の顔に触れる。

「これからも守り合おうね？ 虎咲」

彼女の眩きは、虚しく処置室に響いただけだった。

―翌朝―

虎咲は辺りを見渡す、

と言つても縄で拘束されている今そこまで見える物はない。

ただし横にいる二人の少女には気付いた。

「またかよ…しのぶ、真菰…」

昨日と同じように彼女達は虎咲の横で寝息を立てながら寝ていたのだった。

(本当に懲りないな…この二人は…)

しかも昨日とは違うのが、

縄で拘束されているのでしのぶを起こせない。

つまり状況の収束が不可能という点だった。

「…はあー…」

虎咲の溜息は、処置室の壁に吸い込まれていった。

「二度寝するか…」

虎咲はまた深い眠りについたが、

度重なる疲労により彼が次に目覚めるのは一週間後のことであった。

↳一週間後↳

「ふぁーあ……よく寝た……んあ？夜？」

辺りはすつかり暗くなっており、朝では無かった。

「一週間後の夜ですよ、虎咲」

当たり前のようにそこに座っているしのぶは言う。

「ふーん、一週間後ねえ……は？」

虎咲は困惑する、しのぶはこと細やかに事を説明する。

まず虎咲は今まで蓄積されていた疲労を一気に解放した結果

一週間も寝たきりになってしまったこと。

蝶屋敷の全員が、虎咲が死んだのかと一瞬だけ思ってしまったこと。

「ええ……」

虎咲は困惑した顔でしのぶを見る。

「でもですよ？骨が繋がっていたなんて誰も思っていなかったんですから！」

（骨が繋がったのか……ん？）

虎咲の顔がどんどんあり得ないと言いたげな顔になる。

「嘘だろ？三週間かかるんだろ？」

「それが…一週間もの間完全に動いていなかったものですから。

すぐに骨がくつついたんでしよう」

私だつてびっくりですよとしのぶは続ける。

「でもまだ完治はしてないのでそこまで激しく動かないで下さいね」

しのぶは虎咲の縄を解く、彼はすでにやる気満々だ。

「ちゃんと安静にしていってくださいね？」

しのぶは念を押す、今の虎咲ならどこまでも走つていきそうだから。

「わかつてるって！心配すんな！」

しのぶは彼の頭に一瞬だけ旗が見えたが、気のせいだと見逃した。

—————

蝶屋敷の廊下をドタドタ走る人が一人。

「つたく誰ですか？朝つばらから走つてるのは…虎咲様!？」

アオイは起きていた完全武装の虎咲を見て驚く。

「骨折は!?!大丈夫なんですか!?!」

「ああなんかしのぶがもうくつついてるからいいよつて」

「ええ…」

アオイは結構長く蝶屋敷で看護師をしているが、
治りがこれほどまでに早い人は今まで一人もいなかった。

「ちよつと自主訓練行つてくるからしのぶに言っておいて！」

「わ、わかりました」

そう言い虎咲は靴を履いて屋外鍛練場へ向かった。

く屋外鍛練場く

(試したいことが色々あるからな…まずは…)

ー似の呼吸、弐ノ型 破壊殺・滅式改ー

新たに設置されたであろう正面の藁人形は、

彼から乱射された波動で崩壊した。

「ひゅー。いいな、この威力」

ー翼の呼吸、参ノ型 真・為虎傳翼ー

ー似の呼吸、肆ノ型 真・圧縮窒素ー

蝶屋敷から相当離れた場所で発動する。

ここは空き地、草が生い茂っていたので

土地の持ち主が一掃して欲しいと言っていた。

刃を草地の中心であろう地点に突き刺す。

絶対領域を発動し、虎咲は自分の身を守る。

「…点火」

虎咲は引き金を引き、刃は大爆発を起こす。

「…うっ」

絶対領域が守っているにも関わらず、体中が熱くなる

しばらくすると爆煙が晴れる。

「わーお」

虎咲はその威力を目の当たりにしたとき、

これさえあれば無惨も粉々だろうと確信した。

爆煙が晴れたその草地だった場所は、

綺麗さっぱり焼けただれ草があつたなんて感じさせないようなものだった。

鴉の上空観察によると、キノコ雲が高度1000mまで登っていたそうだ。

依頼主から報酬を受け取った虎咲は蝶屋敷に戻る。

玄関には顔に青筋を浮かべたしのぶが立っていた。

「虎咲！あの爆発は貴方ですよね!?!説明してくれませんか!?!」

「圧縮窒素の改良型だ。しのぶ、頼みたい事がある」

「なんですか？その案は…なるほど…」

この作戦が最終決戦に活きるなど誰が考えたであろうか。

第拾捌話 魔改造と機関銃

今日もまた縁側に一つのお団子が出来ていた。

「しのぶー金もらつても使う場面が無いよー」

それは紛れもない虎咲であった。

「私は実験器具とか買うために使いますけどね」

彼の財布は今破裂寸前、それも縁側で蹲る程に。

それほどまでに彼は金の使い道が無いのだ。

「どうする、このままだと確実に財布が破裂する。」

そんなに貰つたつて困るっつの」

しかし輝哉は堅実だった。

彼は一度も虎咲の給料を下げていない、

虎咲の働きもあるだろうが、一番は柱であるという点だろう。

「寄付は考えなかつたんですか？」

お金を浪費する一番の方法は寄付だ。

今の虎咲の持ち金だと街一つは再建、いや復興できるだろう。

「寄付ねえ…俺にはやってみたい事があるんだわ」

「なんですか？」

「対鬼迎撃要塞街」

「は？」

虎咲が考えたのはどこぞのトラウマ持ちの中学生が

ドンパチするアニメの箱根にある迎撃専用要塞都市を基にした物だった。

「いいな？この街にまずは人を住まわせる、それで鬼をおびき寄せる」

「まあ理屈は分かりますけど…非人道的じゃないですか？」

「まあ聞け、街の一丁一丁の間に鬼殺隊士の待機小屋を設置する。」

夜や曇りの日にそこに入ってもらって、夜に町人になりすまして警護をする。

そこまで隊士を増やすためにはある事をしなければならぬ

しのぶは気付いたような顔で口を開く。

「最終選別の…回数と制度の見直しですか？」

「そうだ、ただでさえ全国に数百人しかいない隊士。」

そんな人手不足の原因はあの過酷極まりない一年に一回の最終選別だ」

七日間で鬼に殺されなくとも脱水症状で死ぬ奴は

今まで何十人もいただろうと彼は考えた。

虎咲が手鬼を殺したため難易度は少し下がっただろうが、それでも合格者は一回に一桁程だろう。

「でもそれでは隊士の質が下がり…あ！」

「気付いたか？ 隊士は柱稽古で後から幾らでも強化できる。

しかもな、攻勢に出るより防戦に徹した方が戦いやすい。

待ち伏せという単純な作戦でも呼吸使えば鬼の首を切るのは簡単だろ」

「その案を…いつから考えていたんですか？」

「ついさっきだ、迎撃の手段はまた後で考えるが…大まかな事は考えておいた」

虎咲はまずこれをお館様に伝えるのが先だなと言いながら手紙を書き、

自分の鴉の足に手紙を括り付けた。

「じゃあ、頼んだぞ」

「カー！ 了解！」

鴉は大きな羽音を立てて飛び去って行った。

緊急の柱合会議が開かれるのは、もう間も無くである。

「ふう…実弥辺りは反論してくるだろうが…まあそんな時はそんな時だ」

しのぶは実弥が『んだと teme エ！ふざけてんのか！』

と言っている場面が想像できた。

「あー…なんかありそうですね」

虎咲は頭を抱えるが、すぐにやめた。

「あ、いたいた。おーい虎咲！」

真菰が此方に走ってくる、右手に手紙を持って。

「真菰か、どうしたその手紙」

「修君から、刀鍛冶の里に来てくださいだつてさ」

修というのは虎咲専属の刀鍛冶鍛冶、

鐵火山の弟子なのだが、彼曰く『師匠が会いたい』らしい。

「正直言うとな、すつごく怖い」

「あら、そんなに怖い方なんですか？」

「会ったことは無い。だが、また魔改造されるかもな」

あんな高速移動、常人だったら死んでるぜと言いながら虎咲は
やれやれという格好をする。

彼の立体機動装置に、純正の部品は使われていなかった。

すべて鐵火山の手によって魔改造されてしまった。

まあ使いやすいで文句は言わない事にする。

「とりあえず…行ってくるわ」

「あれ？私と行くんじゃないやなかつたんですか？」

(は?)

「そうだよ虎咲！私も連れてつてくれるんでしょ？」

(は?は?)

しのぶと真菰はしてやったりという表情を浮かべて笑う。

この二人は虎咲に最初からついて来るつもりだったのだ。

既に裏で同盟を結んだしのぶと真菰は、

刀鍛冶の里で虎咲という理性の塊を陥落させようとしていたのだ。

「…わかった、行こう」

虎咲はそのまんまの格好、つまり完全武装で刀鍛冶の里に赴いた。

しのぶと真菰は、大慌てで支度をして虎咲の後ろについて行ったのだった。

く産屋敷邸へ

「ほう…虎咲も案外凄い考えを出すんだね」

「どうしたのですか？」

「あまねか、今しがた虎咲の鴉が手紙を持ってきてね」

「これ…対鬼迎撃専用要塞街…ですか…」

輝哉の妻あまねは、その設計図を見て驚く。

「とてもあの少年が考えた物とは思えません…：凄い物ですね…：これは彼の描いた街、いや要塞の設計図は合理的で現実的であつた。

「街の至る所に機関銃を設置、隊士は町人になりすまして待ち伏せ、

さらには民間人のための地下避難所とはね…：虎咲も考えたな…」

輝哉は虎咲の描いた街の有意性を考える。

人が多く街にいれば、必然的に出現する鬼も増える。

この街は、いつか大きな戦いに巻き込まれるかもしれない。

多くの民間人を、この街で殺してしまうかもしれない。

だが、それを未然に防ぐ。そのための輝哉の考えた隊士常駐。

虎咲は鬼が出る時間のみの見回りと言っているが、

こうすれば隊士達は戦い終わった瞬間家に帰れるし、

何より家族がいれば更にこの街を護ろうと考える筈だ。

「この街の建造費、誰が払うんでしょうかね」

あまねは建造費の出所を気にする。

「半分は虎咲持ちだろうね、手紙の端にこう書いてあつた。

『金が有り余つた結果この様な街を作ろうと考えました』だつてさ」

「規模が考えましたじゃなくて企みましたじゃないでしょうか…」

しかし、もう半分は産屋敷邸が払う。

流石に虎咲の財布だけではこんなに大きな街を作る事はできないだろう。

「まあいいさ、虎咲には毎回毎回驚かさされる。」

近く緊急の柱合会議を取り繕う、人員の問題はその時に聞くとするよ」

(さて、一体どんな要塞になるのかな…)

輝哉はあまねに見えない様に笑うのだった。

「刀鍛冶の里」

「あ、虎咲さん！」

「久しぶりだな、修」

「はい！」

修の面の下はおそらく笑っているのであろう、

しかし後ろの二人が放つ何かに虎咲は気付かなかつた。

「分かつてる？しのぶ」

「ええ…ここで決着をつけるつもりです」

「既に根回しもした、やつとあの鈍感を陥せるよ」

「やつとですね…何回仕掛けても鈍感つてのは掛からないんですね」

既に彼女達はあの鈍感に何度も色仕掛けをして

ことごとく撃沈されており、刀鍛冶の里が虎咲を陥せるチャンスと考えたのだ。

「でもそれは今日で終わり！今日こそ陥すよ！」

「はい……！」

流石にこんな声出せば鈍感でも気付くわけで…。

「ん？どうした」

「何でも無いでーす」

(?)

やはり虎咲は鈍感だった。

「修、鐵火山さんって何処にいるの？」

「あの小屋に居るはずですが……」

ひゃつはあー！汚物は消毒だあー！！

「この声って？」

「僕の師匠の声ですね……こりゃ……」

修がため息を吐く、彼も苦労しているらしい。

「師匠く帰りました。何度も言ってますよね？奇声をあげるのはやめろって」

「いいじゃんかよ、虎咲君かい？その少年は」

鐵火山がゆっくりと顔を上げ、虎咲を指差す。

「はい、森岡虎咲です。装備などありがとうございます」

「いいんだいいんだ、それが俺の仕事だからな。」

次から作る刃には悪鬼滅殺と刻ませてもらう方がいいか？」

鐵火山は虎咲の方を向いて喋る。

虎咲は鐵火山にある紙を渡す。

「数が多いでしょうが……大丈夫ですか？」

「三年式重機関銃か……懐かしいな、昔は結構作ったもんだ」

「今は刀ですけどね」

「それもそうだな」

鐵火山は笑うが、真面目な虎咲は笑わなかった。

「受けてくれますか？」

「ああ……何挺作ればいいかわからんが」

三年式は三八式と同じ弾薬を用いるため、

虎咲向けに製造する対鬼用の6・5mm弾を製造し続ければ良いのだが、

銃本体は街の至る所に設置するため、

どのくらい製造すればいいのかわからないのである。

「作れるだけ作ってもらって構いません。多いに越した事はないですし」

「分かった、出来るだけ多く作る」

「ありがとうございます！」

「また顔を出してくれよ、そんなときはまた装置改造すつからな」

「これ以上はちよつと……」

「ははは、冗談さ」

「では、また」

そう言い虎咲は戸を開けて外に出た。

「壮大な計画を思い付いたねえ……虎咲」

真菰は目を点にしながら虎咲に言う、彼女にこの計画を話すのはこれが初めてだ。

いや話してない、盗み聞きだ。

「盗み聞きしてた？」

「バレた？」

真菰はチョロつと舌を出して「バレちった」と言いたげな顔をしていた。

「当たり前だわ、バレるに決まってるだろ」

「真菰が『盗み聞きしようぜしのぶ』って言ってきたんです」

しのぶの告げ口が真菰を容赦なく襲う。

「しのぶ謀反を！」

真菰が叫び、しのぶは違う方向を見る。

「あーもう宿に行くぞ」

「!!」

二人の目が変わる、この二人にとってチャンスが到来した。

(どうする? シちやう? シちやう?)

(そうしましょう、これ以外に方法が見つからないんです)

二人は物凄い小声で喋り、

いつのタイミングで寝込みを襲うか考えていた。

「お、ここか」

「そうですね…」

「わーい宿だ宿だ!」

「騒ぐな」

虎咲の容赦ないツツコミが炸裂、鋭い矢となって真菰に突き刺さる。

☒・ω・、)

(あ、今シヨボーンってなってますね…)

しのぶは脳内で真菰を憐みつつも、放っておいて虎咲について行く。

〜二時間後〜

夕食を済ませた三人は、風呂に入る。

もちろん男女別のはずだ、はずだった。

それなのに何故この二人は

男子風呂に入っているのだろうかと虎咲は首を傾げる。

「あれ？見てなかったの？この時間帯は混浴なんだよ？」

タオルに身を包んだ真菰が「何言ってるの」とも言いたげな顔をしている。

ツツコミどころが多くてどこからツツコメばいいかわからない！

「ふふふ…慌てすぎですよ虎咲」

（あ、これヤバイやつや）

しのぶの体はタオルで隠れているが、彼の理性は臨界点を突破した。

しかも既にメルトダウン（意味深）を起こしかけている。

「さあ…ここまで色仕掛けしても引つかからなかった…責任取らせましょう、真菰」

「そうだよ！責任取ってね、虎咲」

ゴキヤァ！という音が響いた。そう、彼の理性が消し飛んだ音である。

こうして三人の完徹が決定したのだ。

第拾玖話 事後です、は？

〔朝の七時、旅館の一室〕

「…ふわああ…朝か…」

虎咲は起き上がり、窓の外を見る。

既に日は上がり、鳥の鳴き声が聞こえる。

「おいしのぶ…真菰…起きろ…朝だぞ…」

まだ眠い目を擦りながら、隣で寝ている二人を起こす。

（昨日は散々だったな…腰が碎け散った…）

「虎咲…ですか…おはようございます」

「おはよう、しのぶ。その服も着ない馬鹿が起きないんだが」

虎咲は生まれたままの姿を曝け出す真菰を指差す。

「それは私の事だなく？虎咲う」

真菰は起きたが、色々見えてはいけない物が出ている。

「おい、お前はとりあえず服を着ろ」

「面倒臭い」

「はあ……？」

女子が言う言葉だろうか。

否、倦怠感に襲われぬ限り男子ですら発さない。

「真菰、女の子がそんな言葉使っちゃいけませんよ？」

「しのぶは私のお母さんかよ！」

真菰の鋭いツツコミが炸裂するが、

鋼のメンタルを持ったしのぶには通用しない。

「まあとりあえず帰りましょう、きよ達やカナヲが心配してますし」

「あれ？カナエさんとかが居るんじゃないの？」

「姉さんは……富岡さん連れてどっか行ってますよ……タブン」

虎咲に不穏な言葉が耳に入ったが、

とりあえず早く帰らなければいけないのは変わりない。

「真菰、早く帰らなきゃいけないから早く支度しろ〜」

「わかったよお」

真菰は渋々といった感じで服を着る。

渋々じゃない、寝る前に着とけや。

「さあ…帰るか…」

「私腰が痛いんだけど」

「仕方ないな…おぶってやるから…」

真菰を背負い宿を出る。

しのぶが真菰に嫉妬を含んだ目線を送ったが、

その目線に真菰が気付くことはなかった

「ヤッタゼ」「何か言った？」「いえ何も」

(何か言ったなコイツ、小声だったが絶対何か言ったな)

三人は何事も無かったかのように蝶屋敷への帰路についたのだ。

↳ 蝶屋敷前↳

「あーただいまー」

当然ながら返事はない。

連絡も何も入れておらず、

ただでさえしのぶたちでも広さを持って余しているため声が聞こえる訳ない。

玄関を跨ぎ、虎咲は自室へ直行する。

腰が砕け散った真菰を寝台に放り投げ、何時ぞやのように縁側に座る。

「なあなあしのぶ、これから緊急の柱合会議があったらどうする？」

「冗談キツイですよ、虎咲。正直行きたく無いですよ」

「カー！カー！緊急柱合会議ヲ執り行ウ!!」

柱ハ全員産屋敷邸ニ集マレエ!

「……」

虎咲としのぶは固まる、自分達の会話が現実になるとは思つてもいながつた。

「…行くか」

「そう…ですね…」

虎咲は産屋敷邸に行く前に病室に訪れる。

腰が砕け散つた真菰に緊急の柱合会議に

行かなければならないことを伝えた。

「あー…頑張つて〜私ここで楽しんでる〜」

「そうか、後でシバくか…」

「やめて〜私はまだ死にたくないよ…」

「ハハッ、冗談冗談」

(ん?)

真菰は虎咲の後ろにネズミが見えたが瞬きしたら消えたため、

気のせいだろうという事で片付けた。

く産屋敷邸く

隠にドナドナされた虎咲は、産屋敷邸の庭で跪く。

「やあ私の可愛い剣士達、急に集めて悪かったね」

輝哉の用件は虎咲が考えた迎撃街の承認だった。

「これがこの前もらった設計図なんだけど…」

お館様は俺以外の柱に設計図を見せる。

大半は成る程という顔をしており、

鳴柱の宇髄天元は機関銃の表示を見て

「機関銃!? 森岡も派手なことを考えるな！」と大声で言った。

そこで風柱の不死川実弥があることに気付く。

「オイ森岡ア、お前これだけの規模に配置する隊士はどこから捻り出すつもりだ？」

今鬼殺隊は人員が少なく、全国を数百名のみで防衛している。

そんなただでさえ少ない隊士を、どうやってこの街に持つてくるのか。

それを実弥は気にしていたのだ。

「簡単さ。最終選別、その回数と制度の見直しを施行する」

「何言ってるんだオメエ！ 伝統を破るつもりか!？」

実弥は立ち上がり反論するが、先に口を開いたのは虎咲だった。

「実弥、この街は侵略及び攻撃の為に造るんじゃない。防戦のために造るんだ」
「それがどうした、最終選別を変える必要は無いだろう」

蛇柱の伊黒小芭内が反論する。

「戦いはあきらかに防戦の方が楽、

ど素人でも待ち伏せで呼吸を使えば鬼を殺せるはずだ。

そして素人は柱稽古で後から幾らでも強化できる。」

「だがもし上弦などが来ればひとたまりも無いぞ?」

「この街はなんと俺の巡回区域に含まれている。」

「この街を守るなんて普段の巡回よりは簡単だ」

「それは…確かにそうだな…」

伊黒は納得してしまう、それ程虎咲の思想は理に叶っていた。

「成る程ね…実弥が伝統を守ろうとしているのは分かる。」

でもね、伝統を破つてでも私はこの代で終わらせたいんだ。

虎咲が十人目の柱として就任してるのがいい例だよ」

実弥は輝哉に反対せずに黙ってしまう。

「…申し訳ありません、お館様」

「謝る必要は無いよ、実弥」

御意……と言いなから実弥が跪く。

「これで全てだ。反論が無ければ明日から着工するそうだ」

「……」

反対する者は居なかった。

反対しようにも彼らには虎咲の理論と計画に反論する余地が無かった。

「じゃあ虎咲、予定通り明日着工で」

「御意、出来る限り早く完成させます」

虎咲は頭を下げた、それを見た輝哉はにつこり笑った。

「じゃあみんな、今日は解散。次の柱合会議でみんなの顔を見れることを祈るよ」

輝哉が言うのと全員が御意と言いなから頭を下げ、

各々の帰宅路に進んで行った。

「まさかここまで理に叶った物を造るとは思わなかったぞ……虎咲」

隣に行冥が立つ、彼の身長が少しだけ欲しいと思つた虎咲であった。

「行冥さんですか。防衛の方が簡単じゃないか？つて思つて作つてみたんですよ」

「まあ、何事もなく完成すればこの街の有用性が証明出来る。」

もし有用性が無ければその時だな」

「その時は……いや、その時は来ないでしょう」

虎咲はこの街の設計に絶対的な自信を持っていた。

「まあ上弦が束になって来れば勝てませんけどね」

この街の設計防衛限界は、鬼二千体か下弦の全て。

これを超える鬼二千五百体や上弦全てが一気に強襲すれば

この街は持たない、だがそれは最終決戦。

産屋敷家に代々伝わる予知能力でそれが起こるのは容易に探知可能。

上弦全てが一気に強襲する時は、

全鬼殺隊士がこの街に待機しているだろうと虎咲は踏んでいた。

「まあその時が来れば、だな」

「そうですね、では」

虎咲の迎えの隠が現れる、虎咲は行冥に別れを告げて

隠にドナドナされ蝶屋敷に戻った。

く蝶屋敷く

「帰ったぞー」

「あ、お帰りなさい！虎咲！」

真菰が玄閔に飛び出し、虎咲に飛び付く。

「痛いなあ…。真菰、腰は大丈夫か？」

「うん！寝てたらバッチリ！」

真菰は満面の笑みを浮かべ、虎咲を見る。

（か、かわええ〜）

虎咲は顔を見られないように上を向く。

「ねえ虎咲、そろそろ夕飯だから食堂に来てってカナエさんが」

「わかった、今行く」

虎咲は装備を部屋に片付け、廊下を歩き食堂に入る。

「遅かったですね、虎咲。もう夕飯ですから座ってください」

しのぶが催促する、他の子も既に座っていた。

今まで実感が湧かなかったが、

蝶屋敷が自分の帰る場所だというのが身にしみた。

そんな思いを込めて、虎咲は答える。

「ああ、わかった」

しのぶは虎咲だけに見えるように笑った。

夕飯を食べ終わった虎咲は、部屋に置かれた一つの包を開ける。

「早すぎじゃないですか…：鐵火山さん…」

虎咲は思わず呟く。

包を開けると、新品の三年式機関銃が現れた。

「明日からか…完成が楽しみだな…」

虎咲は完成した街を想像して一人笑ったのだった。

第貳拾話 完成に向けて

「すいません！こんな空き地に集めてしまつて！」

第二清水町の建設予定地には、

鬼殺隊に救われた数多くの建設業をしている人が集まっている。

「いいんですよ、助けられた恩を返せばそれでいいんです」

「で、今日から何を造るんですか？」

虎咲は全ての人に見せれるように設計図を印刷していた。

その印刷してくれた業者もどうやら鬼殺隊に救われたらしい。

「迎撃戦専用要塞街……また大きいもんを作りますな」

「偽装用の家とかを建てるのが主ですが、

電線地中化や水道管を繋げるとなると相当な工事になります。

必ず皆さんでこの街を完成させましょう！」

「「おおおおお!!」」

虎咲の呼び掛けに応えた業者達は、すぐさま作業に取り掛かる。

「そこ溝あるぞ！落ちるな」 「うわあああ!!」 って言ったそばからあ!!」

「機関銃が入る場所作っておけ！何？材料があと僅か？買ってこい！」
「もう何?!鋼材が無くなった!?!そんなー」

現場は色々な人が入り混じり、着々と(?)作業が進んでいく。

虎咲は現場に住み込みで指揮を執った。

彼はこの街と刀鍛冶の里を何十往復も走り、

完成したばかりの三年式機関銃と保式機関銃を運び続けた。

〜三ヶ月後〜

流石に工事業者の人から休んでくれと言われた虎咲、

三ヶ月ぶりに蝶屋敷に帰って参りました。

玄関には青筋を浮かべたしのぶが仁王立ちしていた。

「…お帰りなさい、虎咲」

「ああ…ただいま、しのぶ」

何時ぞやのように縁側に座り、庭を見る。

「作業の進捗状況はどんな感じですか?」

しのぶはお茶を持って虎咲の隣に座る。

「家の並びと基礎工事は終わった、あとは家作りだな。」

隊士の数も住みたいという住民の数も増えているらしい。

「このまま行けば一、二週間前倒しで完全稼働できる」

「何も無ければいいんですけどね」

後ろから少女が接近したのをしのぶは気付いたが、虎咲は気付かなかつた。

「どーん！」

「ああああ!？」

虎咲は驚きのあまり悲鳴を上げて頭から庭に落つこちた。

「真菰お!!」

「ははは!ごめんって!」

虎咲は大声を上げて真菰を睨むが、真菰は大して気にしなかつた。

「すいません、あまりに可笑しくて…」

しのぶが口を押さえて笑いを堪えるが、隠せていない。

完全に笑っている。

「俺だけだろうなあ…驚きのあまり縁側から庭に頭から落ちるなんて」

だがこの二年後、蝶屋敷の住民の一人がそれを実行するのだが、

虎咲やしのぶ、真菰には知る由も無い。

「もう行くわ、じゃあまた」

「一週間後にまた庭に落ちてよ!」

「嫌だね！落ちたくないね！」

「まあ一週間後に来れたら帰ってきて下さいね」

「わかった」

虎咲はそのまま現場に走って行った。

「働き者ですね…虎咲は」

「そうだね…その内倒れそうだけど大丈夫かな」

二人は働き過ぎの虎咲を心配するが、

三ヶ月もまともな休息を取っていない彼なら大丈夫だろうということで流した。

なお、虎咲が次に蝶屋敷に帰ってくるのは街が完全稼働した直後、

つまり四ヶ月後のことである。

く二ヶ月後く

「とりあえず街は完成しました！皆さんありがとうございますー！」

虎咲は今まで工事に携わってきた人達に向けて礼を述べる。

業者さん達は「いよっしやああああ!!!」と叫び狂う。

「万歳三唱だ！みんな！」

「バンザーイ!!?バンザーイ!!?バンザーイ!!?／

一人の業者さんが叫ぶと同時に、全員が酒を飲んだ後のように万歳と叫ぶ。

虎咲の耳は丸一日再起不能になったそうだ。

く一ヶ月後く

「カアー！伝令！伝令！」

「わかったわかった」

機関銃の設置をしていた虎咲に、ある情報がお館様からもたらされた。

『新人の剣士達約三百人を第二清水町に送ったよ、

完全稼働が始まったら彼らの防衛が始まる、でいいよね？』

虎咲は紙に二文字、『はい』と書いて鴉の足に括り付けた。

「じゃあお願い」

「カアー！了解！」

鴉はお館様に手紙を届けるべく飛び去って行った。

く一ヶ月後く

「君達が新しい隊士？結構いるな」

虎咲は新たに配属された隊士達に挨拶をした。

実弥によると、新人隊士の強化は虎咲を除く柱全員で行ったらしい。

「俺は翼柱の森岡虎咲、この街の最高責任者だ」

何処からか柱が最高責任者？という声が聞こえてきた。

「この街はただの街じゃない。

お館様から説明があつたかもしれないが、この街は要塞街。

正式名称は対鬼迎撃戦専用要塞街第二清水町だ」

「質問です」

一人の少女が手をあげる。

「何だ？その君。名前は？」

「大月あずさです、この街は一見すると要塞には見えませんが」

彼女は周りをキョロキョロと見回して虎咲の方を見る。

「いい質問だ、この街には家に見せかけた防護陣地がいくつもある。

君達にはそこに住んでもらい、夜や日が差さない時は町人に化けて巡回してもら

う」

「防護陣地の主な武器はなんですか？原始的な罠ですか？」

「機関銃だ」

「え？」

あずさは困惑する、機関銃って軍の装備だろうと。

「機関銃だ」

「いや、それはわかりますが……ええ……？」

流石に信じきれていなかった。

「君達にはまず機関銃の手入れと操作法を学んでもらう。

いざとなったときに機関銃が動かなければそれはもうただの鉄の塊だ」

新人隊士達はうなずく。だが一人の少年が反論する。

「剣術を極めた意味って…あつたんですか？」

「君、名前は？」

少年はビクツと震え、名乗る。

「岩国児珠です、剣術を極めた意味ってあるんですか？」

「児珠君、俺は機関銃が君らの主兵装なんて一言も言っていないぞ？」

虎咲はイタズラっぽく笑いながら言う。

「と言うと？」

「鬼がいたら容赦無く斬れ、君達は鬼殺隊士としては赤子同然。

だが最も簡単な戦術である待ち伏せ、

それだったら君達でも対処可能のはずだ」

「もし強力な鬼が現れたらどうするんですか？」

児珠の顔には不安が残っていた。

「偶然ながらこの街は俺の巡回区域に入ってる。普段の巡回よりは簡単だ」

「偶然じゃないですよね」

児珠の冷静なツツコミが虎咲に刺さる。

「あ、バレた？」

「まあ…はい」

児珠は心底心配だった。こんな人が俺達の上司か…と。

↳ 蝶屋敷

「ただいま」

「お帰りなさい虎咲。完全稼働はもうすぐですか？」

帰ってきた虎咲をしのぶが出迎える、そんな光景はもう蝶屋敷でお馴染みになっていた。

だが今日は少し違った。

「お帰り虎咲！なんでこんだけ顔を出さなかったのか小一時間話を聞こうか！」

真菰がいたのだ、しかも笑顔のまま青筋を浮かべて。

「え？あ、すいませんボソツ」

「あ？聞こえないよ!？」

真菰が声を上げて怒る。

「てつきり死んじやったと思ったんだから！」

「ごめん、団子で許して」

「許す！」

「チヨロイナ「何か言った？」何でもない」

「ねえねえしのぶ！責任取らせよ！」

「そうですよ、私達がどれだけ寂しかったか。

夕飯の後覚えておいて下さいね？」

次の日の朝、三人の腰が砕けたのはどうでもいい事である。

第貳拾壹話 調整と完成

完全稼働を開始した第二清水町、新たに配属された新人隊士。

彼らの調整と強化は、主に二人の柱達によってほぼ毎週行われていた。

「テメエらは軽くなった最終選別に受かったただけだ！

この風柱不死川実弥が直々に稽古してやる!!」

「はー！」

実弥が行うのは戦闘訓練、彼らに最も足りていない物である。

彼らは一度も戦闘という物を行なっていない。

もしかしたら藤襲山で鬼と対峙したかもしれない。

まあそれはほんの一握り、ごく僅かの隊士のみだ。

「やっぱ柱強いですね、勝てるわけないってあんなの」

兎珠が愚痴る、虎咲はそこを励ます。

「まあな。でも実弥も人間：？だから何とかなる」

「オイ虎咲テメエ！何で人間かどうか言おうとしたところで詰まったんだよ！」

「え…？人間…だよな」

それをやめろおお！という実弥の怒鳴り声とグキツという音がしたのは同時だった。

く蝶屋敷く

虎咲がブラック勤務してから直ぐに

蝶屋敷で住み込みで働くこととなった水葉、陽菜、風華。

たまたま蝶屋敷を訪れていた虎咲の同期唯一の男子である裕太。

その四人が合掌しながら縁側に向く。

((可哀想に…虎咲君)) 虎咲…)

その方向には日輪刀を構えたしのぶと真菰がおり、

その視線の先には冷や汗を大量に流した翼柱の戸山虎咲と、

風柱の不死川実弥が正座させられていた。

「ねえ後ろの四人！手え合わせないで！まだ死んでないから！」

虎咲がツツコミを入れるが、いつものように冷静では無かった。

「なあ胡蝶オ、夫を傷付けられたからって怒るなよ」

実弥はこんな状態でもしのぶを煽る。

実弥は本当にキレたしのぶを知らないようだ。

「ツチ…夫ってわけじゃないんだけど。」

「まあ今回は許してやってもいいわ」

「口調が素に戻ってね？しのぶ」

（てか舌打ちしたやん、こっわ）

「黙やがれください虎咲、今はこの風柱です」

「ねえねえ風柱さん、苗字不死川って言うんだね。」

実際に死なないか確かめてみてもいい？」

「いいですね、真菰。新しい毒を試したいですし」

（なんか人格変わってね二人とも）

そんな虎咲の心配を他所に、実弥は二人によつて病室に連れて行かれた。

（二分後）

「なかなかしづとかったですね、今度やったら容赦なく殺しますよ」

「虎咲も例外じゃ無いからね」

「ハイ…スイマセン…」

どうやら二人は反省したようだ。呼吸を使わなかっただけまだマシだろう。

「俺は稽古してくる。テメエ…もう邪魔すんなよ？」

「わかったわかった」

実弥は新人隊士を育成すべく第二清水町へと向かった。

「てか珍しいな、同期五人揃うなんて」

「それ、俺も思った」

え、私仲間はずれやんと言っていた風華は無視された。
だが彼女は無視しなかった。

「大丈夫よ〜私が仲間〜」

間延びした声の特徴の元花柱、胡蝶カナエである。

「うわあ!?!師範!」

「うーりうりうり」

カナエのちよっかいが風華を襲う!

「姉さん、風華さんが嫌がつてるんですからやめて上げて下さい」

「じゃあしのぶにやるわ!」

「え!?!ちよつと!」

虎咲はこれを止められるのは一人しかいないと思ひある人物を呼びに行く。

〜五分後〜

「みんな一緒になれば嫌じゃないでしょ?」

カナエの暴走はまだ続いていた。

蝶屋敷の前の道を全力疾走していた虎咲は、ある人物を連れていた。

「さあ止めてください富岡さん!」

そうカナエの想い人、水柱の富岡義勇である。

「…は？」

普段の彼なら絶対に出ない素っ頓狂な声が聞こえた。

それもそうだ、訳もわからず蝶屋敷に連行されたのだから。

「あーぎーくんじゃない！ やって欲しくて来たの!？」

完全に暴走状態のカナエは義勇に飛ぶ。

義勇は一瞬「え？ は？」という顔をしたが、

我を取り戻して咄嗟にカナエの足を蹴り飛ばす。

「痛つたいなあ、何で蹴つたのさ！」

「…すまん、体が勝手に」

「すまん、済んだら警察はいらないよ！」

義勇は呆れたような、またかという顔でしのぶを見る。

「…すまない胡蝶、ちよつと回収させてもらおうぞ」

「あつはい、どうぞで」

しのぶの即答によってカナエは義勇によってドナドナされた。

去り際にカナエが何か言っていたが気のせいだろう。

「波乱だねえ…」

「そうですねえ……」

「そうだねえ……」

三人がまるで年寄りのような感想を零す。

しかし、波乱を起こした原因は間違いないく虎咲である。

「しのぶさん、風華」

「どうしたんですか？水葉さん」

「今更だけど蝶屋敷つてこんな荒れるの？」

「本当に今更ですね、虎咲がいれば荒れますよ」

ほら今もそこで、と言いかけたしのぶは良いことを思いつき

自室で保式と三年式に囲まれた虎咲に近づくと

「ふっ」

「あいやああ?!?!」

しのぶはまた虎咲の耳に息を吹きかける。

それを見ていた後ろの四人は吹き出す。

「ふふふっ……す、すいません……ふはは……」

「んぐっ、んん」

「虎咲、そんな声出んのかwふはは」

「ふははっ…うゝえゝフツ、えゝえゝん」
「どうしたあ！陽菜！」

虎咲は一瞬漫才でも見てるのだろうかと思つたが、
虎咲を馬鹿にし、その馬鹿にされる理由を作つたのはしのぶだといふのに気がついた。

「おい…しのぶ…」

「なんですか？あ…」

しのぶはたじろぐ、虎咲の目には光が無かつた。

「なあ、もうやめろつて言つたよなあ…」

「それは…その…」

（反論出来ないしのぶは珍しい！）

真菰のそんな思考を他所に虎咲は顔に青筋を浮かべ始める。

「お、面白かつたんです…」

「許す！次やつたら許さないからな！」

「え？」

しのぶは困惑する、

「こんなにすんなり許してくれるとは思わなかつたからだ。」

「波乱だったね…今日は…」

いつの間にか帰った裕太をよそに三人の少女は話始める。

「そうね…また見たいと思っちゃうもの事実だけど」

「多分自然に発生すると思う。あの二人、いや三人だね」

三人は幸せそうに笑う虎咲、しのぶ、真菰を見る。

「はあく…いいなあ」

「水葉も太一に告つちやえばいいのに」

「なっ、何言ってるの!？」

水葉は陽菜の不意打ちに顔を赤く染めるのだった。

第貳拾貳話 戦闘！第二清水町！

やあみんな元気かい？虎咲だ。

第二清水町が完全稼働してから二ヶ月、まだ目立った鬼の襲撃は無い。

まあその分新人の育成に時間が割けるのはありがたい。

ここで少しこの町の紹介をしよう。

この町にも人（囿）が多く入って来た。

多くは鬼殺隊士の家族だったりするのだが、

鬼殺隊と一切関係無い民間人も多く入居している。

機関銃壕や機関銃が据え付けられた家には入居させないようにしている。

機関銃壕、暇を持て余した俺が新たに塹壕を一人で掘り、

そこに上下左右に位置が動かせる機関銃を設置した。

上下左右と言っても機関銃が設置されている板を動かしているだけだが。

機関銃壕へと繋がる地下通路は鬼殺隊士が駐留する家に繋がっており、

この塹壕は第二清水町を守る第一防衛線となっている。

新人隊士の機関銃隊は主に保式機関銃で組成されるが、

検査などで数が揃わなかった場合三年式機関銃が代替で設置される。大抵の雑魚鬼はこの時点で弾幕の餌食となりこの世を去る。

この強固な第一防衛線を突破した鬼は続く第二防衛線で殺される。

第二防衛線は町に入る直前、町の外周全ての家屋で形成されており、鬼殺隊士の駐在地が集中している。

全ての家屋の窓に後述の13、2m機関砲が配置されており、そこに現れた鬼は一気に蜂の巣と化すだろう。

もし機関銃が何らかの形で撃てなくなった場合は、新人隊士の手によって塵殺される。

度重なる柱の鍛錬で彼らの実力は

既に甲に達するか達さないかの狭間で収まっている。

彼らは機関銃の扱いも優れており、反動を殺す事が彼らには可能だ。

このさらに強固な第二防衛線を突破するのは恐らく血気術を駆使する鬼だろう。

第三防衛線、町の中心から半径約150mの円周に設置された防衛線。

この線上には鬼殺隊士の駐在地が多く存在している。

この防衛線は唯一機関銃を主力としない防衛線で、

剣技に自信がある隊士のみで組成される。

機関銃の数こそ少ないものの、人間が得意とする接近戦で対処する。

最終防衛線、使われる事は殆ど無いだろうが存在する最後の砦。

全ての防衛線からトンネルが直結されており、

防衛に失敗した場合その他の防衛線から隊士をかき集められる。

籠城戦の場合には輸送路としても利用される。

町の中心から50mの範囲に設定されており、機関銃や機関砲の数も最多。

町の中心地には地下避難所へのトンネルに入るための

映画館に偽装した要塞が建てられている。

要塞の窓には無数の機関砲が設置されており、

戦闘時には数多くの部屋で鬼殺隊士達が待ち伏せをする。

本来三年式と保式が設置される予定だったが

魔改造大好きな鐵火山師匠の手により大口径13.2mm弾を使用する機関砲が爆

誕、

それらが全て窓付近に設置されている。

余剰となった三年式と保式は第一防衛線と第三防衛線に移設されたのだ。

l Non sider l

そんなハリネズミのような深夜の町を虎咲は映画館に立てた物見櫓から眺める。

「自分で作った町…最終防衛線が役に立つ日が来ないことを願おう…」

この時フラグがビンビンに立てられた事に虎咲は気づかなかつた。

虎咲は立体機動で鉄塔から降りて要塞の屋上に降り立つ。

「ふうー…」

「ひゃあああ?!?!」

「まだ、また来た。」

そう思いながら虎咲が振り向くと、そこには「やったぜ」と

言いたげな顔をしている蟲柱胡蝶しのぶが立っていた。

「もうやめろって言っただろ…」

「残念、隙あらばやり続けますよ」

「まじか…」

虎咲は頭を抱えて蹲る。

「改めて見ると…大きな町ですよね…」

「…なあなあしのぶ、もっと上から見たいか?」

「え?それって…え!?!」

虎咲はしのぶを引き寄せ右手に柄を握り手に力を入れる。

「異論は無しだ!」

「待ってそれはああああ!!」

虎咲は左腕でしのぶを抱えて物見櫓にアンカーを射出する。

「どうだ?よく見えるだろ」

「う…まあ…よく見えます…」

何故か腕の中でぐったりしているしのぶを抱えて飛んだ虎咲、

しかしこの状態は俗に言う空中ブランコである。

「どうした?高いところは嫌か?」

「……」

「え、どうしたって…痛い痛い」

しのぶは何も喋らずに虎咲の腕をつねる、

しのぶの顔は何故か耳まで赤く染まっている。

「早く…下ろしてください…」

「あ、わかったわかった」

「え待って下ろすってそういう意味じゃないですってええええ!!」

虎咲は立体機動で地面に向かい急降下。

虎咲は満足そうに地面に立つが、しのぶは顔面蒼白だった。

「はあ…はあ…はあ…」

「大丈夫か?」

「これが大丈夫に見えますか…?」

しのぶは真つ青な自分の顔を指差すが、虎咲はそこまで気にしなかった。

「まあ…うん」

何処からか銃声が聞こえ、鏖鴉が飛んできた。大声でこう言う。

「カア—!第一防衛線カラ連絡!十二鬼月出現!

大量ノ鬼ヲ引キ連レテオリ東ノ第一防衛線は崩壊!」

「…っ!わかった!第一防衛線は放棄!担当者は第三防衛線へ急がせろ!」

「カア—!了解!」

既に火が第二防衛線の辺りまで見える、

今第二防衛線に隊士を向かわせても絶対間に合わないだろう。

鏖鴉による伝達の短所は、時間差が大きい事だ。

「十二鬼月…ですか…」

しのぶが不安な声で虎咲に言う、

彼女はどうかやら前線の新人隊士達が心配のようだ。

「ああ、しかし初陣が十二鬼月とはなあ…」

「まあ…いざとなったらここに柱が二人いますしね」

「しかも実弥が今日稽古をつけに来ている、これだったら柱三人だな」
そう。実は今日、定期的に稽古をつけに来ている

風柱の不死川実弥がこの町にいる。

なんと今この町には三人の柱が存在しているのだ。

「まあ…アイツが戦闘に参加するかは別だけどな…」

「まあわかりませんよ、銃声で飛んでくるかもしれないし」

「そうだな、アイツは戦闘狂だしな」

「ハハハ…」

「笑っている場合では無いな…」

「そうですね…」

二人は改めて戦火にさらされている町を見下ろす。

住民の避難は既に終わっているが、このままでは第二防衛線も崩壊する。

鴉が周りの隊士達に援軍を要求しに行ったがいつ来るかはわからない。

「さあ…状況開始だ」

虎咲は口角を上げてそう言った。

ソイツが因縁の相手とは知らずに…。

〈第二防衛線付近〉

「…あの方の命令だから君を殺さなきゃいけない、

今日は前回と違って日付が変わってすぐだ。

時間はたつぷりあるし楽しませてもらうよ、虎咲君」

そう言いソイツは笑う。目には文字が刻まれているようにも見えるが、暗闇のためそこまではわからない。

この戦いで、第二清水町の存続が決まる。全てはここからだ。

「にしてもすごい要塞だ、いつの間に造ったんだ。

これも虎咲君かな? 楽しみだなあ! 今は柱になつてゐるって言うし!」

(ほんと、何で猗窩座殿が負けたのか。今の彼はそんなにも強いのか)

上弦ノ弐、童磨はそのまま第二防衛線を崩壊させたのだった。

く蝶屋敷く

「第二清水町が攻撃されてるって…本当…?」

「ああ…どうやら本当みたいだ…」

たまたま蝶屋敷に寄っていた兎珠とあずさ、

自分達が非番の時に町が攻撃されている事に驚く。

「虎咲さん達がいるから何とかなるかもしれないが…。

相手は十二鬼月らしい、しかも上弦」

「みんな…大丈夫かなあ…」

あずさは自分の仲間達の心配をするが、児珠がそれを遮る。

「アイツらも俺らとキツイ鍛錬をこなした仲間だろ、信じなくてどうする」
「そうだね、ありがとう。児珠」

だが二人は不安だった、

鍛錬しかしていない自分達に上弦の相手など務まるのかと。

〈第三防衛線〉

「手荒な歓迎ありがとね、虎咲君。君の部下達はすぐに死んでいったよ」

「黙れクソが。童磨、お前には肥溜めがお似合いだ、違うか」

「相変わらず口が悪いね、虎咲君」

「……」

二人は黙って武器を装備する。

「やっぱお前死ねよ。あと俺を名前で呼ぶな」

―翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼―

虎咲の瞳が紅く光り、虎咲は抜刀する。

「やっぱり男は嫌いだよ」

―血気術、蓮葉氷―

「翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼」
刀と扇がぶつかり合う。第二清水町での最初の大規模戦闘が幕を開けた。

第貳拾參話 氷バカと火力バカ

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼―

―血気術、粉凍り―

「お前らー口を閉じろー」

虎咲は新人隊士達に警告し、戦闘を再開する。

童磨がそこに追い打ちをかけるように扇を振るうが、

虎咲が逆手で構えていた銃剣によって阻止される。

新人隊士達はこの戦闘を機関銃で援護しながら眺めていた。

そして思い知らされた、柱でも互角かそれ以下。

彼らではまだ上弦に立ち向かうことなどできないという事を

この戦闘で思い知らされてしまった。

(さつきから弾丸が俺に当たるけど…虎咲君には当たらない、何故だ?)

カラクリはこうだ、既に虎咲は戦闘開始時から

絶対領域を自分の体に纏い戦っていた。

既に彼にも何発か命中しているが全て跳ね返されている。

だが童磨はそれに気付いておらず、常に思考を張り巡らせながら戦っていた。

―翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連―

―血気術、凍て曇―

周囲に氷の煙幕が展開され虎咲を襲う、しかし虎咲には効かなかった。

ここで童磨は気がついた、虎咲が自分を防護する技を出していることを。

「ねえ虎咲君。君、何か自分を防護する技を使ってるでしょ」

「バレたか……まあいい。お前の天敵だな、この技は」

人体を直に攻撃する童磨の血気術も人体に直接当たらなければ意味がない。

虎咲は自分の体を守るだけの範囲で絶対領域を発動していた。

粉凍りが当たろうが全て今の虎咲には効かなかったのだ。

「とんでもない技だね、でも」

童磨は虎咲に急速で接近し扇を構える。

「強力な技なら、受け止められないよね」

―血気術、枯園垂り―

童磨は扇を振るって虎咲に襲いかかる。

虎咲は立体機動で童磨の奥に飛んで避ける。

「そんなの初めて見たよ！すごいね！今の！」

「チツ…」

地面に立つたとき虎咲は気づいた、立体機動装置の動きが少し悪いことに。

（この動きの鈍さ…メカボックスが凍ったな…）

立体機動装置は本来比較的温暖な地方での使用を想定しており、

吹雪の中などではメカボックスやブラックボックスが凍結し完全に使用不可。

まだ完全凍結とまでは行っていないが、既に運用に支障が出る程度。

もう立体機動装置はただの荷物でしかない。

だが虎咲はあることに望みをかけた。

（イチかバチか…やってやる…）

虎咲は思いっきりガスを噴射して氷の煙幕を吹き飛ばす。

そこから建物にワイヤーを突き刺して一息をつく。

先程のような鈍さは無くなっていった。

「そんな使い方も出来るんだね、決めた！君は今日食べてあげる！」

―血気術、結晶ノ御子―

童磨は腰の高さまでの大きさの氷人形を三体出現させて虎咲に対峙する。

（以前君に放ったやつより強力だ、今度は負けないよ）

御子達は虎咲に一斉に襲いかかる、童磨も気を抜かずに技で畳み掛ける。

「…ふふ」

「何がおかしいんだい？ 追い詰められてるのは君だ」

「あー…考える事は同じなんだな」

「似の呼吸、壱ノ型 冬ざれ氷柱」

「え？ は!？」

童磨は頭上にいきなり現れた氷柱を避けきれずに右腕が切断される。

(何が起きた、氷柱？ 俺の血気術？ 何だこれは)

「今のでようやく完成したよ、礼を言うと思ったか？」

「似の呼吸、伍ノ型 結晶ノ御子」

虎咲の周りに腰ほどの高さの氷人形が二体現れて童磨に襲いかかる。

「最終防衛線」

「しのぶさん…虎咲さんのあはれは…」

一人の少女が虎咲の戦闘を見て絶句する。

「虎咲は自分の記憶を基に技を出せるんです。たとえそれが鬼の血気術だろうと」

「自分が使えると思った技は使えるということですか…」

「戦場」

「さあ…時計を見ればまだまだ日は昇らない。」

「だけど負けかけているときた、お前上弦ノ式だろ？」

「クソ野郎だね、君は！」

―血気術、霧氷・睡蓮菩薩―

菩薩のような氷像が現れ虎咲に殴りかかる。虎咲は口を細めて笑う。

―似の呼吸、弐ノ型 破壊殺・滅式改―

とてつもない疾さで弾幕が放たれ、

氷でできた菩薩像をいとも簡単に破壊する。

―翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼・延―

制限時間が戦闘時間に比べて短い為虎傳翼の延命技。

持続時間が延びるが、使い終わると足に相当な負担がかかる。

壊ノ型と同じく最終局面以外の使用は控えた方がいいだろう。

「は？何故だ…」

「さあ童磨。とつととくたばれ、クソ野郎」

―翼の呼吸、弐ノ型、全翼無連・避人建―

避けられようのない弾幕が放たれ、童磨に向けて飛翔する。

その場にいた誰もが勝利を確信したその時だった。

ベントツという三味線の音と共に童磨が消えた。

「またかよ……クソ野郎が……」

虎咲は刀を鞘に戻して呟く、既に日は昇り始めていた。

く無限城く

（何だ？上弦だけが集められたのか？）

上弦ノ参の猗窩座は無限城に集められた鬼達を見て

上弦の鬼達が集められていることに気付く。

奥からある男が出てきた。鬼の始祖、鬼舞辻無惨である。

「平伏せよ、今回はある鬼狩りの柱の事で貴様らを集めた」

（ある鬼狩りの柱……虎咲か……）

猗窩座は即座に虎咲を思い出した、彼も一度虎咲に敗れていた。

「童磨と猗窩座は知っているとと思うが、そいつはかなりの異端児だ。」

我々の血気術を模倣して使用する。人間とは思えない力を有している」

上弦ノ肆、上弦ノ伍、上弦ノ陸は驚きを隠せずに声を漏らしたが、

すぐに口を塞いで黙りこくる。

「私が一人の人間ごときを警戒しているのは理由がある、童磨」

「はい、奴は猗窩座殿の血気術、

破壊殺・滅式を使用して俺を追い込みました。

奴の模倣には限度がありません、

下手をすれば黒死牟殿の月の呼吸さえも模倣して使用するでしょう」

上弦ノ壱、黒死牟は童磨に言われても真顔を突き通すが、

少し焦りが出ていたのも事実である。

「…私の呼吸も使用できるといふのか…」

「確か奴の模倣には重大な欠点があるはずだっただんな？ 猗窩座」

「はい、奴は血気術をその目で捉えない限り模倣はできません。

そして模倣にとつもない時間を有し、

その戦闘中に目撃した血気術を使用する事はできません」

「だが奴には物理攻撃が効かないようだ、毒による攻撃が有効だろう。

妓夫太郎、お前なら奴を…異端児を葬れるはずだ」

「御意」

「鳴女」

ベントツという三味線の音と共に無限城には無惨と鳴女しかいなくなる。

「必ず葬る…世界の異端児が…」

無惨は苦虫を噛み潰したような顔で一人呟き、無限城を出たのだった。

第貳拾肆話 修復と毒

〔第二清水町〕

「いや〜まさかここまで派手にやるとはねえ…戸山さん」

「すいません、多分戦闘があつたらその都度頼むかもしれませんが…」

虎咲と棟梁のリーダーである佐藤が要塞から街を眺める。

〔第一防衛線東部の作り直し、第二防衛線の強化、

第三防衛線の組成し直し、地下トンネルの崩落修復その他諸々…〕

「こりやあ建造した時よりも時間かかりますが…いいですね?」

佐藤は虎咲に再確認し、許可を乞う。

「いいですよ、次はもつと強力な奴が来ると思うので」

「ははは! 人気ですね、この街は!」

佐藤は冗談を飛ばして盛大に笑う。虎咲もそれに釣られて笑った。

「そうですね。まあ、何とかありますよ」

「では、私は現場指揮に行きます」

「お願いします、佐藤さん」

佐藤が現場指揮に向ったのを見送り、虎咲は刀鍛冶の里へと歩み始めた。
　　「刀鍛冶の里」

「鐵火山さん、機関銃の改良と増産、装置の改良をお願いします」

「お、また改造か。どこを改造すればいいんだ？」

鐵火山はだいぶ食い気味で虎咲に聞く。

ひよつとこの面から見えるその目は輝いていた。

「簡単に言えば、耐雪耐寒ですね」

「機関銃もかい？うっし、やってやんよ」

鐵火山は腕をまくりやる気満々だ。

「改造中はこの予備を使いな、性能も同じ奴だ」

虎咲は鐵火山から予備の立体機動装置を受け取り一礼する。

「そういえば今日はあの二人はいないんだな」

鐵火山はこの前の二人、しのぶと真菰がない事に気付く。

「あの二人？」

「アンタの嫁さん達」

「え？ああ…あの二人なら今屋敷にいますか？…どうしてですか？」

「いや、聞いたかったです」

鐵火山は作業台に向かい、作業を始める。

「じゃあ、よろしくお願いします」

虎咲は一礼して刀鍛冶の里を後にした。

「カー！カー！伝令イ！柱合会議ヲ執り行ウ！至急産屋敷邸ニ集合オオ！」
「後藤さん」

「御意」

後藤と呼ばれた隠は、虎咲を担いで産屋敷邸に向かう。

もつとも、最終的に虎咲を産屋敷邸に送り届けるのは後藤ではないのだが。

（産屋敷邸）

「やあ私の可愛い子供達、今日もみんなの顔を見て嬉しいよ」

輝哉からの話は三つ。

一つ目は鳴柱が今日限りで引退すること。

二つ目は柱と同じ地位の部隊をもう一つ作ること。

三つ目は第二清水町の成果報告だった。

「部隊の大部分は虎咲の同期だけど…」

輝哉が爆弾を投下する。虎咲はキョトンとした顔で輝哉に聞く。

「え、あいつらですか」

「そうだね、まあ彼らなら問題無いよ」

出てきていいよと輝哉が屋敷の奥に声をかける。

御意と言いながら出てきたのは、

虎咲の同期である真菰、水葉、陽菜、太一。そして一期上の風華であった。

「やっぱお前らか…」

「何だ？俺ら以外にいますとも思ったのか？」

太一はまんざらでもないような顔で虎咲に問いかける。

「私達だってやれる。虎咲、もう一人で突っ走らなくてもいいんだよ」

真菰は微笑みながら虎咲に言う、既に彼らは戦う準備はできているようだ。

「わかったよ…もう一人で戦うのはやめるよ」

この新部隊は柱と同等の力を持つ者達として、

鬼から人を護るといふ想いを込めて、護柱隊という名前が付けられた。

五ヶ月が経つただろうか。

第二清水町も目立った鬼の襲撃は無く、修復も大詰めに入っている。

この世界に来て既に一年半という時間が経っている。

「順調ですね、このままなら工期を守れます」

「ありがとうございます、佐藤さん。まあまた壊されるかもしれませんかね」

今の虎咲は翼柱という肩書きの他に、

護柱隊長という肩書きを持っていた。

「いいってことですよ、改装なら任してください！」

「ありがとうございます」

虎咲は第二清水町を後にした。

久しぶりの日が変わる前の帰宅である。

く蝶屋敷く

「もうみんな寝てるよな…」

虎咲は靴を脱いで玄関に上がる。

そこで虎咲は気づいた。しのぶの部屋の明かりが付いている事に。

「つたく…寝る時ぐらい電気消しとけて…っ！」

虎咲は見た、しのぶが藤の花の毒を飲んでいる事に。

藤の花の毒自体人体に影響は無いのだが、

何故摂取しているのかは謎だった。

虎咲は我慢出来ずにしのぶに声を掛けてしまう。

「しのぶ…」

「つ！お帰りなさい、何ですか？」

しのぶは大慌てで藤の花の毒を隠し、何も無かったかのように返事する。

しかし、虎咲の目はしっかりと紫色の藤の花の毒を見てしまった。

「隠しても無駄だ、藤の花の毒を食った理由は何だ？」

「う…分かりました…話します…」

虎咲の冷酷な目に耐えきれずにしのぶは訳を話す。

「半年前から摂取し続けてきた藤の毒です。」

私は鬼の首が切れない、だから毒を使います。

しかし私の刀が一度に打ち込めるのは50ミリ、

あと半年もすれば私の体全体が藤の毒で満たされる。

その時に私が喰われれば、その鬼に入る毒の量は私の体重37キロ分。

致死量の約700倍です」

「自分を喰わせて相手も道連れ…か、その鬼にとって言ってるが

完全の上弦ノ式対策だろ？さっきの毒見せてくれ」

「はい…え？は？」

しのぶは虎咲の行動が理解できずにいた、虎咲は藤の毒をかじったのだ。

「ちよつと！何やってるんですか！」

「見ての通りだ。しのぶよりは毒の純度が落ちるだろうが、

俺も命を捨てる覚悟を決めている。

柱合会議で言っただろう？もう一人で戦わないって」

虎咲は藤の毒を平らげ手をパンパンと払い、

何食わぬ顔でしのぶの部屋を出て行ったのだった。

「ええ…もう死なせませんから…」

しのぶは一人呟き部屋の扉を閉じたのだった。

第貳拾伍話 那田蜘蛛山

「カー！カー！護柱隊二通達ウ！」

那田蜘蛛山へ向カイ威力偵察ヲ行エエ！遭遇シタ場合戦闘モ許ス！

負傷ハ許スガ死亡ハ許サン！」

那田蜘蛛山、既に何十人も隊士が行方不明となっている山。

十二鬼月が存在する可能性が高く、

その調査のために護柱隊を向かわせるとの事。

既に太一と水葉が先に山に向かっているが、

未だに鬼の情報はまだ無い。

「じゃあ、行ってくる」

虎咲、真菰、陽菜、風華が蝶屋敷の門の前に立つ。

「ええ、恐らく私も後から行くでしょう。その時まで持ち堪えてください」

「何だ、俺が死にかけるって言ってんのか」

虎咲は不機嫌そうにししのぶを見る。

「実際、虎咲君何回も死にかけてるでしょ」

青年隊士はそれ以上言葉を発する事もなく、山の奥へ消えていった。その後に残ったのは、三人と風になびく木々の音だけだった。

く 那田蜘蛛山西部く

既に山に入った虎咲と真菰は、西側から警戒にあたった。

「なあ真菰、なんかおかしくないか？」

「虎咲もそう思う？ おかしいよね。」

鬼がいないのに隊士が行方不明になるなんて」

虎咲は何かに気づいたように抜刀する。

「こういう風の上に隠れてる奴がいるからか」

ー 翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連ー

虎咲は真上に弾幕を放ち、その場に立ち続ける。

しばらく経って落ちてきたのは、

木の枝と驚いた顔で固まった女の鬼の首だった。

「何で…：わかったの…：」

「殺気だ、それを隠せなければ自分が死ぬ。覚えとけ」

「殺気…：ね…：まあいいわ…：私は死ぬから…：」

鬼はそう言い残しこの世を去った。

「ねえ虎咲！」

先行していた真菰が虎咲を呼ぶ。

真菰が指差す先には人の大ききはある繭だった。

その繭に何が入っているかははみ出ている刀の鞘で分かる。

「あの鬼がやったのか……そりゃあ大勢行方不明になるわな」

真菰はいつの間にか繭に向かって合掌している。

虎咲もそれに合わせて繭に一礼し、その場を後にしようとする。

「真菰もう行くぞ、俺達の仕事は死体回収ではない。だから」

虎咲はそこで一回言葉に詰まるが、そのまま言葉を続ける。

「繭を吹き飛ばそうとするんじゃないやありません」

そこには一心不乱に繭を斬ろうとしていた真菰がいた。

「やつぱダメか、あんまり強く斬っちゃうと」

中の死体も斬っちゃうかもしれないからなあ」

「まあそこは隠の人達に任せよう、俺らの仕事じゃない」

「そうだね」

二人はさらに山の奥へ向かう。

そこには箱を背負った少年と、猪の頭を被った少年が何かと戦っていた。

その相手は、何かに操られているような鬼殺隊士が数名だった。虎咲と真菰は瞬時に抜刀、

二人は何かに操られている隊士に目掛けて突入する。

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼―

―水の呼吸、壱ノ型 水面斬り―

「クソツ！何だこの状況は！」

「落ち着いて虎咲、操られているようにしか見えないから鬼の仕業だね」

比較的落ち着いている真菰は、一人の女性隊士に声をかける。

「貴女、名前は？」

「尾崎です…それよりも早く逃げて！みんな殺してしまう前に！」

尾崎が刀を横に振るうが、真菰は仰け反って回避。

「うっわ危ない」

「階級が上の人を連れてきて！早く！」

尾崎の腕があり得ない方向に曲げられ、

ゴキツという音と共に尾崎が悶える。

「あうっ」

「もう大丈夫よ、虎咲！背中を！」

「ああ！わかった！」

一翼の呼吸、式ノ型 全翼無連・避人一

無数の弾幕が尾崎達に向かつて飛翔するが、

その弾幕に人を傷つけることはできない。

糸が切れたように尾崎達が倒れ、真菰に抱えられる。

「真菰、下山して隠に引き渡せ。その後は蝶屋敷に直行だ」

虎咲に催促されて真菰は尾崎ら三人を抱えて下山しようとする。

「わかったわ、炭治郎君によろしく」

「え？誰だつて？」

「あの箱を背負つた子よ、私の弟弟子」

「ああ、わかった」

真菰はそのまま虎咲の元を離れ、一直線に下山する。

「真菰さんつていうんですね、強い方でよかったです」

尾崎は真菰の背中で礼を言う、真菰はここである事を伝える。

「ねえ尾崎さん、護柱隊つて知ってる？」

「いえ、知りませんが…何ですかそれは」

「私達が所属しているんですけど…」

簡単に言うならなら柱と同等の隊士を集めた部隊かな」

それを聞いた時、尾崎の顔は固まった。

「それってつまり：真菰さんって柱なんですか？」

「まあね、護柱隊は私の他に五人。」

さっきの虎咲は護柱隊長兼翼柱なの」

「もう柱が来たって事でいいですか？」

「うん、難しいと思うからそれでいいよ。」

もう喋らない方がいいと思う、傷に響くよ」

「お気遣いありがとうございます」

その後尾崎は意識を放棄し、次起きたのは一週間後であった。

く 那田蜘蛛山く

「あー鱗滝さんの弟子の炭治郎って君かい？」

「そうです！階級癸の竈門炭治郎です！」

(元氣いいな)

虎咲は炭治郎から視線を横に動かす。

「で、その猪は？」

「嘴平伊之助だ！お前は何者だ緑野郎！」

(お、ぶつきらぼうな野郎だな)

「翼柱、森岡虎咲だ」

「こさくく？小作人か？」

「違えわ猪、全国の小作人に謝ってこい。虎に咲くで虎咲だ」
虎と聞いて伊之助が少し怯むが、すぐに立て直す。

「俺はもつと上の警戒をしてくる。お前らもしっかり戦えよ」

「森岡さん！ありがとうございます！」

虎咲は炭治郎に手を振って応えた。

く産屋敷邸く

「そうか、お疲れ様。もう下がっていいよ、太一、水葉」

「御意」

報告が終わった二人は産屋敷邸を後にした。

「どうやら十二鬼月がいるのは本当みたいだ、

柱を行かせなくてはならないようだ。義勇、しのぶ」

「御意」

暗闇の中に、二人の柱が鎮座している。

片方は微笑みながら、もう片方は真顔のまま輝哉の

「人も鬼もみんな仲良くすればいいって姉が言っていたんですけどねえ……」
「……無理な話だろう、鬼が人を喰らう限り」

義勇の反応にしのぶは驚き、彼女は義勇の地雷を踏み抜く質問を問いかけた。
「あれ？ 珍しくしつかり話せてますね。」

姉に何か言われましたか？」

その問いに義勇は遠い目をしながら呟く。

「……昨日の早朝に女性の体というものを叩き込まれた」

「それは……災難でしたね……」

しのぶは同情する。

しかしながら忘れてはならない。

コイツも虎咲にほぼ同じような事をしでかしている事を。

那田蜘蛛山での戦闘は、刻一刻と近づいている。

第貳拾陸話 裁判と破壊

↳ 那田蜘蛛山頂上付近

「おるやん……」

（あんにやろお……報告ぐらいこなせよ……）

虎咲は絶句する。

報告によれば彼らが通過した西部に鬼が集中していると鴉が言っていた。

しかし、実際に鬼がいたのは那田蜘蛛山のほぼ頂上。

虎咲は装置を寒冷地仕様にしておいて良かったと心から思った。

「どうしたの？君。早く逃げないと殺しちゃうよ？下弦ノ伍の僕が」

「え、俺を殺せると思ってんの？マジで？」

（何だコイツ）

下弦ノ伍、累は訳の分からない人間が現れたと心底驚いたそうだ。

↳ 無限城

無惨は童磨が追い返されてから十二鬼月全員の視界を確認し、

虎咲が今どこにいるのかを確認しようとしていた。

今日も下弦ノ陸から順に視界を確認していた時だった。

(あ?コイツは…ヤツか…)

無惨は累の視界から虎咲の姿を捉えた。

上弦ですら勝てないヤツに累が勝てるはずねえと

言いながら無惨は累の視界を放棄し、鳴女に任務を与える。

「鳴女、今からでも遅くない。累を回収しろ」

「御意」

「あと十二鬼月全員もだ」

「…御意」

く 那田蜘蛛山く

ベントツという三味線の音と共に累が那田蜘蛛山から消える。

「おう…またか…」

(これ中どうなっているんだ…?)

虎咲は累が落ちていくのを見ながら立体機動で襖の中に降りていった。

く 無限城く

「累、お前はヤツと戦っても勝てる見込みは零に等しい。

少なくともお前が戦っていいような奴ではない」

「ぎよ、御意……申し訳ありません無惨様」

累は頭を目一杯下げて詫びる。

「仕方ない、アレは無理だろう。上弦だって無理なのだから」

無惨は上弦の方を見る。その直後、背中の毛が一気に逆立つのがわかった。

「っ！無惨様！」

猗窩座が無惨を突き飛ばす、その無惨の目の前を刀が通過する。

「何故だ!?何故貴様がここににいる！森岡虎咲!!」

無惨は後ろに仁王立ちしている虎咲を睨みつけるが、

虎咲もそれに負けじと睨み返す。

「鳴女！ヤツをここから叩き出せ！」

「ぎよ、御意！」

鳴女は焦った様子で三味線を奏でる。

ベントツという三味線の音と共に虎咲が地上に吹き飛ばされる。

黒死牟と童磨が、空中に舞った虎咲に向かって技を放つ。

―血気術、結晶ノ御子―

―全集中・月の呼吸、式ノ型 珠華ノ弄月―

虎咲はこれらの技を全て全翼無連で迎撃し、

何かを思いついたようにほくそ笑む。

「コレは修復が大変だな」

― 似の呼吸、肆ノ型、圧縮窒素・改―

虎咲は両方の刃を無限城に向かって切り離し、引き金を引く。

二本の刃を中心に大爆発が起こり、

下弦ノ陸から下弦ノ弐を巻き込んで消滅させた。

下弦とはいえ十二鬼月、無惨が直轄する鬼の中の精鋭達。

それを一気に五体も消し去った虎咲は無惨は素直にこう言う。

「化け物が……」

無惨は虎咲を化け物呼ばわりするが、虎咲は気にしない。

虎咲は、去りに際にかう言ったという。

「お前にだけは言われたくないな」

く産屋敷邸く

虎咲が無惨の根城である無限城と十二鬼月を滅茶苦茶にしていた頃、

産屋敷邸では竈門炭治郎が鬼になった妹の禰豆子を連れていたため

産屋敷邸に連行され、裁判にかけられていた。

炭治郎は「禰豆子は人を喰ったことが無い！」と言い放ったが、

逆にその言葉が風柱の実弥の逆鱗に触れて会議は荒れ狂う。

だが現れた輝哉の一言で、荒れていた柱達は少し落ち着いた。

そこでお館様の隣にいた白髪の少女がある手紙を読み上げる。

その手紙には、

・禰豆子は飢餓状態にも関わらず二年以上も人を喰っていない。

・もしも禰豆子が人に襲い掛かった場合、

竈門炭治郎及び鱗滝左近次、鱗滝真菰、富岡義勇が

腹を切って責任を取る。

という二つの内容が書き記されていた。

だが、実弥と杏寿郎はどうしても納得出来なかつた。

「…切腹するから何というのだ。」

虎咲には悪いが死にたいなら勝手に死に腐れよオ!

何の保証にもなりません!」

「不死川の言う通りです!人を喰い殺せば取り返しがつかない!

殺された人はもう二度と戻らない!」

輝哉は頷きながら二人の話を聞いてこう答える。

「そうだね、確かに人を襲わないという保証の証明にはならない。」

「だけどね、人を襲うという証明にもならない」

その言葉に二人はハツとする。

「禰豆子が一年以上も人を喰っていないという事実があり、

禰豆子の為に三人の命が懸けられている。

それを否定するには、

勿論否定する側もそれ相応の物を差し出さなければならぬ」

輝哉は何かを含んだように微笑みながら二人に語りかける。

「……」

「……」

実弥は納得出来ないかのように歯軋りするが、

杏寿郎は渋々納得した様子で頷く。

「まあ柱一人居ない状態で柱合会議なんてやっちゃいけないけどね、

しかもこんなに重要な議題だし」

輝哉は笑ってそう言う。

そう、翼柱である森岡虎咲が産屋敷邸に居ないのだ。

「そういえばそうだ。おい胡蝶、森岡は今どこにいるんだ」

伊黒が思い出したようにしのぶに絡む。

「虎咲ですか？まだ那田蜘蛛山から帰ってきてきてませんか」

「それはそうだろう、だって今来るんだから」

輝哉は何かを予知したかのように語る。

産屋敷邸の庭に三味線の音が響く。

柱、護柱隊、産屋敷家一同、そして炭治郎と隠が音がした方向を見る。

そこに地面から襖が現れ、中から人が放り出される。

その人物は重力に従って背中から砂利の上に落ちる。

「おーい虎咲、生きてるかいい？」

輝哉が声をかける。

そう、襖から出てきたのは翼柱である虎咲であった。

「オイ虎咲！柱合会議を行うってお館様が言っていたのに

何処ほつつき歩いてた！」

実弥が虎咲に突つかかる。

だがその問いの答えに顔を青くする。

「無惨の根城を無茶苦茶にしてきた」

「は？」

「無惨の根城を無茶苦茶にしてきた」

「イヤ、それはわかるが……は？」

実弥と伊黒の思考回路が停止した。

「まさか根城を無茶苦茶にするとはねえ……相変わらず君には驚かされるよ」
輝哉はやれやれという顔で虎咲を見る。

だが炭治郎は一体何が起こったのかわかっていなかった。

「後藤さん、何が起こったんですか？」

「俺に聞いても分かるわけないだろ」

二人は目の前で何が起きているのか理解できないまま、
困惑に染まった柱一同や護柱隊を眺めていたのだった。

第貳拾漆話 戦果報告と愚痴

事の顛末を聞いた虎咲。

鱗滝さんからの手紙を輝哉が呼び上げたところで真菰を睨み、

口パクで真菰に「覚えてろよ」と伝えて普通の目になる。

「どうかかな？君も了承してくれる？」

「まあ…別にいいですけど…」

輝哉が安堵したように胸を撫で下ろす。

「よかった、もし仮に虎咲が反対していたら

実弥が首を斬り落としてたかもしれないからね」

「ヤツの早とちりは周知の通りですよね。

流石のお館様も止められませんでしたか…」

虎咲は冷めた目で実弥を見る、実弥は気まずそうにどこかの山の方を向く。

「おい、お前露骨すぎるぞ実弥。

早とちりしたんだな？そうなんだろう？」

「うっせエー！」

実弥はぶつきらぼうに返し、それ以後口を開かなかつた。

「さあ、本来の目的である柱合会議を始めようか」

輝哉は微笑みながら柱や護柱隊に語りかける。

「じゃあ竈門君は私達の屋敷でお預かり致しましょう！」

しのぶがいきなり声を張り上げて手をあげる。

「え？」

炭治郎は「何を言っただこの人は」という顔をしていたが、

虎咲も同じような顔をしていた。

だが有無を言わずさずという感じで隠が炭治郎を搔つ攫い、

炭治郎は直行で蝶屋敷へと連行されたのだ。

その時、輝哉と炭治郎が何か言っていたが他の人には聞こえなかつた。

「さあ虎咲、詳しい事を教えてくれないかい？」

何故無惨の根城の攻め込めたのかな？」

輝哉の目線が虎咲に突き刺さり、虎咲は「ウツ…」という呻き声を上げる。

そこで誤魔化すことに限界を感じた虎咲は、

吹っ切れたように全てを語り出した。

「なるほど…敵の逃亡に紛れてついでに行ったら

何故かそこに無惨や十二鬼月がいて、

何故かバレなくて無惨の上に待機していたらバレて、

何故か目の敵にされていて攻撃されちゃって、

報復として根城と下弦五体を消し去ったわけだね？」

全てを理解し確認するように輝哉は虎咲に問いかける。

「はい…仰るとおりです…」

虎咲は反論する気も失せ、ただ返事を返すだけの人形と化した。

「もう答える気も失せてるだろうから次の議題に行くよ。」

護柱隊に二人の隊士を迎える事にした。出ておいで」

そう促されて屋敷の奥から出てきたのは、

第二清水町の防衛を担っていたあずさと兎珠だった。

「お前達か…前々から才能はあると思っていたがな…」

まさかここまで来るとは…」

「虎咲さん、いくら新人から這い上がってきたからって

舐めないでいただきたいですね」

「まあこれからも第二清水町防衛なので大して任務は変わりませんよ。

まあ虎咲さんの配下ですからね」

二人はあの採用時と同じ目で虎咲をしつかりと見つめ、輝哉の方向を見る。輝哉は満足そうに微笑む。

「じゃあ紹介終わったところで……今日は解散にするよ。

みんな、集まってくれてありがとうね」

「御意」

では、解散と言いながら輝哉が手を叩いたと同時に全員が立ち上がり、

帰宅への道を歩み始めるが、音柱、宇髄天元と蛇柱の伊黒小芭内が声を上げた。

二人は他の柱に向かって口を開く。

「今回の戦いで判明した事がある。

下級隊士の質が信じられないくらい低い」

「まず育手の目が塵だな。

才能があるヤツとないヤツの見分けすら出来ないヤツが多すぎる」

二人は容赦無く今この場にはいない下級隊士の愚痴を垂れ流す。

虎咲も便乗して愚痴を言い出した。

「それはそうだな。第二清水町用の最終選別で生き残った奴らを見て悟った。

こいつらは出世の事しか考えてないのかという奴が少なからずいた。

『このまま行けば柱なんてすぐだぜ』と抜かしていた奴もいた。

まあ俺と実弥の鍛錬を見せつけたら全員そういうのは言わなくなつたな。

しかしまああの炭治郎って奴はなかなか良い才能を持つてるんじゃないか？

さっきの話を聞くとどんな形であれ実弥に一撃入れたんだろ？」

「…だが俺はヤツが気にいらねエ。あの鬼の禰豆子つてヤツもだア。

あの時は兄の叫びで我慢したつてのもあるがいつか絶対人を喰うぜ？だから俺

は信用ならん」

「俺もだ。アイツは一言一言が癩に触る。

だから俺はあの時言つたんだ、アイツを斬るべきだつてな」

実弥も小芭内もやはり炭治郎の事を信用しておらず、

相変わらずの刺々しい物言いで愚痴る。

「でもあの少年！なかなかの精神の持ち主だな！

柱に囲まれても尚自らの意見を通そうとする姿勢は立派だった！

溝口少年だったか！俺の弟子にしてやりたい！」

炎柱、煉獄杏寿郎が炭治郎を称賛する。

しかし、彼は炭治郎の苗字を間違えている。これを見逃す虎咲ではない。

「煉獄さん、溝口ではなくて竈門です」

杏寿郎が言い終わった瞬間に虎咲が訂正し、

杏寿郎は少し考えた後にまた大声で話し始める。

「そうか竈門少年か！彼にはまたいつか後で謝っておこう！」

「もうあんな奴が柱合会議に招集されなければいいがな」

毎回毎回酷くなつていく小芭内の悪口で今回の柱合会議はお開きとなった。

〜蝶屋敷〜

思えば柱や護柱隊の各々で、蝶屋敷に住んでいるのは六名。

そしてほぼ居候をしている太一、あずき、兎珠を足すと計九名。

柱合会議が終わり全員が帰宅すると、

蝶屋敷の前には九人が集まり騒ぎまくつて

しのぶとアオイに怒られるという光景がよく見られる。

しかし今回は違った、陽菜が少し足早に玄関を通つて自室に向かう。

そこである少年の隊士とすれ違う。そう、ヘタレ代表の我妻善逸である。

「ええ!?!陽菜ちゃん!?!どうしたのこんな所に来て!」

あ!もしかして俺が心配になつて来てくれたの!?

ああもう結婚して「うるさい黙れ」え?!

普段の陽菜からは想像出来ない暴言が飛び出す。

普段なら黒いはずの瞳も濃い赤に染まっている。

「私はアンタを見ると思い出すのよ、師範を。」

アンタは連想しないの？私を見て師範を思い出さないの？」

「…」

善逸は黙りこくる、陽菜と会った瞬間から

確かに自分の師匠の姿が重なって見えた。

だが、陽菜が言っていることは理解出来なかった。

(俺がああらしいちゃんと同じ?)

善逸はこう言った、兄弟子の獺岳に罵られたときのように。

「俺は壱ノ型しか使えない雑魚だ、じいちゃんと同じじゃない」

善逸は卑屈そうに言っつて顔を俯かせる。

その行動に陽菜は本気でキレ始めた。

「つーアンタは確かに師範と違つてた！」

だけど私は！アンタが一番期待されていると思つてた！

獺岳に何言われたか知らないけどそんなんでアンタはめげないでしょ！

善逸の胸倉を掴んで持ち上げる。

そこをアオイが止めるが、既に陽菜は耳を傾けていない。

「俺は壱ノ型しか使えない雑魚！それだけは揺るぎない事実だ！」

何でアンタは理解してくれないんだ!!」

「そんなに卑屈になることはない!」

師匠は私じゃなくてそんなアンタ達を後継だと言ったんだ!

壱ノ型だけ極めたアンタと壱ノ型以外極めた獺岳をだ!

卑屈になるんだったら!父さんに謝れ!!今すぐに謝れ!!」

陽菜は叫ぶ。その言葉に善逸は驚くが、すぐに意識が削がれる。

陽菜と善逸は気を失って床に崩れ落ちる。

その奥には虎咲が立っていた。

「つたく…弟子喧嘩をここにすんなよ…ここは病院だ。

一回冷静になれ、お前ら」

虎咲は二人を抱えて病室に運ぶ。

アオイが代わると言っていたが、虎咲は運び続ける事をやめなかった。

く虎咲の部屋く

すっかり腕が上がらなくなった虎咲、

人を二人玄関から抱えて持って来たから腕なんか上がる訳ないと

彼は自己解決を行った。

「他の柱よりは腕の力が無いんですから…」

何で無理したんですか……？」

「お前よりはマシじゃ。」

自分を過信してたみたいだ、最近銃撃つてなかったしな」

果たして関係性があるのかと思つたしのぶだったが、

大した追及もせず、虎咲の横に座る。

「虎咲は認めたんですね、竈門君が彌豆子さんを連れていたこと」

虎咲は今日の柱合会議にいた少年を思い出す。

彼は恐らく他人を騙すことが出来ない真つ直ぐな少年だ。

「まあ、危害が無いならそれに越したことは無いしな」

「まあ……そうですね……」

しのぶは納得出来なさそうに顔を俯かせて考える。

「でも、私は鬼が憎いです。」

姉を傷つけ、虎咲を死の一步手前まで追い詰め、

家族を殺した鬼を絶対に許しません」

「まあ、そう思うわな」

しばらく間を置いて虎咲はこう言い放つ。

「……………俺もだ」

番外編

え？最近カナエが行方不明だつて？

あくカナエなら義勇の屋敷に居候しているんだよ。

義勇が追い返しても結局帰ってくるから義勇は半ば諦めている。

前の話でも話してたけど義勇は寝起きを逆襲（意味深）されるので日に日に目から生気が無くなっている。

（え？元から目に生気なんか無いって？ちよつとおま…天才かよ）

まあそんなこんなでカナエの近況報告でした。

え？何？未だに出番が少ない奴いるって？

そりゃあオリキヤラ多いし仕方ないと思います。

あー待つて下さいその刀は鬼に向ける物であつて人に向ける物じゃ無いですyああああああ!!!

第貳拾捌話 久しぶりの休暇

「森岡さん、本当にいいんですか？」

「いいんです佐藤さん、最終決戦のためですから」

輝哉の予知によると、この半年間に千年間続いた鬼との戦いに終わる日が来るという情報が先の柱合会議によつて知らされた。

大まかなは未だ不明だが、用意するに越したことはないと思はれ、虎咲は考え、最終決戦の場に第二清水町を提案した。

今、第二清水町は最終決戦に向けて民間人を清水町に移し、町の至る所全てに13・2mm機関銃を設置していた。

さらにはどう再現したのだろうか、

ヒトラーの電動ノコギリの異名を持つMG42が設置された。

「まさかねえ……ここまで大胆な計画になるとは思いませんでしたよ……」

「俺も思っていますでした、」

まさかただの金の浪費のほがここまですごい計画になるとは……いつの日かと同じ要塞に立ち、町の作業進度を眺める。

「しかしこれも全て鬼をこの世から消し去るため、

そのためなら金も時間もかかっても構いません」

虎咲の目には、明らかに決意の光が宿っていた。

その光を見た佐藤は、ある事を聞く。

「たとえ命を投げ捨てても……ですか？」

「はい、未来の人達にこの苦しみを与えたくないんでね」

彼らの目は第二清水町だけでは無く、

遠くの未来をも見据えているのかもしれない。

しかし約九十年後、遠い未来のことだが

この街が再び戦いに引つ張り出されるとは誰が考えただろうか。

だが、それはまた別の話である。

「もう行きます、では」

「はい、森岡さん」

虎咲は蝶屋敷に向かい走る。

佐藤はその後ろ姿を見てこう思った。

（あの人は……一体どれだけの覚悟を背負って戦っているのだろうか……）

（蝶屋敷）

虎咲に止められ氣を失つていた陽菜と善逸。

その二人を、水葉と炭治郎が横で見ている。

「天童さん……知つてましたか？善逸が安中さんと同門だつて……」

「知らなかつたよ……。そういえば陽菜は私達同期でさえも

自分の師匠の事を話そうとしなかつた。

何か忘れたい事情があつたんだろうね……」

「そうですか……」

水葉は再び氣を失つたままの陽菜に目を戻す。

（桑島一門に何があつたか調べるべきね……）

その後、やつて来た虎咲とすれ違うようにして水葉は病室を去つた。

「あ、虎咲さん。天童さんはどうしたんでしょうか……」

炭治郎と虎咲は、足早に病室を去つた水葉を見る。

少なくとも今の彼女は誰にも止める事ができないだろう。

「まあ、アイツは大丈夫だろう。」

で、善逸と陽菜はまだ起きないのか……」

虎咲は自分が氣を失わせた二人を見て呟く。

「善逸は大丈夫ですよ。今は毒で体が縮んでいますよ、

毒で倒れるような奴ではないですから」

「まあ安中だつて腐つても柱だからなあ……」

ため息と共に煽り文句が飛び出す。

それに触発されたように陽菜が起き上がる。

「何……？ 虎咲君……喧嘩売つてんの……？」

「いや……売つてない……。起きたのか……」

ムクつと立ち上がった陽菜は、虎咲を見て口を開く。

「虎咲君のおかげで冷静になれた、ありがとう。」

でもね、私はやっぱり変わらないみたい」

陽菜はそう言つて病室を後にする。

アオイが驚くも、止めるということとはしなかった。

く清水町く

水葉は一人、清水町でブラブラ歩きながら

桑島一門について書かれた新聞や書物がないか探していた。

だが、桑島慈吾朗も鬼殺隊の元柱。

桑島慈吾朗のその後、ましてや鬼殺隊について書かれた書物が

ある訳もなく、ただ当ても無いまま彷徨い続けた。

(こういう時にも政府非公認っていうのは足枷になるのね……)

鬼殺隊は政府非公認。

刀を露出させれば警官に追いかけられるし、捕まればお縄。

まあ警官なんかの並みの人間に捕まるような隊士は

鬼に太刀打ち出来るとは到底思えないし、まず鬼を見て逃げるだろう。

「はあ……」

水葉は甘味屋の椅子に座つてため息を吐く。

だが聞こえてきたため息は二人分、

水葉は抜刀しようと背に手を伸ばしながらため息がした方向を見る。

「た、太一？」

「あ、水葉か」

太一が「いたんかお前」という顔をしていたので

殴つてやりたかつた水葉だが、流石に往来の前なのでそれはやめておいた。

「で、アンタは一体どうしてここに来たの？」

団子を啜えながら水葉は太一に聞く。

太一はさらに深いため息を吐きながらこう言った。

「聞いてくれよ……ついさつき起こつた出来事を……」

く水葉に出会う三分前。清水町中心部く

「おいオマエエ！やんのか!？」

「え、俺…ですか？」

太一は何故か道を歩く輩に怒鳴られ、首を掴まれる。

何とか警官が止めてくれたが、彼は最後まで睨まれっぱなしだった。

(何故だ、何故俺は毎回こうなんだ…)

太一は不幸体質である。

道を歩けば喧嘩を売られ、困惑している間にぶん殴られる。

最近呼吸のおかげで何とか避けていられるが、

不幸体質、その効果は屋内でも変わらない。

蝶屋敷の屋根板が急に落ちてきて、太一に直撃することはよくある。

アオイやすみは、

「またですか雫石さん！もう一步も動かない方がいいんじゃないんですか!？」

と言つて虎咲と同じように寝台に括り付けられたが、

今度は寝台のネジが緩んで崩落し、アオイ達はもう考える事を放棄した。

太一の記憶の中で一番酷かったのは、

自分が歩いていた時に、建築用の資材がいくつか身体に直撃した事だろうか。

くそして今に至るく

それを聞いた水葉は、割とガチで引いていた。

そして、太一がいる時にやたら屋敷を修理しなきゃいけない理由がわかった。

「おい……何で引くのさ……」

「いや、想像以上に状況が深刻だなあつて（棒）」

水葉は思つてなさそうに棒読みし、その場を立ち去ろうとする。

「そーいや何で水葉はここに來たの？」

「あー言つてなかつたね」

そして水葉は事の顛末を話す。

見る見るうちに太一の目が輝き、いきなり口を開いた。

「俺も行きたい！何か興味あるー！」

「ええ……（困惑）」

桑島一門を調べる会に太一が参加、

二人でお茶を啜つたところで甘味屋を後にした。

—————

く大正ココソコソ噂話く

虎咲はMG42を導入する時に、

引き金を引きつばなしにする輩を教育するため
一週間近く時間を取られちゃったんだ！

第貳拾玖話 無限列車

あれから色々ありながらも、

怪我から回復した炭治郎、善逸、伊之助は全集中・常中を会得。

そこに暇していた虎咲にある指令が下される。

無限列車という汽車で短期間に四十人以上が行方不明になっているとの情報があり、既に多くの隊士も行方不明になっている。

炎柱の煉獄杏寿郎と共同で調査に向かえとのこと。

とつくに日は沈み夜になり、鬼が活動を始める時間になっている。

鬼殺隊は、今夜も人々を鬼から守るために戦う。

「しかし柱で合同任務とはねえ…」

蝶屋敷の玄関で、虎咲は草履を履きながら愚痴を吐く。

「まあ頑張つて下さいね、虎咲。煉獄さんと共同で任務ですから

彼に振り回されたりするかもしれません」

「ええ…まじか。じゃあ行つてくるわ」

「いつてらっしやい、頑張つて下さいね」

しのぶは小さく手を振つて虎咲を送り出す。

虎咲の背中が見えなくなり、しのぶは蝶屋敷に入つていったのだった。

とある駅

駅に到着した虎咲は問題の汽車が到着するのを待つ。

既に先に来ていた汽車が発車し、客車も動いていく。

汽車が完全に地平線の向こうへと消えていった時に、虎咲はふと思つた。

(しかもなんだ無限列車って…普通の汽車と変わらないんじゃないか…?)

しかしその不安はすぐに払拭された。

次に駅に到着した汽車の前面には、

ごく丁寧にでつかく『無限』と書かれていたからである。

(露骨…分かりやすいな…)

列車が完全に停止し、虎咲は無限列車に乗り込む。

すると突然誰かに大きな声で呼ばれた。

「虎咲か！今日は俺と共同任務だ！共に頑張ろう！」

「は、はい…」

共同任務の相手である炎柱、煉獄杏寿朗だ。

しかし初っ端からの気迫に押され虎咲は少し後退りする。

「まあそう引くな！多分俺はこれからもこんぐらい声が出る！」

「まあ、馴れですね」

「よもやだ！」

耳に響く大声を列車一杯に上げた杏寿朗は、

通りかかった乗務員の女性に駅弁を頼む。

駅弁は駅で買うもんじゃないか？と思つたのは他の乗客もだろう。

しかしそんな事を気にしない杏寿朗は駅弁を購入し、蓋を開けて箸を取る。

「うまい！うまい！」

ものの数分で駅弁を平らげ、

また一つまた一つと空箱が隣の座席に積み上がる。

すると次の駅に停車し、見慣れた三人が車両に入ってくる。

「お、炭治郎か」

「虎咲さん！こんばんは！」

そう。怪我を蝶屋敷で療養し、機能回復訓練を受けて前線に帰ってきた三人だった。

「うまい！うまい！」

「この人が煉獄さんですか？煉獄さん——！」

聞く耳を持たない杏寿郎に炭治郎が問いかける。

しかし、駅弁に夢中になっている彼にその声が聞こえることはなかった。

「うまい！」

「あ、それは、もう本当に分かりましたから」

適当に流された杏寿郎は、「むう」と言いながら座席に座る。

なお、大量に積まれた空箱は乗務員の女性達によってドナドナされた。

「煉獄さん、聞きたいことがあるんですが」

炭治郎はある事について話始めた。

〜五分後〜

「そうか！だが俺はヒノカミ神楽なんて言葉も初耳だ！

君の父が舞っていた神楽が戦闘に応用できたというのは

めでたいがこの話はこれでお終いだな!!」

「え？あの…もう少し「俺の継子になれ！面倒を見てやろう！」……」

あまりに早く話を打ち切ろうとしていた杏寿郎を見て、炭治郎は驚き問い詰める。

「待ってください！ってかどこを見て喋っているんですか!?!」

さらに話を進め、呼吸の派生の話や刀の色の話になる。

その時善逸が小声で呟く、「おかしな人だな」と。

「善逸」

虎咲が善逸の名を呼んだ時、善逸は（怒られる！）と思ったが、虎咲の顔を見てその不安は消し飛んだ。

虎咲の顔は、「安心しろ、俺もだ」という顔だったからだ。

「溝口少年！刀の色は何色だ！」

「溝口!?!俺は竈門ですよ!?!」

名前を間違えられた炭治郎は、すかさず反論。

自分は黒色の刀だと杏寿朗に伝える。

「黒刀か！それはきついな！」

「え、そうなの？」

虎咲が声を出す。まず護柱隊のあずさも黒刀なのだ。

「ああ！黒刀の剣士が柱になったと聞いたことは無いし、

さらにどの呼吸を極めればいいかわからないと聞く！」

「初耳だな」

その言葉と同時に、無限列車が速度を上げ始める。

伊之助はビクツとなったが、虎咲は大して気にしなかった。

「俺の所で教えてあげよう！それで安心だ！」

(面倒見の良い人だな…)

炭治郎がそう思ったと同時に、伊之助が窓から体を乗り出して叫ぶ。

「うおおおお!!速ええええ!!」

「何やってんだ馬鹿野郎!!」

虎咲と善逸で伊之助を引つ張つて車内に入れようとするが、

伊之助は中々車内に入ってこようとしない。

「俺、外に出て競争する!!」

「馬鹿にも程があるだろ!」

善逸に罵倒されるも伊之助は車内に入らない。

「そう危険だ!いつ鬼が出るかわからないぞ!」

「え?」

杏寿郎の一言で善逸の顔が一気に青くなる。

「嘘でしょ鬼が出るんですか!?!この汽車!」

「善逸お前聞いてなかったのか、出るぞ」

善逸はそんな聞いてねえわ!!と吐き捨て、降車を懇願した。

だがこの汽車は既に速度も出ており、止まるのならば事故くらいだろう。

「少し連結部に行つてきます。風に当たりたい」

虎咲はそう言つて席を立つ。

「おう！鬼が出たら殺しても構わないぞ！」

「わかつてますよ」

そう言いながら、虎咲は連結部に向かう。

途中で車掌にすれ違うが、大して気にせず歩く。

く虎咲がいなくなつた直後く

「切符……拝見致します……」

未だに降車を懇願する善逸を他所に、車掌が切符を切りに杏寿郎の座席に向かう。

その時炭治郎は異変に気付いたが、それが何か分からずに眠つてしまふ。

杏寿郎、炭治郎、善逸、伊之助は魂を抜かれたように眠つてしまつた。

その瞬間、虎咲が車両に入る。

車掌は焦るが、虎咲は比較的優しい声で車掌に呼びかける。

「あなたが眠らせたんですか……」

「……」

車掌は持っていた錐でいつそ死んでしまおうかと考えてしまつたが、

虎咲は車掌にある頼み事をする。

「俺も眠らせてください、どうすれば寝れるんですか？」

「切符を切れば…」

車掌がそう言った時、虎咲は無言で座席に座り切符を差し出す。

「では拜見致します…」

車掌が切符を切った瞬間虎咲は静かに眠りにつく。

車掌がその場にへたり込み、何かに「これでよかったのか」と聞く。

「お疲れ様、では幸せの夢の中へ」

口が付いた鬼の手にそう言われた瞬間車掌はその場に倒れて眠ってしまう。

「あの…私達は…」

手の後ろから「人間の」少年少女達が現れ、手はそれに答える。

「もう少しで眠りが深くなる。それまでここで待ってて。」

鬼狩りは勘が鋭いから殺気や鬼の気配で起きてしまうかもしれない。

近付いて縄で繋ぐ時も体に触れないように気をつけて」

「はい…」

少年少女達の目には、光がない。全てに絶望している目だ。

「俺は暫くの間先頭車から離れられない。」

準備が整うまで時間稼ぎよろしくね。幸せな夢を見るために」

「はい…」

機関車の上に、ある青年が立っていた。

その青年の左目には、「下壺」と刻まれていた。

「幸せな夢を見ながら死ぬるなんてどんなに幸せなんだろうね。

どんなに強い鬼狩りだろうが関係ない。

人間の原動力は精神と心だ。

精神の核、それを破壊されればどんな人間でも生きる力を失う。

人間の心はもう硝子細工のように脆くて弱い。

さあ、君はこれに耐えられるかな？」

下弦唯一の生き残りである下弦ノ壺魘夢は、機関車の上で細く笑ったのだった。

「てかあの森岡って奴あの方に何したんだ？」

かなり狙われてるらしいけど」

虎咲は知らない。

この後あの因縁に再開する事など、この時の彼は知る由もない。

第參拾話 夢と現実

〜機関車上部〜

「楽しそうだね、幸せな夢を見始めたな。」

深い深い眠りだ、君達はもう二度と起き上がる事は出来ないよ」

魘夢は機関車の上で眩き、再び口角を上げる。

「それにしても…他の下弦を葬り去った鬼狩りも大した事なかったな。」

奴を殺せばあのお方から血を分けていただけ！夢見心地だ！」

そう言いながら魘夢は闇夜に向かって高く笑ったのだった。

〜虎咲の夢の中〜

虎咲はある夢を見ていた、家族が全員生きている夢だ。

「兄さん！お帰り！」

妹の夏が腕に入ってくる。しかし、虎咲自身はあまり良い気はしなかった。

（予想以上に気持ち悪い血気術を使いやがる…）

そうだ、全員死んだんだ。俺の家族は）

少なくとも今の虎咲は刀も持っておらず、立体機動装置も付けていない。

ただ唯一残ったのは、何故か猟銃として家に飾ってあつた

三八式と6・5mm弾一発のみだつた。

「虎咲、酒飲むか？」

「何でだよ父さん。俺はまだ未成年だつて」

（兎も角ここから現実に戻らなければならぬ。しかしどうやって戻る？）

そこで虎咲は閃き、三八式を担いで家の庭に立つ。

（転生する時はいつも他殺の時だつた…、現実に戻るには自害か!?)

この時虎咲の横をある少女が通り過ぎる。

そう、まだ幼かつた幼馴染の胡蝶しのぶである。

「虎咲!? どうしたの猟銃なんか持つて!」

目がいい彼女は当然すれ違ふ彼に気付いた。

この時、虎咲は往來の前で吐くまいと我慢していたが、

既に怒りは頂点に達していた。

（あの野郎…絶対に首を斬り捨ててやる…）

「…(めん)」

当時の虎咲ならあり得ないだろう無視。

彼は一目散に村から出ようと走る。

「よう！森岡の兄ちゃん！今日はどこに行くんだい？」

「森岡さん、おはぎありますよ！」

すれ違う町人は全員あの時死んでしまったり、

会えなくなつてしまつた人々だ。

彼は耳を塞ぎながら道を走る。

ようやく町を脱し外れの森に踏み込んだ時に、

虎咲は体の奥底から悲しみの他にもう一つの感情が湧き上がる。

あの悪鬼を必ず葬らなければいけないという憎悪の感情だつた。

（なんともまあ気持ち悪い血気術を使う奴が居るもんだな……）

だが、もうこれで終わりだ。次は俺の番だ、待つてろよ塵野郎）

そこまで遠くない所にある飛鳥山の中で、虎咲は三八式を自分の首に押し込む。

そして迷いもなく親指を三八式の引き金に指をかける。

しかし、虎咲は引き金を引くのを躊躇つた。

（本当に戻れるのか？ 現実に影響するのか？）

冷静になり少し思考を張り巡らせるために引き金から指を離す。

（いや、躊躇うな。現実に戻るためだつたらなんだってやる。絶対に殺してやるからな）

「クソ野郎が」

そう言い残し虎咲は目一杯引き金を引き、辺りに肉片と鮮血が飛び散った。
く虎咲が眠った直後く

(そろそろかな…、縄を腕に繋いで…と)

彼女は新入りである。

家に帰る道中に魘夢に拉致されこの列車に乗せられた。

拉致された際に催眠を受け、魘夢に洗脳されてもなお正気を保っているが、既に彼女の目に光は宿っていない。

(数を数えながら大きく息を吸えばすぐに眠りにつくつて

アイツは言っていたな…。いち…に…さん…)

少女はそう考えながら眠りにつく。

(ここが夢の中…現実と見間違えるほど精巧だ…)

町を歩きながら彼女は本体、つまり虎咲を発見する。

(猟銃を持ってどこへ行くんだらう…)

でも余計な事は考えるなつてアイツが言っていたから…)

首をブンブンと振つてある場所を目指す。

(夢の端…何だそれ…聞いた事ないけど…)

すると少女は、何かに当たったように呻き声を上げる。

(何これ…？見えない壁…？もしかしてこれが夢の端…？)

少女は機械のように着物の袂から錐を取り出して空間を斬る。すると、何やら雪が降り頻る空間に出る。

(これが…無意識領域…。しっかし広いなあ…)

無限に雪が降り頻り、人が行き来する特殊な無意識領域。

そこで少女はある建物を見つける。

(何…？これ…。しかも無意識領域には人はいないはずじゃ…)

その建物には、「JR 長岡駅」と書かれていた。

少女は興味本位で駅のホームに走る。

そこにはやはり列車が止まっていたが、彼女の知る列車では無かった。

(汽車じゃない…、蒸気も出してないし…。何だろう、この列車は…)

現代で言うところの電車が止まっている。

しかし、電車という存在自体知らない彼女は戸惑うばかりだった。

そして電車の車体側面に、ある番号札を見つける。

(『クロハ481—3020』…これは何を意味するんだろう…)

そうこうしているうちにベルが鳴り響き、

列車が駅を離れて雪の中に消えていく。

(何だろう……この訳の分からない感じ……)

少女は何かに引かれるように駅の地下へ向かう。

しかし、この地下へ向かう階段は先程通りかかった時には存在していなかった。不思議がる少女の意思をよそに、体は一人で地下に進む。

「門……？」

地下には鉄でできた門があった。

しかし、鉄の南京錠で施錠されているため開かない。

その瞬間、少女の体が一気に上に持ち上げられる。

(…何故か門を見ただけで洗脳が無くなった気がする……)

これならアイツを殺せるかも……)

彼女はそのまま現実世界に引き戻されていった。ある決意を胸に。

く虎咲 side s

「!!」

虎咲は飛び上がったような声を上げて起床する。

起床時に絶対出さないであろう声を上げたため正面に座っていた少女が起きる。

「大丈夫……ですか……」

案の定少し引き気味である。

まあ夢から覚めるために自害したんなら誰だつてあんな声上げるわと
虎咲は悲しくなった自分の心を慰めたのだった。

ここで虎咲は気付く。少女の腕と自分の腕が縄で繋がれているのを。

「……」

「……」

少女は気まずそうに顔を背けて窓の方を向く。

一方の虎咲は何かに気づいたように少女に問いかける。

「解き方は知ってるの？」

側から聞けば優しい声だが、少女は気づいた。

その声に明らかな殺意が滲んでいる事に。

「…そんな殺意を滲ませないでくださいよ。」

知っています、代わりにお願いを聞いて欲しいんです」

「お願い……？」

少女は有無も言わず縄を解く。

手で丁寧に縄を解いて虎咲に向き直る。

「…その刀、見た感じ電線で繋がっていますが切り離しはできますか？」

「まあ一応」

虎咲はそう言いながら立体機動装置の操作ワイヤーを切り離す。

「何でそんな事を聞くんだ？」

「…私は土方美羽。あの鬼を殺したい」

少女改め美羽はそう言いながら無表情だった顔を笑わせるのだった。

第参拾壹話 土方美羽

「…呼吸って何か知ってるのか…？」

「…知らない」

「…まず鬼殺隊は知ってるか…？」

「…何それ」

「…つまり何も分からんって事だな？」

「…うん」

美羽はもう先程のような声を上げて意見するということ事はしなかった。

元々話すのが苦手なのだろうと虎咲は大して深掘りしなかった。

「うわああああああ!!!」

「あ、炭治郎おはよう」

とんでもねえ叫び声を上げながら炭治郎が起床。

虎咲は炭治郎がすぐに首を触って安堵する様子を見て察する。

「炭治郎は首を切ったのか？」

「あ、はい。虎咲さんはどうしたんですか？」

「俺？この銃を首に当ててパンだな」

虎咲は安全装置を作動させた三八式を首に当てる。

この二人の異常な会話に美羽は「気持ち悪い」と言いたげな顔になり、
「禰豆子は状況を吞めずに目を泳がせていた。」

「あ、土方さん。縄を解いてあげて」

「……」コク

美羽は頷きながら炭治郎と少年を繋いでいた縄を解く。

「虎咲さん……この子は……？」

「あ、土方さん。俺の夢に侵入してきた子」

「そうですか……」

そして虎咲は信じられない事を口に出す。

「あ、炭治郎。この血鬼術は多分下弦の鬼だと思うんだよ。」

そして何故わざわざこんな回りくどいやり方で人を襲うのか。

それは多分戦闘に向いていない血鬼術を使用するからだと思う」

「はい……」

「というわけで俺は後方支援に回るから。」

しかも土方さんが奴を殺したいって言ったからね」

「え……？」

困惑する炭治郎をよそに虎咲は

日輪刀を持った美羽を抱えて客車の屋根に上がる。

「土方さん、鬼は首を切れば殺せるが……本当に殺せるんだな？」

虎咲は美羽を見て言う、真莉は走りながらそれに答えた。

「……殺せるとか殺せないとかは関係ない。」

ただ私は奴を殺さなきゃいけない気がするだけ」

先程のような決意を宿した目で真莉は汽車の進行方向を見据える。

それを見た虎咲は日輪刀を美羽に渡し、肩に掛けていた三八式を手取る。

「……まあ、覚悟があるなら問題は無いか」

三八式を軽く整備してから虎咲は立ち上がる。

「……使う事は無いだろうがな」

虎咲は三八式のコッキングレバーを引き、自嘲気味に呟く。

挿弾子で留められた赤色になった五発の6.5 m 弾を薬室に押し込み、

素早い動作でコッキングレバーを押し戻して安全装置を解除する。

「さあ……鬼退治に行こうじゃないの」

虎咲と美羽は先頭車を目指す。

前に行くにつれて増える鬼の気配に美羽は顔を顰める。

だがすぐに持ち直した美羽は、勢いのまま先頭車に突入した。

「あれ？いい夢を見せてあげたのに…。」

寝返るなんて感心しないなあ…。」

突入した先、機関車の屋根に笑みを浮かべた鬼が立っていた。

その瞳には「下壺」と刻まれており、

その顔は少し微笑んでいるため不気味さが増していた。

下弦ノ壺は虎咲を見てさらに笑みをこぼす。

「やあ、俺は下弦ノ壺の魘夢。お前かな？あの方が言っていたのは」

「多分俺だ。しかし無惨も堕ちたな、こんな雑魚を差し向けるなんて」

「…洗脳の方が感心しない。お前は私が殺す」

「鬼狩りでもない奴に下弦の俺が殺されるわけないじゃ…は？」

その途端、魘夢の首が機関車の屋根に落ちる。

美羽は無表情のまま片方の日輪刀を逆手に持つて頭だけになった魘夢を何度も刺す。

「…何故お前は死なない…？いや、何故手応えが無い？」

美羽は気持ち悪そうに消えることのない魘夢の頭部を見る。

「フフフ…フハハハハ!!今俺は気分が高揚しているから教えてやる！」

お前らがすやすやと寝ている間に俺はこの列車と融合した！

この頭だって本物の頭じゃない、本体はまた別にある！

さあ、お前たち二人は守り切れるかな？

この列車にウジャウジャいる二百以上の人間を守り切れるかな!？」

そう言言い残して魘夢の頭部は消滅し、

屋根に突き刺された虎咲の日輪刀だけが残る。

「…本体はこの列車のどこにいますか？」

美羽は無表情のまま日輪刀を回収して虎咲に聞く。

「まず先に乗客を守らないといけないがな…」

「虎咲さん！」

日輪刀を持って客車の屋根をつたってきた炭治郎が叫ぶ。

「炭治郎か、あの鬼はこの列車と融合している。」

乗客を守りながら鬼を討て！」

「了解です！」

炭治郎は屋根から客車に滑り込み、乗客を守るべく走る。

その瞬間、後方の客車から轟音と雷鳴のような音が聞こえる。

「うっしやあああ!! ついて来い子ども!!」

猪突猛進の伊之助様がお通りだあ!!」

伊之助が客車の天井を突き破り、着地する。

それを見た炭治郎は伊之助に向かい大声を張り上げる。

「伊之助! この列車に安全な場所は無い! 乗客を全員守れ!」

「ハッ! 俺の方が先に気付いてたからな!」

「よし! お前達は四両目と五両目を守れ! 俺達は前三両を防衛する!」

虎咲が三十年式銃剣を取り付けながら指示を出し、

三両目の扉に手をかける。

「…さあ待つてろ、必ず私が殺してやる!」

美羽も両手に持つ日輪刀を構え直して虎咲の後に続く。

く一号車く

「キモ」

虎咲は扉を開けたと同時に呟く。

そこには魘夢のものであるう腕が乗客を取り込もうとしていたのだ。

乗客は全員血鬼術で眠らされており、腕が接近している事に気付きもしない。

一翼の呼吸、式ノ型、全翼無連・避人建一

虎咲は銃剣を付けた三八式を振り回して魘夢の腕を斬り裂く。

銃剣は刀身が短いため威力は落ちるが、斬れば大して問題は無い。

「土方さん、そつちは大丈夫？」

「…美羽でいい、あらかた片付いた」

「了解…」

日輪刀を振りながら美羽と虎咲は腕を斬り裂き続ける。

その時、炭治郎が一号車に現れた。

「虎咲さん！ヤツの首は機関車です！でも硬すぎて斬れません！」

「わかった、今行く」

一二つ返事で答えた虎咲は、未だに無表情の美羽を引つ張つて屋根に登る。

「いいのか？ヤツを殺さなくて」

虎咲は未だ乗客を襲う腕を斬り裂き続ける美羽にエサを垂らす。

勿論、彼女は食いついた。

「…よし、行こう」

(チヨロイ)

～機関車運転室～

「炭治郎！伊之助！首はどこだ！」

「虎咲さん！ここです！」

炭治郎は運転室の床を斬り続け、伊之助は周りから這い出る腕を斬り続けていた。炭治郎が斬り続けていた床には、鬼の首の骨があつた。

「美羽！」

「…わかつてる！」

（見様見真似だけど…！）

―翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連―

美羽は腕を目一杯振り上げ、首の骨に日輪刀を振り下ろす。

首が硬かつたためか日輪刀が折れる。

損傷した首を、炭治郎は見逃さなかつた。

―ヒノカミ神楽 碧羅の天―

「つぎやああああああ!!」

列車全体が激しく揺れる。

首が斬られてのたうち回り、列車が大きく揺さぶられる。

「脱線するぞ！身を守れ！」

虎咲が叫んだ次の瞬間、

先頭車から一気に脱線する。だが、転覆はしなかつた。

「煉獄さん！」

「森岡少年！鬼は君がやったのか！」

相変わらずデカい声で杏寿朗は喋る。

虎咲は耳を塞ぎながら首を横に振って美羽を指差す。

「君か!?少女！名を何と言う！」

「…土方美羽」

「そうか！近藤少じ「土方です」すまない！俺はよく名前を間違えてしまうからな！」

(…てか近藤って誰…)

しかし美羽にそれを聞く気力は無く、力尽きたように地面に横たわる。

「…疲れた」

この美羽の呟きには虎咲も同意した。

その時、炭治郎が腹を押さえながら倒れる。

見れば血が出ており、顔色も悪かった。

杏寿朗が呼吸を使い止血するように促し、炭治郎は戸惑いながらも止血する。

杏寿朗は炭治郎を褒め、乗客の救助に向かおうとした。

だが、瞬間的に杏寿朗と虎咲の目が変わる。何かを察知したように。

「美羽、日輪刀を返してくれ」

「…ん？分かった」

虎咲はコードを日輪刀の柄に挿し直し、臨戦態勢を取る。

「煉獄さん、分かりますか…」

「ああ！何か来る！」

「似の呼吸、参ノ型 絶対領域・改」

虎咲が技を展開した瞬間、絶対領域に見覚えのある何かがつつかる。

ソイツの瞳には、「上弦」と「参」と刻まれていた。

「また一段と強くなつたな！虎咲！」

「黙れ、お前はまだくたばってねえのかよ」

「お前を鬼にするまで俺はくたばらん！」

「あつそ。」

今夜、絶対に貴様をぶっ殺してやる」

「翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼」

「その闘気だ！いいぞ！お前を殺すのが楽しみだ！」

「翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連」

「術式展開、破壊殺・空式」

今ここに、因縁にケリをつけるべく二人の男が戦闘を開始した。
全てを、終わらせるために。

第参拾弍話 戦え、抗え、奴を消すためなら

― 似の呼吸、壹ノ型 冬ざれ氷柱―

― 炎の呼吸、肆ノ型 盛炎のうねり―

― 破壊殺、乱式―

(助太刀してえけど…体が言っている…あの中に入ったら死ぬと！)

(…人間にあんな動きってできるの…?)

強力で俊敏な技の応酬。

傍で日輪刀を持ちながら臨戦態勢を取る伊之助は、

その技の隙間にすら入ることすら出来なかった。

美羽はその俊敏さに若干引きつつも、虎咲の剣技に見入っていた。

「くっ…やはりお前達は鬼になるべきだ！炎柱！虎咲！」

「何故君は俺が柱だと分かる？」

「簡単だ、その練り上げられた剣技！柱以外の何者でもない！名を何と言う！」

猗窩座は高笑いしながら杏寿朗に名前を聞く。

杏寿朗は真剣な顔で答える。

「俺は煉獄杏寿朗だ、炎柱でもある」

「杏寿朗！鬼になる気は無いか？」

猗窩座は柱や力を持った隊士に会う度に開口一番鬼になる事を勧める。

実際、虎咲も前の戦闘の最中に何回も言われていた事だった。

「ならない」

「何故だ？同じ武を極める者として理解しかねる」

猗窩座は杏寿朗と虎咲を交互に見てさらにこう言う。

「俺は悲しいんだ、そのような高められた武術が完成する事無く朽ちてしまうのが。

分かるか？人間には寿命という限界がある、しかし鬼にはそれが無い。

共に至高の領域に行こうではないか！」

その猗窩座の言葉に真つ先に反応したのは虎咲だった。

「お前の考えは最もだ。」

だがな、俺は人間を捨ててまで武を極めたいとは思わない」

「君は勘違いをしている！寿命という物も人間のはかない個性だ！」

杏寿朗も虎咲に続いて猗窩座の言葉を否定する。

猗窩座は何かを企んだように笑い、拳を構える。

「ならば鬼になると言うまで闘うまで！」

「上等！今夜がお前の命日だ!!」

―翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼―

―炎の呼吸、壱ノ型 不知火―

二人の柱が猗窩座の首を捉えんとするべく刃を振るう。

だが猗窩座はその攻撃を避け、拳を構えた。

―血気術、術式展開―

―血気術、破壊殺 空式―

「これで貴様らがどこから来るかも全てわかるぞ!」

乱打による空間制圧で猗窩座は虎咲を集中的に狙う。

だが、猗窩座は彼にも空間制圧用の呼吸があるのを完全に失念していた。

「おうそうか」

―似の呼吸、肆ノ型 圧縮窒素・改―

虎咲は猗窩座の方に向かって刀身を投げ、引き金を引く。

しかし猗窩座は飛来した刀身と爆風を軽々と避けた。

「こんなものか!?!虎咲!!お前はこんなに弱くはないはずだ!」

「黙りやがれ!」

―翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連―

九つの刃が猗窩座を切り裂くために飛翔した。

二つは外れたが、他の七つは猗窩座に直撃し、猗窩座は内臓をぶち撒けた。「やるなあ！だがこれm「俺を忘れるな！」」

杏寿朗が猗窩座の上から斬りかかり、猗窩座の両腕を叩き斬る。

「ありがとうございます！煉獄さん！」

「いや、礼は終わった後にしろ！来るぞ！」

―破壊殺、碎式 飛流星千輪―

―似の呼吸、参ノ型 絶対領域・改―

虎咲は咄嗟に絶対領域を展開して猗窩座の技を受ける。

しかし展開が遅れたために、不完全な状態のまま技を受けてしまう。

威力に耐えられずに絶対領域が崩壊した。

虎咲は回避出来る事の無い一撃を受けるはずだった。

「ツ！煉獄さん!!」

「杏寿朗、死ぬはずの人間を助ける理由はないはずだ」

虎咲の叫びと、猗窩座の嘲笑が聞こえる。

そう、杏寿朗が虎咲を突き飛ばして猗窩座の攻撃を受けたのだ。

猗窩座の攻撃をモロにくらった杏寿朗は吐血し、その場に倒れる。

「煉獄さん！何で庇ったんですか!!」

「ゴフツ…簡単だ！君は弱くない！そしてあの鬼を憎んでいる！

言いたいことは分かるな！君がああ鬼を殺したまえ！」

「…炭治郎、煉獄さんを頼んだ」

炭治郎は虎咲の顔を見て固まる。

虎咲の顔が復讐と憎悪に染まっていたからだ。

「そうだ！その鬨気！それこそ俺が見たかったお前の姿だ！」

「……もう、お前死んだ方がいいよ」

―翼の呼吸、延ノ型 為虎傳翼・延―

虎咲の目が煌々と光り、

虎咲は今までに無い速度で猗窩座との距離を詰める。

猗窩座は一瞬だけ怯むが、すぐに拳を構えて迎え撃つ。

―翼の呼吸、肆ノ型 霧散翼・改―

―血気術、破壊殺 脚式―

「自分から足を差し出すなんてな！鬨気を感じするんじゃないのか!？」

腕を目一杯に振り下ろして猗窩座の足を両断する。

すぐに霧散翼が効き始め、猗窩座の下半身は消滅した。

「くっ！やるな！だが俺の再生速度は上弦の中でも最上級だ！」

先程両断した消滅した下半身を猗窩座は容易に再生して見せた。

しかし、再生したての彼は虎咲の次の技を避ける事なくまともに受けてしまった。

「やっぱりお前はいい！お前ならすぐに十二鬼月に食い込めるぞ！」

―血気術、破壊殺 滅式―

―似の呼吸、弐ノ型 滅式・改―

猗窩座は負傷していた杏寿郎や炭治郎に向けて滅式を放つ。

虎咲は咄嗟に同じ技を放ち、猗窩座の技を打ち消した。

辺りを暴風が支配する。

「何故だ！何故お前は守りながら戦う！」

無意味な事していると死んでしまふぞ！」

風の音と砂塵に掻き消されない大声で猗窩座は虎咲に問う。

その言葉に、虎咲はキレた。

「黙れ！俺は守れる人間は守るんだ！」

守りながら戦うなんてもう慣れてんだよこっちはあ！」

―翼の呼吸、参ノ型 真・為虎傳翼―

―翼の呼吸、肆ノ型 真・霧散翼―

未だに舞い続ける砂塵を掻き分け、虎咲は猗窩座の足を切断する。猗窩座は咄嗟の事に防御態勢が取れずに霧散翼をまともに食らう。

「小賢しいな！だがいい！やはり鬼になれ！」

「小賢しいのはお前だ！しつこい！黙ってる！」

―翼の呼吸、壊ノ型 雲煙過眼・壊速―

―血気術、破壊殺 終式 青銀乱残光―

音速に近い速度で虎咲は突進し、

猗窩座は自身最大の技で迎え撃った。

だが虎咲の到達の方が圧倒的に早く、刃が猗窩座の首を捉える。

直後、一匹の上弦の鬼の首が宙を舞った。

「嘘……だろ?」

「まだだ!」

―似の呼吸、肆ノ型 真・圧縮窒素―

虎咲の二本の刃が猗窩座に突き刺さり、

虎咲の蹴りによって猗窩座の胴体が遠くへ飛ばされる。

カチツという音と共に猗窩座の胴体がある場で焼かれ、

上弦ノ参、猗窩座はたった今戦闘不能となった。

「嘘だ……この俺が……」

「黙れ、もうお前は死んだんだ。いい加減に成仏しろ」

「うおおあああああ!!!」

―血気術、破壊殺 終式 青銀乱残光―

猗窩座は最後の力で自らの最大の技で虎咲を狙う。

完全に油断しきっていたはずの虎咲はその一撃を軽々と両断し、

左手の日輪刀を逆手に持ち替えて猗窩座の頭部に突き刺す。

今度こそ猗窩座は消滅し、地面に突き刺さった日輪刀だけが残された。

「やった……やったぞ父さあああん!!!」

虎咲はその場に力無く座り、叫ぶ。

丁度昇ってきた太陽が、彼の頬を伝った涙を光らせた。

第參拾參話 均衡の崩れ

上弦ノ參討伐は、すぐに全鬼殺隊士に広がった。

虎咲は最初は強がっていたが、その場に倒れつ。

この時点で壊ノ型使用による右腕骨折、

真を使用した事による足の疲労または骨折、

為虎傳翼の使用過多による高熱、負傷による出血多量。

以上の虎咲の重傷が発覚したのは、戦闘が終結した一時間後の事だった。

駆け付けたしのぶの顔を見て、虎咲は安心したように眠ってしまった。

く無限城く

一方その頃、

猗窩座が終式を放った事を知った無惨は、

居候先の屋敷で子供の姿のまま発狂していた。

「何故だ猗窩座アアアアアアアアアア!!」

あれほど忠告しただろう!? ヤツの前で自身の最大の技を放つなど!!

馬鹿なのか!? アイツは馬鹿だったのか!?

そしてアイツを十二鬼月に任命した私も馬鹿だったのか!!」

「お坊ちゃん? どうかしましたか?」

「あらどうしたの? どこか具合が悪いのかしら」

「私の思考の邪魔をするな人間!」

無惨は瞬く間に召使いのような女性ともう一人の女性を消し飛ばした。

彼女達は自分達が何をされたのか、目の前の子供の正体は何なのか、

それらを思考する暇もなくこの世を去った。

「やはりここはヤツに任せるのが一番だ。」

必ずや貴様を葬ってやるぞ! 森岡虎咲!」

無惨は血生臭い部屋で一人高笑いしながら、その屋敷を後にした。

く二週間後く

今日、蝶屋敷はいつになく慌ただしかった。

炭治郎と杏寿朗が蝶屋敷を無断で出立し、

『ヒノカミ神楽』について尋ねるために煉獄家に赴いたのだ。

しのぶや治療担当のアオイは、顔に青筋を浮かべて炭治郎の帰還を待つ。

そこに大慌てで割烹着を着た真菰が駆け付ける。

「虎咲が起きたよ! しのぶ!」

「虎咲さんが気が付きました！」

しのぶは誰よりも早く虎咲がいる病室に走り、扉を蹴破った。

「おう…しのぶか…」

「心配したんですから…虎咲の馬鹿…」

その後の検査で、虎咲にはなんの後遺症も残らない事が判明し、

彼はこの後も鬼殺隊として動けるようになった。

しかし杏寿朗は右目が失明し戦闘に支障をきたす可能性があったため、

この戦いで柱から引退し、鬼殺隊からも身を引くという。

だが本人はこれからも育手として活動し、たまに柱合会議に顔を出すらしい。

「煉獄さんにはすまない事をしたな…俺を庇ったせいだしな…」

「煉獄さんは気にするなと言っていましたし、

いつまでも引きずってると虎咲らしくありませんよ？」

「…そうだな」

虎咲はそう言いながら窓の外を見る。

継子になった美羽が練習用に弱体化された

立体機動装置を付けて鍛錬を行っていた。

「仇…取れたんですね…」

「ああ……」

虎咲は窓の外を見ながら呟く。

しのぶは感慨深そうに虎咲を見る。

「だがまだだ。俺の復讐は童磨を殺し、

無惨をこの世から完全に消し去って初めて成功する。

その日まで、俺は戦い続ける。ついて来てくれるか？しのぶ」
傍らにいたしのぶは虎咲の手を握り、決意したように虎咲を見る。

「ええ……どこまでもついて行きますよ」

「私も付いてくよ。鬼が絶滅する、その時まで」

いつ部屋に入ったかは分からないが、真菰も虎咲の手を握った。

「高浪」

彼がそう呟いた瞬間、鴉が虎咲の肩に止まる。

「ドウシタ、才前ガ俺ヲソウ呼ンダノハ名前ヲ付ケラレテ以来ダガ」

「これを鐵火山さんに」

虎咲はいつの間にか書いた手紙を鴉……高浪の脚に括り付ける。

「了解イイ！後デ金平糖貰ウカラナ!!」

「はいはい」

虎咲は鴉が入って来た窓から出て行ったのを見届け、しのぶの方に向き直る。

「そろそろ夕飯の用意してくるね！」

虎咲はどうする？ 食べる？」

「今日はいいや、流石に病み上がりはキツイ」

「分かった！」

真菰が病室を出てすぐにしのぶは虎咲に問う。

「虎咲、今の手紙は…？」

「美羽用の銃を作ってもらおうって思ってたね」

「なるほど、虎咲と同じ銃ですか？」

「いや、違う銃にしてもらうよ」

その言葉にしのぶは首を傾げた。

同じ銃だったら弾薬の互換性もあると考えたからだ。

「しのぶが考えている事も分かる。」

だが俺の銃は狙撃が専門、

アイツみたいに斬り込みに行く奴が使う銃じゃねえよ」

「でも彼女も虎咲と同じ装備を付けているって事は…」

「そう、銃はあくまで副兵装だ。

だけどアイツには射撃の才能も剣術の才能もある。

血筋が理由かもしれんがな」

「彼女の血筋……？」

「美羽の苗字は……土方だ」

「!!」

土方。その苗字を知らない人間はこの大正日本に存在しない。

土方歳三。元新撰組副長だったが、戊辰戦争開始時に旧幕府軍に参加。

五稜郭の戦いで戦死したという“噂”が立っている。

「それは……あの土方歳三の子孫ですか……」

「美羽ならすぐに最終選別を突破すると思う。」

俺の剣技を見ただけで覚えてるからな」

「もう彼女一人でいいんじゃないんでしょうか。」

時透君みたいに二ヶ月で出世するんですかね」

そのしのぶの言葉が後に現実になるとは誰が考えただろうか。

「もう今日は寝るよ。おやすみ」

「ええ、おやすみなさい。虎咲」

しのぶが病室の扉を閉めたのを見て、虎咲は目を閉じた。

「翌日 早朝」

虎咲は美羽に全集中・常中を会得させるべく鍛錬をさせていた。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「そうだ！今のをずっと続けるんだ！」

あまりの過酷さに美羽が咳き込むが、虎咲は容赦無く続ける。

「美羽！お前は才能がある！多分すぐに終わるぞ！」

「…多分って何…！」

この一言が美羽のやる気に火を付けた。

一瞬で常中が使えるようになったのだ。

「…早くね？」

「…師範が私のやる気を出させたおかげ。

一応ありがとう」

「一応って何だよ…昼過ぎから呼吸教えるからな」

「…うん」

そのまま美羽は虎咲に背を向けて、蝶屋敷に上がる。

虎咲は美羽がどんどん上達しているのを実感して一人喜んだ。

注意）コイツは病人です。

骨はくつついていても病人です。

（第二清水町 東部第二防衛線）

「久々だな」

虎咲は病室に『許してください』という

置き手紙を残して第二清水町に来ていた。

「お、森岡さんじゃないですか」

「佐藤さんですか、どうですか？ 工事の進捗状況は」

先の戦闘による損傷を修復するべく、

未だに作業員が足場を組んで工事を行なっている。

「まあ七、八割っていったところですね。」

この調子だとあと一ヶ月で完成するでしょう」

「ありがとうございます、毎度毎度すいません」

「いえ、いいんですよ。」

壊されたら元以上に修復する、それが私達の信条です」

佐藤はそのまま工事を続けている作業員の方を見る。

「それよりも、この街が鬼との戦いに

ケリをつけてくれるという期待の方が大きいです」

「…俺が約束しましょう、この街で全て終わらせる事を」

「ありがとうございます。でも、自己犠牲だけはしないで下さい」

佐藤はそう言いながら作業場に消えた。

「はあ…」

虎咲はため息を吐きながら

東部第二防衛線に装備された新品のMG42を撫でる。

前の戦闘で童磨によって破壊された東部第二防衛線には

MG42が重点的に装備されており、

見える範囲だけで二十挺のMG42が備え付けられている。

「お前が使われるのは最終決戦だけだと願っておこう」

そう呟きながら虎咲は蝶屋敷への帰路についた。

虎咲がこの後、置き手紙を残したのにも関わらず

蝶屋敷にしのぶの怒号が響き渡ったのはどうでもいい事である。

第參拾肆話

しのぶの手によつて雑巾のように絞られた虎咲は屋外鍛錬場に赴く。

美羽は既に立体機動装置を付けてその場に立つていた。

「…病人のくせに出かけるのが悪い」

「ごもつともだな…」

「…どうせそんな事だろうと思つたよ。」

しのぶさんが病室に入った途端にブチギレてたんだから」

呆れた声で美羽は呟く。

師範の虎咲に敬語を使わず普通に喋るのも、

虎咲が彼女の性格と境遇を考えて許可しているからだ。

「完璧に絞られた…あんなに言われたのも久しぶりだ」

「…もうしないようにしないと。じゃあお願いね、師範」

「ああ」

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼―

高速で破壊力のある一閃が虎咲の進路上にあつた大木を粉碎した。

「…なるほど」

―翼の呼吸、壱ノ型 雲煙過眼―

そう。美羽は見ただけで技がどんなものか、

構え方はどういう風なのか、

呼吸の加減がどんな物なのかがすぐにわかってしまうのだ。

「…一通り見せて」

「了解…」

―翼の呼吸、弍ノ型 全翼無連―

―翼の呼吸、參ノ型 為虎傳翼―

「相変わらず美羽の能力？」

才能はいいよな、見ただけで覚えられるんだから」

―翼の呼吸、肆ノ型 霧散翼・改―

―翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連―

「…でもあの時に使ってた技とは何か違う…。」

隠す必要なんか無いのに」

「少なくとも今のお前には使えない。」

お前が柱か護柱隊になったら教えてやるさ」

「…わかった…」

―翼の呼吸、式ノ型 全翼無連―

―翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼―

―翼の呼吸、肆ノ型 霧散翼・改―

―翼の呼吸、伍ノ型 集翼九連―

美羽は目の前にあつた藁や大木を連続で発動させた技で消し飛ばす。

その様子に虎咲は感嘆し、近くに寄つてきた美羽の頭をワシヤワシヤと撫でる。

「お前ならやれる…あの時の勘はやっぱり外れてなかつたな」

「…髪がボサボサになるからやめてよ…」

「うりうり」

この二人の様子を見たしのぶと真菰が、

同じ事をやれと虎咲に迫つたのは言うまでもない。

く虎咲の自室く

「あまりに早い…アメリカの銃も作れるのかあの人は…」

虎咲は机に置かれた新品のウインチェスターM1892を手にとって眩く。

美羽用に仕上げられた銃は、窓から覗く光を反射させた。

「…あの人は刀鍛冶より軍工場の方が向いてるんじゃないか？」

まあ人の仕事には口出さない方がいいか、と虎咲は溢した。
M1892のコッキンググレバーが動く事を確認した虎咲は
足早に美羽の自室へ向かった。

「…何？」

「ほい、これお前の銃な」

「…頼んでないけど」

「少なくともお前なら扱える」

「…まあ、じっくり来ないと言ったら嘘になるね」

美羽はM1892をじっくりと観察した後、後に構える。

一切ブレないその姿勢に虎咲は感嘆した。

「…ありがとう。頼んでないけどもらっておくよ」

その時の美羽の目は、真新しい玩具をもらった年相応の目だったという。

く翌朝

蝶屋敷の屋外鍛練場に一発の銃声が響き渡る。

「…扱いやすい…」

特徴的な長い銀髪をたなびかせながら美羽は呟く。

そこに一人の青年が現れた。

「朝から鍛練とは熱心だな、美羽」

虎咲が美羽の後ろから声をかける。

その声ができる前に美羽はM1892を後ろに向けるが、もうそこに虎咲はいなかった。

突然の事に美羽は思考が止まったが、

自らの背後で聞こえた金属音に彼女はため息を吐きながら呟く。

「…相変わらずだね、師範」

「反応出来ただけ上出来だ。」

だがすぐに次の行動を起こさないと一瞬で死ぬぞ」

その言葉に美羽は構えていたM1892を下ろし、

虎咲の目を見て口を開く。

「…師範、私は前々から思っていたんだけど…。」

私にあの機械は性に合わない。電線で可動域が狭くなるのもあるし」
「まあ翼はアレが必要ってわけでもない。」

美羽には美羽なりの戦い方だいたいと思う。それと」

虎咲は悪戯つ子のような笑みを浮かべて棒と皿を取り出す。

「射撃試験、今までやってなかったからな」

この後屋外鍛練場に大量の銃声が響き渡る。

その後、二人が葉莢回収に三十分も時間をかけたのはどうでもいい話である。

くその日の昼く

「補充用の最終選別ですか？何故今更…」

しのぶは虎咲が受け取った手紙を見ながら眩き、机に置く。

「やつとゴタゴタが収まったってのもあるし、

やつと鬼が集められたつてのがあるだろうけど、

一番の理由は美羽の鍛練が最終段階に入ったからだろうな」

「土方さんですか？彼女はまだ刀を握って三週間程しか経ってませんよ？」

しのぶは窓の外に目をやる。

美羽が屋外鍛練場で一心不乱に

藁人形をズタボロにしているのがしのぶの目に入った。

「…彼女ならやれそうですね。時透君の例がありますし」

「最終選別を経て鬼殺に進むか否か、それを決めるのはアイツだよ」

「そうですね…」

虎咲は立ち上がり、美羽の元へ向かう。

その後ろ姿を見ながら、しのぶは笑みを浮かべて眩いた。

「…そろそろ私も虎咲も毒が周ったはずです。

アイツに復讐するためにはどんな手段でも構わない。そうですね？虎咲」
その笑みは誰にも向けた事の無い、憎しみがこもった笑みだった。

く屋外鍛練場く

「美羽」

「…何？」

汗だく的美羽は鬱陶しそうに虎咲を見つめる。

「お前が戦える日が来たようだ」

「…本当？」

美羽の目に少しばかり光が宿った。

「正確にはそのための試練だがな」

「…試練？」

試練という単語に美羽の目が真面目に虎咲を捉え、

美羽は虎咲の方に身を乗り出す。

「藤襲山で行われる鬼殺隊の最終選別。

鬼が集められた山で三日生き残ればいい」

「…何その簡単そうに見えてすごく難易度が高そうな試練…」

「前は七日間だったんだぞ？これでもまだマシさ」

「…とりあえず、その山で三日間生き残れば戦えるわけ？」

「ああ」

「…分かった、この道を進むと決めたのは私。

これから戦うという選択をしたのも私。

必ず鬼を、この世から一匹残らず駆逐するためにね」

その時の美羽の目に、

虎咲は一気に吸い込まれそうな大きな憎悪を感知した。

第參拾伍話 宇髓天元

「遊郭で任務？アイツは正気か？」

『遊郭』という単語が虎咲の口から発せられた瞬間、

虎咲の横で作業していたしのぶの手に握られていた筆が粉々になる。

「…虎咲、任務とはいえ遊郭で関係なんか持つてみてください。」

貴方を私と真菰でこの筆のように粉々にしますよ？」

普段の顔からは想像もできない声でしのぶは虎咲に向かい言い放つ。

その威圧感に、虎咲は土下座でもするかのような勢いでしのぶに謝った。

「まあ俺は行かなくて良さそうだな」

「あ、だからさつき宇髓さんが炭治郎君達を連れて行つたんですね」

〜二時間前〜

「いやああ人攫いいい」

虎咲が銃を手入れをしている時、外から叫び声が聞こえた。

「…うるせ」

虎咲は愚痴りながら蝶屋敷の玄関を通る。

そこで見たのは音柱の宇髓天元と、

その天元に抱えられたアオイとなほの姿だった。

「何やってるんだ!」

単独任務から帰還した炭治郎が蝶屋敷に入った瞬間、
走りざまに天元に頭突きを放つ。

「!?!」

「愚か者」

炭治郎が声の聞こえた方向を見る。

蝶屋敷の門の上には、いつの間にか天元がいた。

「俺は元忍で音柱の宇髓天元様だぞ。」

その界限では派手に名を馳せた男。

お前のような鼻くその頭突きなんかくらうと思ってるのか」

天元は炭治郎達を見下し、嘲笑うように言い放つ。

「人攫い!」

「アオイさん達を返せ!」

「そーだそーだ!」

「一体どういうつもりだ!」

天元に炭治郎やきよ、すみから罵声が浴びせられる。

「テメーら！だれに口聞いてるんだ！」

俺は柱だ！お前達の上官だ！自分の立場わかってんのかこの野郎！」

天元はすかさず反論するが、炭治郎の一言でさらに場が乱れる。

「俺はお前を柱だとは認めない！」

「むん！」と言いながら炭治郎が言い放った。

その言葉に天元がついにキレる。

「むん！じゃねえよ！お前が認めないから何になるんだ！」

この下っ端があ！脳味噌ねえのか馬鹿野郎！」

「おー、俺を無視して何してんだ？」

話を聞き飽きた虎咲が会話に乱入。

炭治郎がかき乱した場をさらにかき乱す男が現れた。

「何やってんだ宇髄」

「何だとは何だ。」

任務で女が必要だからこうやって連れて行こうとしてるんだ」

「だとしてもまずなほちゃんを隊士じゃないだろ」

「じゃいらね」

宇髓はなほを放り投げ、アオイだけを連れて行こうとする。

「待てや」

一翼の呼吸、参ノ型 為虎傳翼一

「何だ森岡。俺は早く任務に行きたいんだ…!」

天元は虎咲の腕に抱えられているアオイを見て言葉に詰まる。

いつの間にか天元から離れていたアオイは、地に足をつけて蝶屋敷に返却された。

「任務に女？別にそうもないだろ。」

鬼殺隊に性別は関係ないだろ？それにこの子は訳ありだ。

強制的に連れて行く事が柱の仕事か？」

虎咲は天元が何故そこまで女を使う事にこだわるのかが

未だに理解できていなかった。

「だがこの任務はどうしても必要なんだよ…。」

何ならお前んとこの継子はどうした？」

「お前が来る一時間前に藤襲山に向かった。」

あとアイツはまだ鬼殺隊士じゃないしな」

「どーすつかない…そうだ。」

アオイそこの三人の野郎共。

もうお前らでいい、付いてこい」

天元は塀の上で臨戦態勢を取っていた炭治郎、善逸、伊之助を呼ぶ。

「俺は行ったほうがいいか？」

「お前は今夜から別の任務があるだろう？」

そつちの関係上行けなさそうだからいいわ」

虎咲は困惑しながら天元の近くに寄る。

しかし天元は、自分の任務に集中しろと言わんばかりの目で虎咲を見る。

「そ、そうか。じゃあ頑張つてな炭治郎、善逸、伊之助」

天元は他の三人を引き連れて吉原へと向かう。

蝶屋敷の門には、虎咲と女子五人組だけが残された。

「…おいちよつと待て。なんで俺の任務内容が漏れてんだ？」

その呟きは五人に聞こえる事なく、風の音によって掻き消された。

くしのぶの自室

虎咲は先の任務内容の漏洩が心配になり、

頭を抱えながらしのぶの自室の扉を蹴破る。

「『そつちの任務の関係上行けなさそうだから』って、

どこから俺の任務が漏れたんだろうな？」

虎咲はもう分かっている。

しのぶが天元に任務の情報に渡した事を。

「さあ？」

しのぶは目を背けて窓があるはずの方向を向く。

しかしここは作業室、窓が存在しない部屋である。

よつて虎咲は、しのぶが情報を漏らした事を瞬時に察知した。

「…お前、もういいや」

虎咲はしのぶを睨むが、

ほぼ毎日続くちよつかいに一々反応していると禿げてしまうので、

無視を決め込むことにした。

「え、ちよつとお願いです無視しないでください…」

泣き顔になったしのぶを見て虎咲はようやく口を開く。

「まあいいさ、伝えた相手が柱じゃなかったら速攻で殴ってたけどな」

「もうしません…」

未だに半泣きのしのぶを見て、虎咲は口を開く。

「…今日明日は第二清水町に常駐するから帰ってくるのは明後日の朝だな。

恐らく美羽よりは早く帰って来れるさ」

「任務、頑張ってくださいね。帰りを待っています」

「ああ、必ず五体満足で帰ってくる」

上弦ノ参である猗窩座が虎咲によって討伐され、

百数年の均衡が崩れたとは言え未だに上弦の鬼は五体も残っているのが現状。

そして、上弦ノ弐である童磨以外の血気術は今でも不明のままであるため、

対策の施しようがないというのも現在の鬼殺隊の状況である。

だが輝哉の予知のままの状況が続けば、今年中には鬼との戦いにケリが付くらしい。

それまでにどれだけ上弦の戦闘力を測るかが鬼殺隊にとって急務であった。

世紀の大決戦まで、あと七ヶ月。

く虎咲の自室く

「果たして何回目の改良かな…?」

虎咲の専属刀鍛冶(?)である鐵火山から送られてきた立体機動装置を見て

虎咲は呆れたように呟いた。

「これはガスタービンか…?」

この時代によく作ったな、表彰もんだろこんなの」

これはつい先程虎咲の鴉である高浪がヘトヘトになりながら

運んできた立体機動装置。

ガスファンが今までの一段式から

ガスタービンのような多段式に変更されており、それに伴いガスファンの配置が少し変わっていた。

あくまでガスタービンの“ような”物だが、

虎咲：…もとい祐太はこの機械を見た事があった。

「見るのは整備員時代以来か…。

よし、これで行こう。

初陣が早すぎるのもどうかと思うがな」

改造された立体機動装置を付けて、虎咲は闇夜を進み始めた。

鬼から人を守るために。

第參拾陸話 第二清水町と遊郭

「まあ任務つて言つても、第二清水町の見張りだけどなあ」

鉄塔の上で、水筒に入った水を飲みながら虎咲は呟く。

任務が始まつて早二日。明日でこの任務が終了する。

どこからか吹く風が、彼のマントを揺らした。

「…そこにいるんだらう？ 鬼さん」

信煙弾を装填し、真上に打ち上げると同時に虎咲は言い放つ。

「気配でバレたかあ、さすがが柱だなア」

すると、闇の中から細身の鬼が姿を現した。

その鬼の双眼には、『上弦』『陸』の言葉がそれぞれ刻まれていた。

「俺は今夜お前を殺す鬼だア。」

初めましてかア？ 俺は上弦ノ陸の妓夫太郎だア。

あの方の頼みは断れないからなア」

「上弦ノ陸…か、未だに能力が割れてなかつたはず。」

まあその必要なんで無いか、だつて今日死ぬんだからな」

―翼の呼吸、伍ノ型 全翼九連―

「うおっと、危ねえなア」

妓夫太郎は自らの細い体を操り九つの刃を避ける。

避け切った瞬間、妓夫太郎は鎌を構えて技を繰り出す。

―血鬼術、飛び血鎌―

「お前の方が危ねえつつの」

感覚で毒がある事を察知した虎咲は立体機動で地上に降りる。

妓夫太郎も追隨するように地上に降り立つ。

その時、街の明かりに照らし出された虎咲の顔を見て

妓夫太郎はいきなり怒鳴り出した。

「いいなア！お前のその顔オ！綺麗に整ってやがるじゃねえかア！

さぞ女にモてるんだらうなア！妬ましくてしょうがない！」

「は？」

虎咲には妓夫太郎の言っている意味が分からなかった。

彼は自分の顔に自信が無い。

鏡を見る度に血で汚れ、迷彩服を着た過去の自分が浮かぶからである。

―翼の呼吸、参ノ型 真・為虎傳翼―

「お前は、俺の触れちゃいけない逆鱗に触れた。

絶対に殺してやるよクソツタレ」

―翼の呼吸、弐ノ型 真・全翼無連―

絶対に逃れられない無数の刃が妓夫太郎に放たれる。

瞬間、妓夫太郎は信じられない跳躍力で飛び上がり、全ての刃を避け切る。

「やっぱりお前はいいなア、

あの方がお前に固執するのがよく分かる。

けどなア、毒はどうかかなア？」

―血鬼術、飛び血鎌―

妓夫太郎の血鬼術は種類が多いわけでは無い。

それ故に攻撃が単調気味になってしまふのだが、

超強力な毒でそれらの短所を相殺している。

それこそ、ここ百年彼が上弦ノ陸として居座り続けている理由だろう。

「うおっと、危なかつたな」

虎咲は立体機動で飛び上がり、

ガスを調節して空中で体を捻りながら血で出来た刃を避ける。

「畜生が」

「翼の呼吸、伍ノ型 真・集翼九連
純正より威力を増した『真技』。」

ただでさえ一発一発の威力が高い集翼九連が強力になったらどうなるのか。この九つの刃は誰であろうと、鬼であろうと、上弦であろうと、必ずその身体を引き裂くべく飛翔するのだ。そう、こんな風に。

「ガ!？」

集翼九連の刃は威力が増しただけではない。

速度が若干落ちた代わりに、追尾機能が追加された。

さらに、刃自体が銃弾のように高速で回転するため、

相手の身体を削るだけでなく文字通りズタズタに抉り取れるのだ。

この場合の相手は、勿論妓夫太郎の事である。

絶対不可避の九つの刃が、妓夫太郎の両腕を消し飛ばす。

「お前はもう終わりさ」

「似の呼吸、参ノ型 絶対領域・改」

「何が終わりだってエ？俺の首はまだ傷一つ付けられていねえよ」

「いや、もうお前の負けだ。」

「教えてやるよ、時間をかけたのがお前の敗因だ」

虎咲が刀を上突き上げた瞬間、妓夫太郎が電灯に照らし出された。

隊士達が複数のMG42、保式、三式、十三式を妓夫太郎に向け、引き金を引く。その刹那、四方八方から妓夫太郎に向かって

7.92mm、13.2mm、7.7mm、6.5mmの弾丸が放たれる。

毎秒換算にして数百発もの銃弾が妓夫太郎の首を屠るべく飛翔した。

着弾した時の爆炎で妓夫太郎が一瞬で視認できなくなり、

虎咲達は目を凝らしながら爆炎の中心に向けて銃を向ける。

「やったか？」

「あんだけ撃ち込んだんだ！死んだに決まってる！」

「いない？じゃあ死んだのか……」

その瞬間辺りが喜びに包まれるが、

護柱隊の児珠は顔を引きつらせながら口を開く。

「死んでない……」

「児珠？お前何言ってるんだ？アイツは確実に死んだだろ。」

ほら、鬼つて血しか残らないじゃないか」

機関銃壕にいた分隊長が横にいた児珠に言い聞かせる。

だが、それだけでは児珠の混乱を収めることは出来なかった。

「上弦でもあれは反則だろ！アイツ！

どこかに行ったように消えたぞ！」

「その声は児珠か!?それはどういう事だ!?!」

「虎咲さん！アイツは殺されて消えたんじゃない！」

自分からどこかへ消えたんだ！意地汚い笑顔を浮かべながらどこかへ！」

悪夢は続く。

どこまでも、彼を殺すまで。

「カー！緊急招集！吉原遊郭二上弦ノ陸襲来イイイイ！！」

「上弦ノ陸!?高浪!本当に上弦ノ陸なのか!？」

先程まで戦闘していた上弦ノ陸が、

第二清水町から十三キロも離れた吉原遊郭に出現している、

この伝令に現場はさらに混乱する。

「いや、あり得る！奴がもし別の個体に瞬間移動できるなら！

現実的じゃないけど理屈は通ってる！

それだったらさつき消えた理由も分かる！」

児珠は頭を抱えながら捻り出した自らの思考を広める。

だがそれは同時に、相当な危機が吉原に迫っている事を意味していた。

「クソが！高浪!ここから吉原までどのくらいだ!」

「通常デアレバ:一時間半モカカルゾ!間ニ合ウハズガナイ!」

「やってみなきやわかんねえだろ!」

虎咲は立体機動装置の側面にあつた赤いレバーを下げる。

それと同時に虎咲は立体機動で吉原へ向かう。

「やっぱり加速がイカれてんなあ!鐵火山さんよお!!」

先程虎咲が操作したレバーは、

立体機動装置の制限を解除する所謂限界突破のような物。

為虎傳翼使用時に真価を發揮しその効果は絶大だが、

使用時間が一時間経ったところでレバーを切らないと

一分で立体機動装置の中のファンが焼けただけ、

最悪の場合装着中に爆発する可能性があるのだ。

ファンがガスタービンに交換されたのはこのためである。

その速度は、鎧烏でも速い部類に入る高浪をも凌ぐほどの速度になっている。

無論こんな化け物を素人や常人が使えるわけなく、

使用できるのは虎咲だけとなっているのだ。

「クソ野郎じゃんかよ！上弦ノ陸つてのはー！」

いくら悪態を吐いたところで、

吉原での戦闘はもう始まってしまっているのだ。

「よくもまあ二回も俺の逆鱗に触れやがって！」

決めたぞ上弦ノ陸！今夜が貴様にとつて最期の夜だ！

為虎傳翼と立体機動装置から発せられた赤い光が、闇夜の中で鈍く光った。

第參拾漆話 赫刀と鳥

虎咲は道無き道、空を進む。

もう地上ですらないとか突っ込んではいけない。

「あと……もう少しだ……頼む……もつてくれよ……！」

懇願するように呟いた虎咲は、

立体機動装置のレバーの横にあるガス残量計を確認する。

（残りは……あと三十分か……！）

「カー！吉原マデアト五分!!」

高浪の声に虎咲は視線を下に向けた。

ある程度電化されたとはいえ、未だに行燈が残る吉原の花街が彼の目に入る。

本来だったら建物が整然と並び、遊び人や遊女などが街を闊歩しているはずだが、

そんな光景は今の吉原には無かった。

「やっぱり被害が出てるな……間に合わなかったか……」

虎咲は奥歯を噛みしめながら呟く。

しかし今から出てしまうであろう被害者を減らすべく、
虎咲は降下を開始した。

降下している最中、虎咲の目は瓦礫の中で倒れていた天元、善逸、伊之助を捉え、
脱力して膝をついてしまい、妓夫太郎に散々煽られている炭治郎を見た。

「くたばれ……！」

「翼の呼吸、伍ノ型 真・集翼九連」

九つの刃が、今まさに炭治郎を襲おうとしていた妓夫太郎に突き刺さる。

その刃が妓夫太郎の首を切断する事は無かったが、

妓夫太郎の左半身を消し飛ばした。

「よくもまあ間に合うなあ！」

あの方がお前を化け物呼ばわりするのもよく分かる！」

「俺は自分の逆鱗に触れた鬼は必ず殺すって自分に誓ってるんでね。」

その誓いを守るためだったら何だってしてやる。

どこにしようと、どんなに離れていようと、

その鬼を見つけるまで俺は止まるつもりはない！」

「まあいい！お前も今日で死ぬんからなあ！」

そんな誓い、叶えられるわけないんだよお！」

―血鬼術、

全方位に毒の刃が放たれる。

技が放たれた時点で回避する事が不可能だと断定した虎咲は、脱力していた炭治郎を回収して立体機動で離脱する。

「虎咲さん!?!今は別の任務だったはずじゃないんですか!?!」

「話は後だ!今はどんな状況なんだ!?!」

炭治郎は口を開いた。

虎咲はその絶望的な状況に目を見開き、

それと同時に額に青筋を浮かべ、刀を今までに無いほど強く握った。

その時、虎咲の日輪刀の刃が赫くなっている事など誰も知る由もなかった。

く四十五分前く

炭治郎、伊之助、天元は自らの頭部を腕に抱えた鬼、堕姫と対峙していた。

堕姫の目には「上弦」と「陸」が刻まれていたが、

もう既に首を落とされておき、普通の鬼だったらもう体が消えていく時間になっている。

そこで、天元を含む三人は目を見開いた。

堕姫は消えずにその場に留まり続けていたのだ。

本来だつたら消えるはずなのに、である。

「うわああああああああんん!!」

首切られちゃったああ!!

コイツら許せないよおおお!!お兄ちゃああああん!!」

「お兄ちゃん」、そう言われて墮姫の背中から出てきたのは、細身で鎌を持った鬼。

虎咲がその時第二清水町で戦闘していた妓夫太郎だったのだ。

妓夫太郎はそのまま墮姫に向き直り、彼女の首を繋ぎ合わせる。

「お前なあ、自分で首ぐらい付けられるだろうがあ。

仮にも上弦なんだからよお」

妓夫太郎は何事も無かつたかのように

墮姫の首を繋ぎ合わせた後に天元に声をかける。

「お前、柱だなあ?」

さつきも柱と戦ってきたぞお。あの街は第二清水町だったかあ?

「ヤツは規格外だったが、お前はどうなんだあ?」

「血鬼術、飛び血鎌」

余裕そうな笑みを浮かべる妓夫太郎と、

緊迫した顔を浮かべる天元が吉原の街道に姿を現した。

それからの展開は、目を覆いたくなる戦闘が繰り広げられた。毒が織り交ぜられた妓夫太郎の攻撃に天元達は苦戦を強いられ、結果的に炭治郎のみが戦闘可能という状況になってしまった。くそして今に至るく

「もう戦えるのはお前らしかいねえんだよなあ。

どうせもう勝てないんだ。そうだなあ…、お前ら鬼にならないかあ？

お前らの実力だったらすぐに十二鬼月になれるぞお」
「猗窩座の報告を聞かなかったのか？

俺は鬼になんて塵みたいな生き物にはならない。

どんなに死にかけようと、どんなに絶望的な状況でも、

俺は絶対に人間という個性を捨てるわけにいかない。

だから、

今ここでお前を斬つてやる」

―翼の呼吸、伍ノ型 真・集翼九連―

―翼の呼吸、弐ノ型 全翼無連・避人建―

―似の呼吸、肆ノ型 圧縮窒素・改―

えげつない量の弾幕と爆圧が妓夫太郎に向けて放たれるが、避けられる。

虎咲は日輪刀を交換し、避けられる事を見越したように虎咲は妓夫太郎の進路に躍り出る。

妓夫太郎は急いで鎌を構え直し、日輪刀と鎌が衝突する。

「どうした!?! 動きに余裕が無くなってるんじゃないか!?!」

「黙れえ!」

―翼の呼吸、壱ノ型 真・雲煙過眼―

―血鬼術、飛び血鎌・乱―

双方の刃が両者の腹を搔つ切る。

「うがつ……!」

「痛えなあ……!?!」

鬼ならば、与えられた傷なんぞ瞬時に再生する。

しかし、妓夫太郎の腹が再生する事はなかった。

虎咲は地面に膝をついて自らの傷を確認する。

脇腹からは血を流し、足には複数の切り傷があるのが分かった。

そして、彼は自らの視界の右半分が無くなっている事に気が付いた。

不規則に放たれた刃が彼の右目を斬り裂いていたのだ。

虎咲はもう見えることのない右目を押さえながら立ち上がる。

「無様だなあ、鬼になればそんな傷なんてすぐに再生する。」

何故かお前が斬った所は再生しないが。

お前ももつて後一時間ぐらいかあ?

それまで、せいぜい足掻いてなあ!」

―血鬼術、飛び血鎌・円―

妓夫太郎を中心にして、螺旋状に刃が振られる。

虎咲は立体機動装置を使用して何とかその場から退避したが、

動きは先程の半分程の速度にまで低下していた。

「動きが鈍くなつたなあ!？」

動かねえと死んじまうぞお!？」

虎咲がその煽りに言い返す事もなく、刀をきつく握り直して息を吸う。

―翼の呼吸、肆ノ型 霧散翼・改―

虎咲は妓夫太郎の両足を切り飛ばし、そのまま彼の横側を通過する。

―似の呼吸、壹ノ型 冬ざれ氷柱―

死体撃ちと言わんばかりの量の氷柱が妓夫太郎に注がれる。

だが、あくまでこれは氷柱であり日輪刀ではない。

止めを刺す技ではなかったが、虎咲は自分の“囧”という仕事を全うした。

「やれ、炭治郎」

「はいー」

虎咲がそう呟いたのと同時に、

太陽のような炎を纏つた日輪刀を持った炭治郎が妓夫太郎の真後ろに出現。

妓夫太郎はそれを察知し、鎌を炭治郎の顎に突き刺すが、

それだけで炭治郎を止める事は出来なかった。

―ヒノカミ神楽 灼骨炎陽―

両手でしつかり刀を保持していた炭治郎が、
円を描くように妓夫太郎の首を撥ねたのと同時に、
そう遠くない場所で雷鳴が響き渡る。

「この音…善逸か…!」

「おい虎咲! 紋逸が帯女の首を斬ったぞ! 俺達の勝ちだ!」

伊之助が声を張り上げる。

虎咲はその言葉に安堵し、膝から崩れ落ちる。

だが、まだ為虎傳翼は解除していない。

虎咲はハッと息を呑み、立体機動で炭治郎の元に向かい、彼を突き飛ばす。

「畜生! あの野郎!」

「来るぞおおおおお避けろおおおおお!!」

虎咲と天元が叫んだ直後、辺りに黒い旋風が発生し、

妓夫太郎の渾身の、最期の一発が放たれた。

―血鬼術、円斬旋回・飛び血鎌―

辺りを轟音が支配し、

何も見えない程の砂塵が巻き上がる。

「んあ…?」

虎咲は目を開ける。

だが、やはり右半分の視界は無い。

残った左の視界で辺りの状況を確認する。

辺り一帯の長屋や屋敷は倒壊し、死者こそはいないものの重傷者があちこちに散在しているような状況に、虎咲は頭を抱えた。

(そういえば解毒が先か…)

虎咲はそもそも体が藤の毒に汚染されているため、

同じく妓夫太郎の毒をくらった天元よりは毒の影響が少ない。

故に、バケモン…しのぶが調合した解毒剤が効くかどうか分からないが、

虎咲は一か八か、その注射器を自らの腕に突き刺した。

(天元も毒をくらったのか…)

アイツはどうなってるんだ…?)

「は…?…」

あまりに素つ頓狂な声が彼の口から漏れる。

虎咲の少ない視界に入ったのは、

天元が禰豆子によって燃やされていた様子だった。

「森岡」

倒れている虎咲の真上から、
呆れたような声が聞こえる。

ネチっこいことで有名な、蛇柱の伊黒小芭内である。

「その声は……小芭内か……」

「胡蝶じゃなくて悪かったな。」

それにしてもお前はなんだ、

上弦ノ陸“ごとき”にここまでやられるとはな」

「今までが異常だったんだ。」

これが普通さ、為虎傳翼さえ無ければ柱にも及ばない」

その途端に小芭内が鞘に入っている日輪刀に手をかけ、

恐ろしく低い声で虎咲に言い放つ。

「それが謙遜だつて言うならその残った左目に日輪刀突き立ててやる」

「それはやめて（切実）」

小芭内は冗談だと言いながら日輪刀から手を離し、

戦闘が終わり、無残な姿になった吉原の花街を見て呟く。

「お前と宇髄だけか？ 生き残ったのは」

「いや、生き残ったのは俺達だけじゃない。」

アイツらが、お前の大嫌いな若手がな」

「まさか、生き残ったのか？」

この戦いで、竈門炭治郎が」

「驚くのはまだ早い。

今回の上弦は二体それぞれの首を同時に切らなければならなかったんだが、

その首を撥ねたのは俺達じゃない、若手の野朗共さ」

「…」

何とも嫌そうな顔で小芭内は破壊跡に目をやる。

虎咲もその視線の先を見ると、

炭治郎や善逸、伊之助が喜び合っている姿が目に入った。

「じゃあ俺は宇髓の所へ行つてくる。

それまで寝るな、分かったな…!？」

小芭内は、虎咲を見て言葉を失う。

虎咲は、その場で目を閉じていた。

「おい森岡。森岡!!」

小芭内の呼び掛けに彼が答える事はなく、

そのまま彼は、意識を手放した。